

ちぎゅうけん



続・コンヴィヴィアルな社会へ



第10回地球研東京セミナー  
地球環境と生活文化  
——人新世における学び

報告書





# 続・コンヴィヴィアルな社会へ

第10回地球研東京セミナー  
「地球環境と生活文化－人新世における学び」

報告書

総合地球環境学研究所 広報室 編

第10回地球研東京セミナー

# 地球環境と生活文化

——人新世における学び

Global Environment and Lifestyle: Learning in the Anthropocene III

2018年12月15日(土)、16日(日)

会場：東京大学駒場キャンパス 学際交流ホール (15日)

東京大学本郷キャンパス ライブラリープラザ イベントスペース (16日)

主催：大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 総合地球環境学研究所

共催：東京大学大学院博士課程教育リーディングプログラム

「多文化共生・統合人間学プログラム (IHS)」



## はじめに

---

日々の暮らしも、デザインも、私たちはしばしば、その答えを「シンプルさ」に求めます。とはいえ、あらためて「シンプルに生きる」とはどういうことかと問われると、ちょっと考え込んでしまいます。しかも、そのような個人の生のありかたは、広く地球や社会の持続にどう関わってくるのでしょうか。

作られた物を消費する力から、既にある物を探し出す力へ。私たちが価値を置く力が変わるとき、私たちにもきっと大きな変化が訪れるはず。そんなイメージをもって企画されたのが、今回の東京セミナーです。民主主義をテーマにした前回から、今回は日常に扱う物に焦点を当て、生活文化の側面から人新世を考えることにしました。

前回の「地球環境と民主主義－人新世（Anthropocene）における学び」に引きつづいて東京大学大学院博士課程教育リーディングプログラム「多文化共生・総合人間学プログラム（IHS）」との共催企画です。

今回は、日本各地から集まった博士課程リーディングプログラムの履修生等と地球研の研究者による16件のポスター発表を受けて、無印良品の商品開発に携わってきた矢野直子さん（株式会社良品計画 生活雑貨部 企画デザイン室長）と、哲学者の鞍田崇さん（明治大学理工学部 准教授）による講演と対話を行い、翌日にポスター発表者間でふりかえる、という構成をとっています。

このブックレットは、参加したリーディングプログラム履修生たちと地球研の研究者が、2回にわたる哲学対話を含む2日間に渡るメニューをこなした内容をまとめた記録集です。また、巻末に東京大学 IHS との3回にわたる共催企画を見渡した企画者間の放談を掲載しています。

表題は、前回に続き「コンヴィヴィアル（自立共生）な社会」としました。それは、人間の本来性を損なうことなく、他者や自然との関係性のなかでその自由を享受し、創造性を最大限発揮させていく社会、技術や制度に隷従するのではなく、人間にそれらを従わせる社会（<http://www.chikumashobo.co.jp/product/9784480096883/>）です。1973年にイヴァン・イリイチが提示したこの構想に対し、今の私たちは何と答えればよいのでしょうか。このブックレットを手にとられた方が、何らかの形でその答えに近づくきっかけを得られたとしたら、この企画の目的は達成されたといえそうです。

平成31年3月

第10回地球研東京セミナー 報告書 編集代表 熊澤 輝一

# 目次

---

はじめに .....	3
プログラム .....	5
<b>I. 講演の部</b> .....	<b>7</b>
1. 基調講演 .....	9
2. 話題提供 .....	19
3. 対談 .....	32
<b>II. ポスターセッションの部</b> .....	<b>51</b>
1. ポスターの題目と発表者 .....	52
2. ポスター発表要旨 .....	54
<b>III. 対話ワークショップの部</b> .....	<b>83</b>
<b>IV. 地球研と東大 IHS による東京セミナー     を振り返る</b> .....	<b>89</b>
付録 .....	113

第10回地球研東京セミナー  
「地球環境と生活文化——人新世における学び」

プログラム

12月15日（土） 会場：東京大学駒場キャンパス 学際交流ホール

10:00 | ポスターセッションと対話ワークショップ

事前に募集した地球と地域の持続性にかかわる様々なテーマによる、大学院生や研究者のポスターを展示し、発表者同士でのポスター発表と対話ワークショップを行いました。

講演 総合司会 阿部 健一 総合地球環境学研究所 教授

13:00 | 開会挨拶

13:20 | ポスターフラッシュ発表（各2分）

14:00 | 休憩・ポスター展示

15:00 | 基調講演  
「ローカルとグローバル、今に生きる民具を考える。」

矢野 直子 株式会社良品計画 生活雑貨部 企画デザイン室長

15:30 | 話題提供  
「いまなぜ民藝か？」

鞍田 崇 明治大学理工学部 准教授

16:00 | 休憩・ポスター展示

16:10 | 対談「地球環境と生活文化」

矢野 直子×鞍田 崇

進行：梶谷 真司 東京大学大学院総合文化研究科 教授

17:00 | 閉会

12月16日（日） 会場：東京大学本郷キャンパス ライブラリープラザ イベントスペース

9:30 | 対話ワークショップ

東京大学 UTCPI/IHS 研究員がファシリテーターを務めました。

11:00 | 閉会

※講演の様子は、地球研公式 YouTube チャンネルにてご覧いただけます。

<https://www.youtube.com/user/CHIKYUKENofficial>





## I . 講演の部

矢野さんの基調講演は、無印良品の事業展開の紹介を通じて、感じ良い社会へ向けたデザインのあり方についてお話いただきました。鞍田さんの話題提供では、民藝の取り組みを現代においてオルタナティブな暮らし方を追求する人たちに重ねながら、この時代にモノと向き合っていくことの意味についてお話いただきました。

その後、梶谷さんによる進行のもと、お二人の対談を実施し、Twitterからの質問にも答えていきました。

ここでは、基調講演と話題提供の2つの講演要旨、対談の記録をご紹介します。これらは、先立って行われたポスター発表の内容も参照しつつ進められました。



## 講演者紹介

### 1. 基調講演

**矢野 直子** (やの・なおこ)

株式会社良品計画 生活雑貨部 企画デザイン室長



東京都生まれ。多摩美術大学卒業後、1993年、株式会社良品計画入社。2013年より、生活雑貨部企画デザイン室長を務める。2014年より多摩美術大学統合デザイン学科非常勤講師。

### 2. 話題提供

**鞍田 崇** (くらた・たかし)

明治大学理工学部 准教授



兵庫県生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科修了。専門は、哲学・環境人文学。地球研を経て、2014年より現職。著書に、『民藝のインティマシー』（明治大学出版会 2015）、『「生活工芸」の時代』（共著・新潮社 2014）など。

## 1. 基調講演

# ローカルとグローバル、 今に生きる民具を考える。

株式会社良品計画 生活雑貨部 企画デザイン室長 矢野 直子

### 0. インTRODクシヨN

皆さん、こんにちは。良品計画生活雑貨部の企画デザイン室長の矢野と申します。今日はこのように若き研究者の皆さんの前で話ささせていただくことを光栄に思っております。梶谷先生、呼んでいただいてどうもありがとうございます。30分という限られた時間なので、テーマに沿ってと思うのですが、なぜ民具かという話は後半にお話すると、後で鞍田さんとお話したいと思います。まずは、せっかくですので、無印良品が今どんなことをやっているか、この中で無印良品に行ったことがないという方はいらっしやらないといいなと思いつながら、話をさせていただきます。

今の様々な問題をつぶさに研究し、そして解決していこうという研究をいくつも見させていただいたんですけど、私たち無印良品は製造小売業で、自分たちでものを作り、自分たちのお店をもって販売するという商いをやっております。その中でデザインはとても重要で、一つのものづくり、一つのプロダクトをデザインするということから、今少しずつ意義が広義に広がっているような気がしています。なので、タイトルとしては「デザインで感じ



良いから感じ良い社会」ということで、無印良品がどんなことをやっていけるか、役に立っていけるかということをお話したいと思います。

## 1. 無印良品

ここにいらっしゃる多くの皆さんがまだ生まれていない1980年に、無印良品は西友というスーパーのプライベートブランドから始まりました。今日の皆さんの2分間のプレゼンでどなたかが言っていたのですが、高度経済成長期真っ只中の1980年は、そのときからちょっと問題視されてきた大量生産・大量消費ということが楽しくてしょうがなかった時代です。私は高校生でした。なので、大学に入れば私もブイブイいわせられるんだなと思っていたんですけど、あっという間に残念ながらバブルも崩壊してしまって、きっと鞍田先生も私もバブルの恩恵を受けていない世代、ギリギリがっかりの、地道に社会人を続けているサラリーマンでございます。

消費社会へのアンチテーゼから始まった無印良品なんですけど、これが1980年に始まった40品目といわれていて、食品が8割で、2割がトイレットペーパーとか消費財でした。その中で今でも大事にしているんですけど、無印良品がよく「シンプルですね」「ナチュラルですね」と言われるんです。それはあえてそういうふうな指向性でやっているわけではなくて、ここに示す三つを大事に守りながらものづくりをしているからだと思って帰ってくれたら嬉しいです。素材を選択しているということ、適材適所で素材を見極めているということ。無駄な工程を見直して省いていくことでよりシンプルにすること。例えば、その時代のポリプロピレンの衣装ケースには皆かわいい花柄がついていました。けれども、もしかしてそのプリントを取ってしまえば、もっと安価でもっとシンプルで、お客様がそこに自分の嗜好性を加えられるものになるのではないかと、ということだと思ってください。そして最後に包装の簡略化。この三つをやるのが無印良品のものづくりのすごく大事なポイントになります。今は7,000品目になっていまして、商品としては衣服雑貨と食品、そして私のいる生活雑貨の3部門が組み合わさって、無印良品ができています。

## 2. フィンランドに共感

ここから、普段ですと無印良品のデザイン手法みたいな話をするんですけど、中にはこれを聞いていただいている方もいらっしゃると思います。せっかくだから今年やった無印良品の新しい活動についてお話ししたいということでお昼をいただきながらガラッと変えてみました。私たちは今、フィンランドでたくさんのプロジェクトを2017年から始めています。「世界一美しい無印良品をフィンランドでつくりたい」というタイトルになっていて、これは2017年の9月に弊社の金井会長がフィンランドにご招待いただいて、そのときに話した講演のタイトルにもなっているんですけど、金井はそれまでフィンランドに行ったこともなくて、行ったこともないのに初めて行ったその日にいろんな大勢のオーディエンスの前で、「世界一美しい無印良品をフィンランドでつくります。初めて来たけどね」という講演をしました。

ちょうど1年前の2017年、東京ビッグサイトみたいなものがヘルシンキにあるんですけど、そこでHABITAREというフィンランドのデザインの祭典がありました。国外の23カ国に無印良品がありまして、トータルで国内450店舗、海外は460店舗の計900強の店舗が世界中にあります。フィンランドにはまだ無印良品がありません。ただ、せっかく講演をやるんだったらフィンランドの方々に無印良品を味わっていただくということで、ポップアップショップをやりました。こんな感じ(写真1)で簡易なポップアップショップだったのですが、大勢のお客様に来ていただきました。5日間の開催だったんですけど商品が全部なくなっちゃって、ショッピングバッグが用意できなかったので無印良品のバケツを用意して、それに入れてお買い物を



写真1 Copyright(c) 2018.RYOHIN KEIKAKU Co., Ltd. All Rights Reserved.

してもらったんですけど、それすらもなくなっちゃった。フィンランドの、ヘルシンキの人たちが皆、無印良品のバケツに物をいっぱい詰めて歩いて帰ってくれたという、そんな嬉しい出来事がありました。

このときに、さっき見せたような「無印とは」というお話を金井がしまして、そのときからいろんなプロジェクトが始まりました。まず2019年の2月、フィンランドにお店をつくるべく販社を立ち上げまして、ちょうど今から1年後に1千坪のお店をヘルシンキにつくる予定になっています。1千坪というと有楽町にある大きな無印良品、行ってくださった方がいると嬉しいんですけど、そこと変わらない規模なんですね。この規模自体にびっくりしました。フィンランドは人口が550万人しかなくて、そこにそんな大きい店をつくるんだというのが実際ちょっと社員としてもびっくりしたんです。1千坪で叶えたいすごく大事にしていることは、もちろんお買い物をしていただく、売り上げをつくるということは商売をしている私たちにとっては大事なことですけど、フィンランドのヘルシンキの皆さんがここに集まり、コミュニティを使って時間をシェアする場所になってほしいということが大きな目的となっています。ですので、売り場以外にも、Open MUJI という名前にしているんですけど、そんな会場をつくって、本が読めたり、様々な活動ができるような大きなお店をつくらうと思っています。

私たちがこの1年くらい何度も行って、フィンランドで感じている感覚なのですが、すべてのフィンランド人は自然を慈しみ、自然と共生しているという感覚がある。それから、八百屋さんでも市長さんでも皆、デザインという言葉をすごく大事にしている。そしてデザインという考え方が一つのものをデザインすることに限らず、まちをデザインするとかルールをつくるとか、そういうことも彼らにとってはデザインという大きな行為の意味で使われているということに、私たちは毎回ハッとさせられていました。

### 3. 感じ良い社会へのデザイン①－ ホテル、スーパー、道の駅

さっき言った「世界一美しい無印良品」では、お店だけをつくるわけではないです。確かに、一つはお店をつくることなんですけど、例えば宿泊施設をつくったらどうだろうとか、さっきシカの研究のお話（ポスター R-05：原口岳・幸田良介）がありましたけど、フィンランドではジビエを食べることが日常の伝統的な食事で、そういう地場の産物を使った無印良品のレストランができたらどうだろうとか。また、彼らは素晴らしい夏の時間をその国で過ごすことをとても大事にしています。小屋文化なんですね。無印良品にも実は小屋がありますので、小屋を点在させたビレッジがどんなだろうとか、そういう総合的な無印良品を体感したり、フィンランドのいろんなことを学べるようなスペースができたらどうだろうということ。さらに、もう一つ、先ほどお二人（ポスター G-01：Nuren Abedin、G-02：角城竜正）くらいモビリティの研究をしていましたが、私たちは自動運転バスのデザイン提供を依頼されていて、デザイン提供をしています。そんな話もちょっとしたいと思います。

「世界一美しい無印良品をつくろう」ということには実は経緯があって、この1年くらいやってきたことをちょっとご説明します。一つ目は、無印良品はホテルを中国の深圳と北京に初めてつくりました。テーマは「アンチチープ、アンチゴージャス」です。それぞれの国や地域でホテルにはワクワクすることもあればがっかりすることもあるって、社会人になるとよくビジネスホテルに泊まらされて、がっかりすることもあるし、地方とか海外ではちょっとゴージャス過ぎて「このベッドに一人で寝るのか」みたいな、ちょっと身の丈に合わないような感覚も覚えたりします。無印のホテルは、ほどほどで気持ちよくて、その地域に根ざした、そんな旅の拠点になればと思っています。

これは深圳のホテルですけど、無印のホテルには必ず無印良品のお店も併設されているということルールにしています。ホテルで無印良品の家

具とかテキスタイルを使ってもらって味わってもらおうということも、一つの目的になっています。6月には北京にもホテルができました。ここは天安門広場にほど近い、すごく中心街にあるのですが、左側には古くていい町並みの佇まいが残っている保護地区もあって、そこでは若者が建物を上手にリノベーションして、カフェをやったり雑貨屋をやったりということで、古い佇まいと新しい若者の活動が共存するような場所になっています。

そして、今年は大阪の堺、北花田という港のそばのモールに、初めてスーパーを京阪さんと一緒につくりました。世界で一番大きな、1,400坪という広さの無印良品のスーパーなんですけど、先ほど最初の40品目は8割が食品だと言っていたのに、いつの間にか30数年それをすっかり忘れていたことに気づいたんでしょうね。私も気づきました。なぜスーパーをやっていないのかという感じです。その地域、大阪近郊の作物や漁場で捕れた魚、新鮮なものを提供したり、二次加工してその場で食べていただいたり、そんな新しい無印良品が生まれています。

そしてもう一つ「みんなみの里」。道の駅の再生も一方でやっています。よく旅行に行くのと道の駅に行かれると思うんですけど、日本中におよそ1,000ヵ所あるといわれています。最初は自治体の補助金なども出て立ち上がるんですけど、そこからの継続が難しいといわれていて、8割は赤字だということです。とはいえ、すごく農地や漁場のそばのいいポジションにあるんですよ。しかも道のそばで。おじいちゃんやおばあちゃんが丹念に育てた農作物をもって来て、そこで自分たちで売るといいコミュニティの場所にもなっているので、ここはやはり活性化させて、それぞれ地域のコミュニティとして成り立っていったらいいなということで始めています。そこで日々販売していたことは変わらず、そこで集まった作物を使ってカフェで新しいメニューを出して食べてもらったりしています。あと、ここでは家具とかは売っていないんですよ。日常で使われるような消費財を集めて、小さな無印良品がそこに一緒に寄り添っているようなお店を増やしていきたいと思っています。



#### 4. 感じ良い社会へのデザイン②ー 誰もが感じる幸せ、シェア、フラットな関係

Pleasant Life というのは、「感じ良い暮らし」の英語の意味なんです。1960年代のGDPと、今のGDPの比較で、約60倍に増えているんですけど、たぶん1958年の当時は皆が一生懸命復興し成長していこう、そのためにはちょっと皆が我慢するとか共有するとか、希望があったと思うんです。今はどうでしょう、皆さん一生懸命こうやっっているいろんな問題に立ち向かっていますけど、なんとなく不安で利己的になっていて、なんとなく閉塞感を感じている。自分も感じているし、きっと皆さんも感じていることが多いと思うんです。そんな中ではやはりシンプルでケアできて美しく、調和があって共存できるということの場を、私たちはすごく大事にしています。そして、無印良品が到達したいデザインの方向は、相対的に思う幸せではなく、できるだけ誰もが感じる幸せで、それを無印良品が提供できたらと思っています。例えば、iPhoneは若者もお年寄りももっています。LEVI'Sはお金がない人もある人も履いています。WALKMANもそうだったかもしれません。そういうようなものに無印良品も一つひとつのプロダクトがなっていくといいなと思っています。ちょっと動画をご覧ください。(動画を上映)

これは、感じ良い社会に対してどんなことができるかということなんですけど、なんとなく資本の論理みたいなものがだんだん崩れ始めて、だからといって社会主義になるわけではないんですけど、いろんなデジタルが進化していく中で、やっぱりちょっとだけ資本の論理が変わりつつあるんじゃないかということを話しています。例えばこれは一例ですけど、シェアバイクというものが世界で、本当にいろんなシステムを構築して、一つのインフラみたいになりましたけど、その一方で廃棄自転車がすごく増えているのも問題になっています。本当のシェアとはこういうことなのかどうかというのが、まだ私の中でも腑に落ちないところがあるという一例です。

そんな中で、フィンランドを手本にしたいと思っているのは、行政と産学と市民がものすごく透明でフラットで、格差がないことです。ルールを決めるのもすごく早いです。例えば、自動運転のバスがテストランをするとき、

公道を走ってもいいことになっていますし、MaaS (Mobility as a Service) 先進国なのでそれに合わせて法律も変えやすいのです。それも、勝手に行政がやっているわけではなくて、産学と連携して研究し、市民にも了解を得るという三位一体なところが、フィンランドをお手本にしていきたいところです。そんな思いでいろんなプロジェクトをやっています。

## 5. 感じ良い社会へのデザイン③ー 自動運転バス

最新としては、自動運転バスのデザイン提供をしています。去年の金井の講演を聴いて共感してくれた、アールト大学からスピンアウトしたベンチャー企業で、自動運転システムをつくっている Sensible 4 という企業が私たちにデザイン依頼をしてくれました。では、なぜ私たちが自動運転バスのデザインに共感したかということなのですが、一つは、まずこの4人のメンバー (写真2) は、対個人のモビリティの開発をするという考えが全くなくて、とにかく公共のバスをつくりたいということです。ここはさっきの彼 (角城氏) とぜひ議論したいところだと思っているんですけど、もう一つが、どんな気候にも対応するというを最先端でやっているということです。彼らは北極圏で何度もテストランをして、マップづくりをしています。ラップランドという、スウェーデンとフィンランドにまたがる地域で、先週もテストランをやっていたんじゃないかな。今年は特に年明けからいろんな国での自動運転がしのぎを削っているので、どういうグランドデザインをつくっていくかということがすごく大事になってくるのではないかと思います。それ



写真2 Copyright(c) 2018.RYOHN KEIKAKU Co., Ltd. All Rights Reserved.

から、この自動運転バスが少子高齢化、そして過疎地、フィンランドだけではなくて日本でも利用できるのではないかということに、すごく未来を感じています。

デザインは、私たちが身近に感じる、子どものときよくやりましたガチャガチャのカプセルが一つのデザインワードになっています。なんとなく丸っこい、動物のような愛くるしい形がオンデマンド上のマップの上をぐるぐる回っているような、幸せな街の光景をちょっと想像しながらデザインしています。デザインの特徴としては、前後左右対称形ということと、眼のようなライトはもう要らないので、コミュニケーションができるLEDのベルトがライト代わりになっています(写真3)。2019年3月にヘルシンキと、エスポーというアールト大学のある街など3都市でテストランが始まるんです。こんなことをやりながら、これからどういうまちづくりをしていかなければならないかということも、私たちは一緒になって考えようとしています。

## 6. 無印良品の商品は現代の民具になりえているか

もう一つ、では何が民具なのかということですけど、この自動運転バスは一道具に過ぎないと私たちは思っているのと、7,000品目のプロダクトの一つひとつは、皆さんの感じ良いと思うくらいの背景に過ぎないので、そういうものをつくっていききたいということは、バスのデザインをしていても一つのペンをデザインしていても何ら変わらないんですね。そんな意味を込めて、今日鞍田先生は午前中見に来てくださったんですけども、昨日(12/14)から1/14まで、21\_21 DESIGN SIGHT/Gallery 3で、ちょうど本会場では民



写真3 Copyright(c) 2018.RYOHIN KEIKAKU Co., Ltd. All Rights Reserved.

藝展をやっているのですが、そのサテライト企画として「民具展」をやっております。民具という言葉も民藝と同じ、2年くらいしか変わらないんですね。どちらもつくられた言葉なんですけど、いわゆる無名で、その時代の人々のくらしの必要に駆られてつくられた、機能を重視した道具だと思うんですよ。そういう民具は、大阪の国立民族学博物館に一番多く所蔵されていますけれども、それらはやっぱり無駄がないし、機能美にあふれた造形をしていると思うのです。この実験（民具展）は、そういうものに無印良品の個々の商品たちはなりえているのか、現代の皆さんの民具になっているのかという問いかけなので、入場無料なのでぜひ民藝展を見た後見てご意見をいただきたいと思っています。1月に、後追いでやっているんですけど、リーフレットも作成中で1月初めには皆さんに配布できるようにギャラリーに置きたいと思って準備をしています。展示していないものもせっかくなので今回は写真に収めてあります。例えば、MUJIのカトラリーはこんなにいっぱいあるんです（写真4）。昔は、箸一膳で何でも食べられたのに、私たちの食生活は雑食になったなど。これをやっていてすごく思っちゃったんですよ。六角箸もあれば八角箸もあってなんとなく欲深さが見えてきたり、自分の中でもものづくりをする中ですごい気づきのある展示になっていますので、ぜひご覧いただきたいと思います。

このような活動を無印良品はしております。ぜひまた後で鞍田さんといろんなお話ができればと思います。どうもありがとうございました。



写真 4

Copyright(c) 2018 RYOHIN KEIKAKU Co., Ltd. All Rights Reserved.

## 2. 話題提供

### いまなぜ民藝か？

明治大学理工学部 准教授 鞍田 崇

#### 0. イントロダクション

ご紹介いただきました鞍田です。よろしくお願ひします。矢野さんが最前線というか現在進行形の、それこそ僕たちの暮らしをより豊かにしていく様々な努力や試みをご紹介してくれたので恐縮なのですが、僕はその背景にある歴史的なところで、民藝について触れたいと思います。

今矢野さんからもありましたけど、ちょうど先月から六本木にある 21\_21 DESIGN SIGHT という所で「民藝展」が始まっています。画面左がそのチラシですけど、昨日からサテライトとして Gallery 3 という併設の展示施設で「民具展」が始まりました。朝一番、10時に行ってきたのですが、すごく空間がスマートで、今日は本当に天気もよかったです、古いものも新しいものも皆目が覚めたばかりのような感じで、パチクリとした感じが、どちらがどうかではなく使われるものの幸せのようなものを感じさせていただきました。



## 1. 民具と民藝

僕のほうからは言葉の説明をまず簡単にしたいと思います。先ほど矢野さんもちらっと触れられましたけど、「民具」も「民藝」も20世紀の初頭、1920年代につくられた造語です。ご存じのように民藝は、柳宗悦、この駒場キャンパスのすぐ隣にある日本民藝館を創設した思想家が中心になった民藝運動の中でつくられた言葉です。民具は主に民俗学の人たち、メインとなったのは渋沢敬三という、在野ではあるのですが民俗学の発展に寄与された方が中心になって使い始めた言葉といわれています。

実は、東大で柳が講演したことがありました。東大の人類学会で、本郷の方だと思うんですけど、「民藝学と民俗学」という講演をされていて、民俗学と民藝はどう違うのか、それはひいては民具と民藝はどう違うのかという話だと思うんですけど、そこで柳はこの講演の前年に行った民俗学の立役者である柳田國男との座談会を踏まえながら、自分たちの民藝は民俗学と違ってより価値を提案していくような点、古めかしい言い方ですが、「かくあらねばならぬ」という世界に触れていくと言っています。ただ事実を観察し分析して終わるのではなく、それに基づいてそれこそデザインしていくとか、プロジェクションしていくような方向性があり、価値を提起していくことを違いとして認めています。それを簡単に集合で表すと、こういう感じかなと思うんですね (図1)。いずれも生活道具を表す言葉ではあるのですが、民具というものが特にことさらな違いとか価値的な判断をしない言葉であって、大きな集合で表されるのに対して、民藝は明らかに小さなサークルで、選択という眼差しが入っているのです。その選択というのは美的な視点で、生活道具の中でもとりわけ手仕事になる古い道具なんですけど、その中でとりわけ美的な視点でこれはというものを選びすぐってきた世界が民藝でした。

併せて、ここで言っている生活道具というのは、民俗学が扱う民具もそうかと思うんですけど、元々近代化によって忘れ去られようとしていたある種前近代的な、土着の伝統的な生活道具のことを当時は指したと思うんです。いっぽうで、民藝というのは言ってみればそういう過去のものに甘んじず、

そこに手がかりを求めながら、つまり美的な視点から選んできたものに手がかりを得ながら、それを踏まえて今、さらには将来どういうくらしや社会、ものづくりを営んでいくのかということを創造していく面もあります。だから輪っかははみ出していくというイメージで、僕は捉えています。柳がこういう図を描いているわけではないのですが(図2)、彼をはじめとした民藝運動が志したことを簡単に可視化するとこういうことだったかと思うんですね。

実際彼も『工藝の道』(※1)という代表的な著作の中で、自分たちのことは「価値顛倒」、これまで当たり前だったことをひっくり返す、これまで見過ごされていた世界に光を当てるような、単に価値を提案するだけではなくてひっくり返すくらい勢いで、今まで世間が当たり前と思っていた世界に甘んじず次の世界の構築へと積極的に進んでいくという話をしているんですね。

## 2. 民藝は人間性の回復をめざした

柳は1889年(明治21年)の生まれなんですけど、ちょうど同い年の哲学者のハイデガーという人がいました。ハイデガーもよく似た思想的な歩みを遂げるのですが、戦後の講演『建てる・住まう・考える』の中で、住まうことに固有の危機があると、それは人間、とりわけ現代人が故郷を失っている

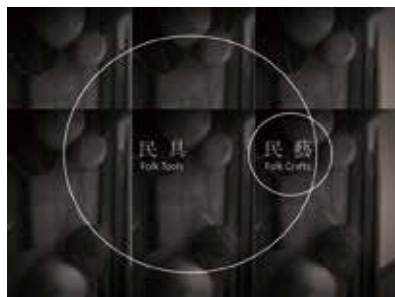


図1

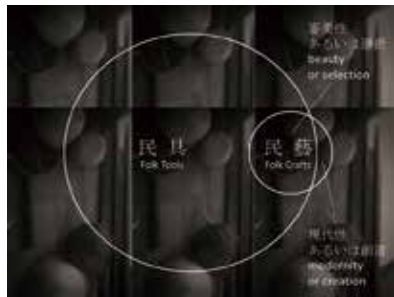


図2

※1 柳宗悦(2005)『工藝の道』, 講談社学術文庫, 368pp.

ことで、ドイツ語では Heimatlosigkeit という言い方をするんですね。そこには本来の故郷、これはあくまでもメタファーですけど、実際のふるさとはなくて、これは時間があればいずれまた議論したいと思いますが、いずれにせよあるべき人間性を失ってしまっている状態のことをこういうたとえで呼んだんですね。逆に言うと、あるべき人間性の回復を目指していたのが、広い意味でのハイデガーの立場でもあったと僕は思っています。

それはきっと民藝にもあったと思うんですね。ひっくり返すべき、つまり近代への歩みの中で、今に至るまでの系譜としてはつながっていると思うのですが、彼らが求めたあるべき社会、あるべきくらしの姿というのは、言ってみれば人間性の回復みたいな方向性をもっていたのではないかと思います。

それをどこに求めたかかという、それは選んできた世界ですよ。かつて生き生きとした生活を営んできた世界に彼らは参照例を求めたわけです。それはどういう世界かという、自然と結びついた美しさの世界でした。自然の素材、地域の技術、その土地の風俗・風習・習慣といった土地との結びつきや自然との結びつきを色濃くもった道具たちだったわけです。

写真(写真1)は、初めて民藝が建築として手がけられたときの建物ですが、その建物について建築家の堀口捨己は、「これは自然美にも比すべき美の世界だ」と評しています。人間性の回復としての現代性の追究、creationと並んで、図で示したもう一つの selection あるいは審美性の方は自然回帰といってもよいでしょう。ちなみに、これは地球研の英語名称に合わせてみたんですけど、Research Institute for Humanity and Nature ですよ。民藝の中にもそういう Humanity and Nature というもののあるべき姿を探るところがあったのだと思います(図3)。言ってみれば民藝はある種のオルタナティブな追求、民具という大きな領野から、それを手がかりにしながら次の社会、次の生活、ものづくりを通して、現状メインストリームとなっている姿の中に沈み込んでしまうのではなくて、そこでは得られなかった別の選択肢を模索していたと思うのですが、それは取りも直さずあるべき人間性と自然、そのつながりを模索する中でのことだったと思うんですね。

ざっとこれが民具と民藝の簡単な違いというか、民藝がことさら使命としてもっていたことです。おそらく良品計画さんがやっておられる仕事はこの



二つを行き来している感じで、まさに時代の最先端で取り組んでおられるのだらうと思うのですが、言葉の成り立ちからはそういう違いがあったということです。どちらがいい、悪いという話ではないことは言うまでもありません。

### 3. Off-Grid な人たちに柳らが重なる

そういう動きがたぶん今、社会の中でいろいろ出てきていると思うんですね。昨年渋谷のヒカリエで、Off-Grid Life という言葉をキーワードに掲げた展覧会が行われました。d47 ミュージアムという、47 都道府県から毎回何がしか代表例を取り上げて展示企画を手がけているギャラリースペースで、このときはこれからの暮らし方を Off-Grid Life と呼んだんですね。環境絡みのことをやっている、エネルギー問題などでよく耳にする言葉かと思うのですが、グリッド、設定された電力網に対して、その電力網のネットワークの中に取まらず自家発電や地域電力をやっていくのが Off-Grid ですよ。でも、ここではただのエネルギー問題だけではなくて、既存のネットワークや既存の価値観から敢えてはみ出して、農業やゲストハウス、子育てなどいろんなシーンで Off-Grid な人が出ていて、それを一回総ざらいしてみようという企画でした。この辺にもある種オルタナティブな追求というか、民藝から百年経っているわけですが、その現代版の動きが出てきていると思うんですよ。



写真1 出典「三國荘：初期民藝運動と山本爲三郎」  
(アサヒビル大崎山崎山荘美術館, 2015.12)



図3

僕自身はこういう仕事をしている中で、地球研のおかげでフィールドワークという大事なツールというかメソッドを手にして各地を回るようになったのですが、その先々でそれこそ Off-Grid な人たちに出会います。例えば新潟で写真集だけの本屋さんをやっている小倉快子さんという人とか、鳥取の倉吉の近くの中山間地で漆の修復家として、いわゆる割れた器などをつなぎ合わせる金継ぎなどを手がけている河井菜摘さんとか。彼女は元々関西の人なんですけど移住して、しかも東京にも拠点をもって、関西と東京と倉吉で3拠点生活をするような営みをしている人です。あるいは、民藝を扱うお店の中にも、従来の民藝店とは趣の違うような試みをしている所として、岐阜県の高山の中山間地でやはり古民家を移築して生活全体を自分たちでつくり直すというスタンスでやっている「やわい屋」の朝倉佳子さんという人がいたりします。

こういうシーンが今出てきているというところに重ね合わせていくと、先ほどまでは言葉の説明として時代がかったお話になりましたけど、柳らが100年くらい前にやったことが今まさに手探り状態で、それこそ20代、30代くらいの若い人たちが盛んに模索しているシーンと重なってくるような気がするんですね。というのは、若かりし頃の柳宗悦もそうだったからなんです。これは彼が20代の頃の写真ですが、思いきりガンをつけているというか、こいつとは友だちになりたくないなという感じですけど、当時彼は白樺派で、東京から抜け出て我孫子に移住していたんですよ。なんか全然変わらない気が僕はするんですよ。格好こそ着物を着ているんですけど、このときの柳の藐視みしたような顔つきと、地方で今アンテナを立ててエッジのきいた仕事をしている人たちは何も変わらないんじゃないかと思います。

#### 4. 用と美

何も変わらないとはどういうことかという、実は民俗学も当時は同じ気分だったと思うんですね。柳田國男が35歳のときに書いた代表作が『遠野物語』(※2)です。この『遠野物語』の序文を読み直して、ビクツとした言

葉があったんですね。序文の第1段落を柳田は、「願わくはこれを語りて平地人を戦慄せしめよ」という言葉で結んでいるのです。逆に言うと、彼は民俗という近代によって駆逐されようとしている、あるいはそのまま無視されようとしている山の人たちのくらしや生活をもって、近代だ、オッケーだと言っている平地のくらしの人たちを見返してやるというか、「お前たちのくらしは本当のくらしか」というメッセージを託していたと思うんですね。民具あるいは民俗も決して時代と向き合わずに単なる記録に終わったわけではなくて、やはりなにかが時代の時代へと向かう立ち位置をもっての世界だったと思うのです。

そう考えますと、一応民具と民藝を区別して考えたんですけど、本来追求されていることは同じかなという気もしてくるんですね。考えてみると、民藝が追求したことは自然への回帰と人間への回帰をただバラバラにやったわけではなくて、その二つのあるべき連関を問うたと思うのです。必然的な連関と言ってもいいかもしれません。それがかつては民具の世界には明らかにあったと。それを現代の仕方でどういうふうに戻していくのかを考えようとしたのが民藝の試みだったのだらうと思うんですね。言ってみれば、民藝というのはそういう意味で民具の中の最も民具らしい要素を、その自然系と人間系の二つの営みの連関、その結果としての美しさの世界に見出したわけですが、その上でもう一回それを現代へとフィードバックして、現代の形は何なんだということで、民具の中の本質的なものを現代へとどう継承していくのかという取り組みだったと思うのです。(図4)

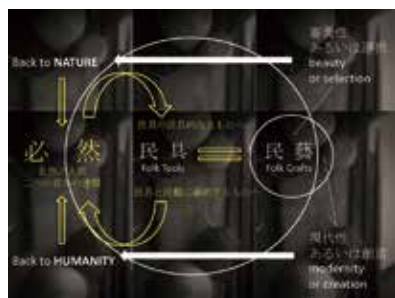


図4

※2 柳田國男 (2016) 『遠野物語』, 新潮文庫, 164pp.

どう取り組むのかというために柳宗悦という思想家が注目したのが「用と美」という世界でした。ここには、「用」に結びついた美しさがあるということです。よく「用の美」と言われたりもしますが、柳はあまりこの言葉を使っていないようで、最近では研究者の間でも「用と美」という言葉を使うよう心がけているそうです。代表作のもう一つに『民藝とは何か』(※3)という本があるのですが、この中で「用」についてのこんな説明があります。彼は「用というのは、単に物への用のみではないのです。それは同時に心への用ともならねばなりません。ものはただ使うのではなく、目に見、手に触れて使うのです」「用は美を育む大きな力なのです」と書いているんですね。大事なのは、心への「用」というポイントがあったことが一つ、そして最後の一文中にあるように、まず「美」ありきではなくて「用」という大きな地平のある中から「美」が育まれてくるという、「美」に先立つ「用」の世界に注目していると言ってもいいと思います。

これが先ほどの自然と人間の関係性にもつながってくるところかと思うんですけど、こういう言葉は古い民具にも通じるでしょうし、今どういう形で僕らは形づくっていくのかということが問われているということでもあると思います。とりわけ「心への用」というのは難しい言い方ですけども、この辺は後でディスカッションできればと思うのですが、僕らはそもそも物と用とちゃんと向き合っているんだらうかということも一方で考えさせられる側ですね。矢野さんの話を聞いていると、何の問題もなくて心配なさそうな気がしてきたんですけど、一方で僕らはどんどんモノから乖離している生活になっているとも思うんですね。

## 5. モノから離れていっている時代に

写真(※4)は一昨年 NOSIGNER というデザインの活動体がやった展示なのですが、真ん中に iPhone が置いてあります。そこから配電盤のようにた

---

※3 柳宗悦(2006)『民藝とは何か』、講談社学術文庫、200pp.

※4 下記 URL を参照。

NOSIGNER ホームページ内 ギンザ・グラフィック・ギャラリー 第355回企画展「ノデザイナー かたちと理由」  
<http://nosigner.com/ja/case/the-355th-ginza-graphic-gallery-exhibition-nosigner-reson-behind-forms/>

くさん線が出ているのですが、配電盤の先にあるのはたくさんのモノたちだったんですね。デスクトップパソコンがあったりタイプライターがあったり、ポータブルテレビがあったり辞書があったり、カメラがあったりビデオがあったり、地球儀があったり……。つい10年ほど前までは、これだけのモノと一緒に僕たちは住んでいたんですよ。

ところが今は、この薄っぺらい端末一つで済んでしまって、どんどんモノから離れていっている。それは無印良品にも関わっていらっしゃる深澤直人さんも指摘していることです。「次第にかたちが失われ、機能だけが残って動く動きがある。今後、こうした状況はどんどん進んでいくでしょう」(※5)と。それは僕らが望んでいることだしそのことを否定はしません。うず高くモノが積み上がっているくらしよりもよりスマートに生きるという意味では、より心地よい生活を実現するツールであることは間違いないのですが、深澤さんはここで念押しというか、注意を向けているんですね。「その結果モノのない整然としたくらしが可能になるはずですが、ただし、これが機能や効率第一になると、今度はうるおいが欠けてしまう。そこであらためて浮かび上がってくるのが、壁になりきれないものや身体になりきれないものの存在です」とおっしゃっています。これは、無印良品のCompact Lifeというホームページから借用させていただきましたけど、まさにそこを良品計画は考えようとしていると思うんですね。何をかという、我々にとってのうるおいは何なのかとか、要は薄型テレビだったり天井一体型のエアコンだったり、モノがどんどんコンパクトになって生活から失われていく中で、そういう中に吸収されずにくらしに寄り添うモノの存在のあり様はどういうことなんだろうということが、今のこういう時代だから問われているのです。そのときに、柳が見つけた用の世界、「心への用」とか、日を育むベースとしての「用」がもう一回見直されるべきところかと思うんですね。

---

※5 深澤 直人「豊かさの新しいカタチ」 MUJI 無印良品 WEB サイト Compact Life (閲覧日：2019.2.28)  
<https://www.muji.com/jp/compactlife/column002.html>

## 6. 「言いようのない親近感」を現代に探る

そういうことを考えるときに、民藝ももちろん大事なんですけど、民具の世界、あるいは民具とか民俗とかを超えたところにもいくかもしれません。今日、バタイユ（ポスター G-05: 大池惣太郎）をやっていたという人もいらっしやっただのでたぶん通じると思うのですが、『忘れられた日本』（※6）という著作についてご紹介したいと思います。

書いたのは、ちょうど2025年にふたたび大阪万博も開かれることになりましたけど、前の大阪万博で有名な岡本太郎です。岡本太郎は「沖縄文化論」という副題がついたこの著作の中で、すごく重要な指摘をいっぱいしているんですよ。それこそ先ほど矢野さんからもあったように、GDPが1/60だった頃です。1959年に彼は沖縄に行っているんですね。まだ本州の日本も戦後復興で高度経済成長期にさしかかる頃で、まだ慎ましやかな、modestな生活をしていたと思うんですけど、でも同時代の岡本からするとすでに忘れられつつあったものが沖縄にはあったと。そういう発見のルポルタージュなのですが、これはぜひ皆さんも、短くて文章も読みやすいので、ご自身で読んでいただきたいと思います。その最後に、岡本はこう言います。「われわれが遠く捨て去り、忘れてしまったはずの本来の生活の肌理が、意識下の奥底に生きている」と。どんなに時代が変わっても。「一種のキヨラカな呪術のように、われわれを縛りつづけるのだ。そしてそれが何らかの機会、たとえば芸術の表現によってむき出しにされたとき、われわれは不意に、言いようのない親近感をおぼえる。それは生甲斐だからだ」という、なんとも印象的なフレーズで結ばれています。生甲斐といきなり出てきた感じなのですが、このままブツツと物語は終わります。ここで岡本は「芸術の表現によってむき出しにされた」と言っていますが、これは芸術ということに限らず、例えば古い民具や民藝を見たときにも僕らは何か胸騒ぎするように感じるものかもしれませんし、その他にもいろいろとあると思うんですよ。何かそうやって自分たちの中で眠ってしまっているものをもう一回呼び覚ますタイミ

---

※6 岡本太郎（1961）『忘れられた日本－沖縄文化論』中央公論社、159pp.

ングにも今来ているのかもしれませんが。でも、それは何も古いものだけではなくて、最先端のもの、新しいものとの触れ合いや発信のされ方、その心遣いなどを通して気づかされることもあるでしょうし、そこを何か覚醒したい気分は時代の中で起こっているのかなという気がしています。

大事なところとして僕が目指したいのは、ここで岡本が「言いようのない親近感」という表現で表しているところです。決して不気味なものではない。決して自分に無縁なものではない。そういえばそうだった、よく「懐かしい」というフレーズでも表されるものかもしれませんが、それが実は僕らに大きな気づきの一歩、あるいは変化の一歩を踏み出させるということだと思えますね。まさに、実は柳が民藝に見出したのはそういう世界でした。柳は「用」ということを言いましたけど、「工藝の美の本質は親しさである」と。価値をひっくり返すんだといった『工藝の道』の中の、一番冒頭で言っているんですね。これに先立つところから彼は朝鮮の生活文化と触れる中で、民藝という言葉をつくる前にまず実は親しさの世界、intimacyの世界に目覚めていって、それを具体化していったのが民具、民藝との出会いでした。歩みとしてはそうだったのですが、大事なのは近代の幕開けである20世紀初頭に、当時の皆さんくらの世代だった若者がこのintimateな感覚に揺さぶられて新しい言葉を紡ぎ出し、新しい世界を切り開いていったところから100年経って、ご紹介したようないろんなOff-Gridな動きも出てきている中で、僕ら自身がもう一回現代のintimacyみたいなものを探るタイミングに来てるのかな、という点だと思うんですね。

## 6. 日常を紡ぐ先にあるもの

最後に、柳の文章、柳が物とどう向かい合ったのかということですが、すごくいい文章ですので、それをご紹介して僕の話結びたいと思います。

一昨年に日本民藝館が80周年を迎えました。東大の駒場キャンパスでシンポジウムが開かれて、僕もそのとき座談会に登壇させていただいたんですけど、そのときちょうど日本民藝館で開催されていた展覧会に合わせて、雑

誌「民藝」に柳の『買い物』という、短文が紹介されたんですね。この写真はその1960年のものでおじいちゃんになっている頃の柳です。

同じ雑誌「民藝」の73号、1959年の、奇しくも岡本太郎が沖縄に行った、あるいは1/60のGDPだった時代の文章です。盟友でもあった陶芸家の河井寛次郎の、「物買ッテクル、自分買ッテクル」という有名なフレーズがあります。物を買うということは、実は自分を買っているに等しい、物を選ぶということは自分を選ぶに等しいという、河井ならではの文があるんですけど、これにかこつけて柳は、自分にとっての買い物について、あるいは物との出会い方についてのエッセイを綴っているのです。

そこでまず、彼はこう言うんですね。「此の頃の私の感じでは、『物買ッテクル、大勢ヲ買ッテクル』という気持がしてならぬ。大勢の人の心が一緒になるその世界を買入れることにもなる。自分だけを買ってくるのではない。私は物を買うと、悦びを分つ友が何時も欲しい。それで、『物買ッテクル、友買ッテクル』と云い度い程である」と、シャレみたいなんですけど、こう言うんですね。さらに、「処が私は次のようなことも又気づいた。『私が物を買集める』というが、寧ろ『物が私を買う』のだと。否、本当は『物買ッテクル』のは、自分を物の友達にさせて貰うことである。切っても切れぬ間柄になることである。否、この頃の私の気持では『物買ッテクル、師ヲ見ツケテクル』という感じが強い」と。

先ほども非人間中心主義という発表(ポスターG-09: 時野真彩)があったんですけど、物の側が自分を引き寄せているみたいな話をしているわけです。また、この文章ではこんなふうに言っています。「考えように依っては、そこに自分の住む故郷、やすらいの場所を見出しているのだとも云える。美しい物を愛するのは、そこに一番慕わしい我が安住の家があるからとも云える」と言っていて、図らずも故郷喪失という言葉も紹介しましたが、どこか根無し草になったような形で浮遊してしまうところがあった近代社会の中で、もう一回モノを軸にして自分たちの身近なところから安心、安全、居心地のよさのようなものをつくり出していくことで、もう一回失われた故郷を回復しよう、みたいなところがやはり民藝の世界にもあったのではないかということをお話かがわせてくれる短文です。でもそれは日常の些細な買い物の中でみられる



ようなもので、急に大きな社会運動を起こすとか、革命を起こして政権をひっくり返すようなものではなくて、大事なのは個々のモノとの出会いからそれを紡いでいったということだと思うんですよね。

今日は人新世という、地質学年代を更新するようなでっかいスケールの言葉がありますけど、問われているのはたぶんこの日常なんですよ。日常の中で僕たちがどういう物を選び、どういうふうにそれを仲間と、近い人と共有し楽しむという、そこから始まるんじゃないかということだと思うのです。柳の文章は時としてすごくシュプレヒコールを上げるような勇ましいものもあるのですが、この文章を読んだとき、僕はすごく安心しました。この人も買い物をしたんだと。今も生きていたら無印良品に行ったんじゃないかなと思ったところで、僕の話をつなげていただきます。どうもありがとうございました。

### 3. 対談

## 地球環境と生活文化

矢野 直子 / 鞍田 崇

進行：東京大学大学院総合文化研究科 教授 梶谷 真司

#### 1. 日常というものが閉じがちなのではないか

**梶谷** 僕は、鞍田くんが明治大学でやっている講義で矢野さんのお話を聴かせていただいて本当に感激して、この東京セミナーでも話していただくということでお招きしました。今日また、さらにフィンランドの話聴いて、いわゆる製品づくりだけでない部分を見てすごく驚くと同時に、どこかに MUJI の精神というか、何か通底しているものがある。たぶん皆さんもいい意味で戸惑っておられる部分もあると思うんだけど、これが MUJI だ、だけどやっぱり MUJI だ、みたいなのところがあるので、そのへんをもう少し説明していただければ、と思います。特に、「感じ良いくらし」という言葉が何度も出てくるんですけど、「感じ良い」って何だろう？ それはたぶん民藝にも通じる場所があって、自然と人間の関係というのがいったい何なのかということと、あとは、民藝とか民具というと、なんとなく昔を回顧する、ある意味保守的な感じもするんですけど、同時代だと柳宗悦とか柳田國男な



んかもそうですけど、非常に反体制的、反社会的というか反時代的なところがあります。そこは、無印良品が最初に「反体制」を掲げて始めていくという、ある意味すごく過激な、未来志向でもあり社会に対する批判というところから出ていて、決して保守的なわけではないということとすごく共通している部分かなと思うんですね。今、私たちは柳みたいな人たちをある種偉人として見るわけですが、当時の彼は20代で、今30代の人たちが楽しそうに緩やかにやっているというのと実は重なるんだというのも、今の閉塞した時代の若者にとって励みになると思うんですね。そのへんにも触れながら、お互い話をしていただければと思います。

**鞍田** これは受け売りになっちゃうんですけど、僕が親しくしているプロダクトデザイナーで柳原照弘という人がいます。彼は大阪を拠点に、今は世界を股にかけて活躍している人なんですけど、若い頃にスウェーデンのストックホルムを旅したときのエピソードを聞かせてくれたとき、僕も「ああ、そういうことなのか」と思ったことがありました。それはちょうど今くらいの季節で、若い頃でお金もなく旅をしていたときに、街が夜で静まり返っていたと。日本みたいにワサワサしているんじゃないくて。ふと路地に入ると、路地の方が煌々と明るくなっていて、見ていくと家々がカーテンを閉めずに、出窓の所の表と面している辺りにローソクやランプを置いていたりして、覗くとまるでドラマを観ているような食卓風景がそこに広がっていると。別に演技しているわけではないんだけど、人々は街から引きこもってクロードな生活を夜になってからしているわけではなくて、夜は夜で特に北欧はこの季節になると日暮れも早いということもあるとは思いますが、ちゃんと街に明かりを灯すように家のカーテンを開けて、街に向かって明かりを灯して、自分たちは困らんしている。デザインってこういうことをしなきゃいけないんじゃないか、という話をしてくれたことがあったんですね。それと重なるのが、京大の建築史の西垣安比古先生という人が、「日本は、最近はカーテンをしている人が多い」と。京都生まれの先生なんですけど、「昔はこんなにカーテンをしてなかったんじゃないか」という話をポロッとされたんです。それが二つ結びについて、先ほどの矢野さんの話にあった60倍になった現代がむしろ閉鎖的になっていることとも結びついてきて、なんか心地良さ

というのはクローズドな世界ではなくて、かといってこれみよがしに見せつけるものでもなくて、何か自然な内と外がつながるような世界というイメージなのかなと僕は思い描きました。

**矢野** 私は3年だけスウェーデンに住んでいたのですが、実際あまりカーテンがないんですよ。日曜日はIKEAとH&Mしか開いていなくて、あのお店は国営みたいなものなので、そこに行くかお散歩するしかなくて、家の中を見ていいことになっているんですよ。手をついて覗いていいことになっているんですね。それはけっこう冬の風物詩みたいになっていて、夏はいろんな家のお庭に入ってベリーを摘んでいいことになっているんですね。ベリー摘みは皆のもので、お部屋を覗くのも「覗き」ではないということに私もすごく驚きました。だから、見てもらうからといって装ってガチガチにやっているわけではなくて、部屋を豊かにするということが日常なんだというのは、私もスウェーデンにいてびっくりしました。

**鞍田** もちろん、それと同じことをどこでも、それこそ日本でもという、そんな単純な話ではないと思うんです。何かそういう、ややもすると小さいスケールで日常というものが閉じがちなのではないかと思うんですね。もっと日常というのは地続きで、いろんなものにアクセスできる場だったはずだと思うんですけど、何か息苦しさがあるのかなという気がしています。いきなり街に対して全面的にオープンにするというのはハードルが高いにしても、もう少し開かれていくということが何か一つのキーワードとしてあるのかなと思うんですよね。

## 2. 何をどうシェアするか

**矢野** あとは、ちょっと聞き慣れてしまいましたけど、どうシェアするかとか、共有する場をもつとか、一緒に共感する場をもつことがすごく、本当に大事になっているなど。皆さんはきっとAmazonでいろんなものを買っけれど、だからといってMUJIは決してお店を畳もうとはしない。やっぱり来

でもらってそのものを触ってもらって考えてもらおうとか、せっかく来ているんだから何か話せる場をつくろうかとか、そういうふうにお店のあり方も変わっていくんだなというのは、最近すごく感じます。

**梶谷** MUJI はインターネット販売もしているんですか。

**矢野** インターネット販売も着実に売り上げが伸びています。有楽町のお店が先日クローズしたんですけど、年間50億売り上げていました。インターネット販売もその1店舗くらいの売り上げはあります。

**梶谷** 何を共有するか。インターネットだから共有しているというわけではないんだけど、共存とか共生とかいうときに「共」という、何をシェアするのかということ。何かをシェアしなければ共存にも共生にもならないと思うんだけど。場所をシェアする、時間をシェアする、物をシェアする、それを考えると、たぶん自動運転もそうだし、民具で何が「共」なのか分からないけど。

**鞍田** 僕はそういう意味では、京都の喫茶店が好きなんです。京都の喫茶店って、必ず相席させられるんです。元々間口が小さいから、特に老舗の喫茶店に一人で行くと、「相席いいですか」と必ず言われるんです。一人で座ろうと思うな、みたいな。それで自ずと。別に話はしないんですよ、でも何となく空気は感じつつ、聞いているとなんかのろけてたり、口説いてたり喧嘩してたり、聞こえてくるんだけど別にそれ以上何でもないという。あれは難しい開く開かないではなくて、すごく自然な「共」の部分をモノなりサービスが媒介している一つの例かと思います。たまたま小さい間取りのスペースだからという結果論かもしれませんが、そこをいちいちしゃちこぼるのではなくて、たまたまみたいなのがいいのかなと僕は思うんですよね。お店はそういう自然さが必要で、親切を強制するとかでは決してないと思うし。

### 3. デザインがあるとはどういうことか

**梶谷** ナチュラルであることって、いわゆる自然と人間の「自然」とは意味が違うんだけど、例えばさっきのカーテンのことで言うと、カーテンを閉めるというのはナチュラルかナチュラルじゃないかという、どうなんでしょうね。恥ずかしいから閉じるというのもナチュラルといえはナチュラルなんだけど、ある種の作為ではありますよね。見えないようにする作為。別に露出するわけではないんだけど、見たかったら見ていいよと。「見る」のではなく「見える」、ただ景色として。横を向いたら見えることもナチュラルといえはナチュラルで、それは作為を少なくしているという意味ではナチュラルで、あとはそれが「心地良い」と感じることは少ないのかもしれないけど、感じ良いということと簡素であるということとナチュラルであるということのつながりって、MUJIとしてとか、民藝・民具として追求する部分だったりしているのでしょうか。

**鞍田** それで逆に僕が聞いたかったのが、矢野さん、フィンランドの人の中には必ずデザインがあるとおっしゃったじゃないですか。あれもけっこうキーワードかと思えて、デザインがあるってどういうことなのでしょう。

**矢野** フィンランドには、マリメッコというのがあったり、アラビア、カイ・フランク、アアルトのような、行ったら必ず触れてみたいものがあったり、建築やデザインがたくさんあるんですけど、まず一つはそれを国民全体が誇りに感じているんですよ。それと、私たちはよくグランドデザインと言っているんですけど、一つひとつのプロダクト、さっきも言ったようにプロダクトを作るのではなくて、このプロダクトを使うためにどういう世の中であつたらいいだろうとか、どういうルールがあつたらいいだろう、何が妨げになっているのかというのを考えるのもグランドデザインだ、という言い方をするんですよ。例えば、ヘルシンキ市長さんがいかに自動運転のモビリティによってどういう世の中になっていくかを語るとか、例えば MaaS (Mobility as a Service) 先進国であることの優位性とか。5G が今年の韓国の平昌オリンピックから使われ始めましたけど、今度の東京オリンピックでは

すごいスピードで情報が交差していくと思うんです。そうなったときにどう  
いう暮らしが待っているかというようなことは皆デザインだと。そこにクリ  
エーションがあるというふうに、教わっているような気がするんですね。

**鞍田** それは教育でも、デザイン教育みたいなものがあるんですかね。例え  
ば、義務教育の中にデザインが入っているとか。

**矢野** そうですね。あります。

**梶谷** それは大きいよね。

**矢野** 小学5年生の教科書を見せてもらったことがあるんですけど、す  
ごくデザインをするということが特別な職業ではないのです。いかにくらし  
を営んでいくか、つくっていくかということが、ちゃんと小さい頃から教育  
の中に入っているというのをすごく感じました。

**梶谷** 個々のものではなくてその背景にあるものが結局は大事というか価値  
であって、たぶんそれは柳でもそうで、物を守るとか新しいものをつくると  
かということではない。そのものが置かれる文脈とか状況とか社会とか、そ  
れを結局問題にしているのかなというのがありますよね。

**矢野** MUJIのホテルも道の駅も、例えばスーパーをこれからやるという  
ときにも、必ずやっぱりそこにお店を構える意味みたいなものを大事にしてい  
きたいというのが、会社の方針になっていると思います。いかに地域につな  
がっていくか。地域につながると言うのはちょっと恥ずかしいんですけど、



根差すとはどういうことなのかということを見ると、無印良品の生活雑貨の道具ってまだまだなんですよ。やっぱり、皆さんも地方に行ったらカインズホームでも買うし、今は東京にもたくさんありますけど、ホームセンターにも行くし。そういう所で消耗品もトイレトペーパーも買うと思うんですよ。そういうものに全然無印良品はかなわないから、もっと努力しなけりゃいけないし、調達方法も変えなきゃいけない。調達のルートを考えるのもデザインかもしれないし、どういう所に拠点の協力工場をもつかということも知恵を使っていかなくちゃいけないとすごく考えています。それが結果として地域に根差す、役に立つ小売業なんじゃないかな、と思います。

**梶谷** ですよ。それが、トータルで言う、「感じ良い」社会ということなのかもしれないですね。あと、役に立つということと言うと、よく人文学が役に立つ、立たないみたいな言い方がされて、あれはすごく不毛な議論だと僕は思うんです。その点、MUJIが「役に立つ以上でも以下でもない」と言う時、用って結局そういうことなのかもしれないけど、私たちが今買ったり使ったりしているものって余計なものがいっぱいひっついてるわけですよ。それこそ、余計な花柄だったり使いもしない機能だったり、用とは直接関係ないブランドがひっついてる。だから、「用以上でも以下でもないもの」って意外とないな、というのはある。それがかえってすごくラジカルなものだというのが、今でも柳の時代でもそうだし、MUJIがやっていることもそうだし、ある種の新しさなのかなと思いました。

**矢野** 「感じ良い」ということは一言では言えないと思うんですけど、やっぱりさっきの深澤直人さんの言葉に書いてあったんじゃないかと。うるおってすごく大事だと思っていて、たまに深澤さんとMUJIのお店を点検することがあるんですけど、本当にうるおいがなくなるとか言われるんですよ。掃除用具システムも適材適所だからポリプロピレンとか樹脂を使うんですけど、使いやすいかもしれないけど、たぶんうるおいがないってすごく言われます。掃除用具システムにどううるおいをもたせればいいんだと、うちの企画デザイン室の皆で議論しているんですけど、そんな物にもやっぱりうるおいがないと買ってもらえないな、というのは日々思っています。



**梶谷** 用と言い始めると、効率ということに結びつきやすいと思うんですよね。でも、たぶんそこじゃないというか、用であり役に立つんだけど、イコール効率を上げればいいという話ではない。すごく微妙なんだけどすごく大事な違いかなと思うんですよね。

**鞍田** それこそ、梶谷さんが元々専門の、雰囲気じゃないですけど。梶谷さんは雰囲気の専門家なんですよ（笑）。

**梶谷** そういう、哲学で atmosphere ということで。

**鞍田** 何か一見得体の知れない、目に見えないものだけど、今おっしゃっている心地良さとかうるおいて、雰囲気といえば雰囲気じゃないですか。やるべきことは最低限、商品として安全規格も通ってやっているんだけど、最後に何が足りないかという、もちろん材質を変えるとこともあるんだけど、ちょっとした置き方だったりしますよね。あるいは、過ぎ去っていく店員の発する佇まいだったり、「無視して行くのかよ、お前」みたいな感じだったり、分からないけどそういうものにも関わってくる。これって存外無視できなくて、というのは、僕らはいきなりダイレクトに点と点が結びつくみたいに物を見ているわけではないと思うんですよ。当然、ちょっと哲学的な話になっちゃうかもしれないんですけど、その時々にいるんな気分をもちながら、周りの状況にも影響を受けて、そのときに「あ、これいいかも」みたいな感じで、総動員してのことだと思うんですよね。今言おうとしている心地良さとか pleasant なこととかうるおいは、その総動員をギュッと一言で表すとそう言います、というもののような気がしていて、その感性、実はデザインはそういうことでもあるのかなという気がしています。僕の中では。もちろん個々のグラフィックとかプロダクトというものにちゃんと線が引けるというのもデザインなんだけど、ここで引くべき線はどれかを見極めることに当たるのは…。

**梶谷** 背景とか、全体をどう見るかとか。

**鞍田** そのときに、もちろん社会ということもあるし、地域ということもあるし、いろいろとそのスケールが変わっていったり文脈が変わっていったり

があるんだけど、その連関というか、見えない全体と目の前の具体的なものが発しているバランスみたいなものとかかなと。

#### 4. 今は皆がカウンターになっている

**梶谷** 実際にやっていたらぶんなら矛盾がある。MUJI といったって結局はブランドじゃないか、みたいなこともあるけど、それでも作り続ける、関わり続ける。そこが一番大事で、地球環境のことで、もっと資源を大事にしようとか、物を粗末にするのを止めましょうとか言うんだけど、それは単なる言葉であって、形にならないんです。だけど、企業として矛盾を抱えながらもそこをやっていくというのが、ある種のリアリズムであって、葛藤を抱えてやっているというのがすごく面白いなと思って、今回矢野さんに助けを求めたところがあります。実際に個々のものではなくてバックグラウンドが大事というときに、例えばフィンランドやホテルに進出するとか、新しいことに出ていくときでもそうだと思うんだけど、何を大事にしているからこれでここをやっているとか、これを作るんだとか、どこかでそれを判断するときのバックグラウンドというか根拠があると思うんですよね。それって何なんですか。

**矢野** なんか、感じ良いくらしていうのはすごくいい言葉だと思っているんですけど。それこそ鞍田さんのお話の中にオルタナティブという言葉が出てきて、反逆とか。私たちが 1980 年に「消費社会へのアンチテーゼ」というカウンターを当てたんですよ。私の高校時代に無印良品は数店舗しかなかったけど、なんてアバンギャルドなブランドなんだと思っていたんですよ。だから、服に例えるとコムデギャルソンくらいやっていることがアバンギャルドだったんですよ。なんか削ぎ落としちゃってるし、布団も真っ白だし、ノートは表も裏もなくクラフト色だし。ものすごくプロダクトに対して反逆しているというのが私の無印良品観なんですよ。そこから、再来年 40 周年で、40 年経つ間に成長して来年は 5,000 億企業になる。すごく一般的なものに実際はなったんだけど、そこでやっぱり成長を止めてはいけないし、止

めないために今起こっている問題にどう答えを出して解決していくか。たぶん無印良品を始めた堤清二さんとか田中一光さんがそのときに、こんな時代でいいのかと言って始めたことと変わらないんじゃないかと思いたい。だから、少子化、高齢化、過疎地、ゴミの問題、海洋ゴミの話などいろんなことがあるんだけど、それに一企業だけどうやって答えを出していき続けられるかということ。無印良品が始まったときにはモノからアピールしたけれど、今はそれがモノから社会に対してできること、ホテルだったり道の駅の再生だったりということに変わった。だけど、起こっている問題に答えを出し続けるという点では、あまり変わりがないことなのではないかと思います。

**鞍田** 思うに、1980年代って20世紀のある種ピークみたいなときじゃないですか。特に日本に関して言うと。逆に20世紀後半というのは歴史の中では異常な時代ですよ。人口も増えているし経済も拡張していくし。そういう時代には、あからさまとかカウンターとか、どこまでも一匹狼的な、ストレートな抵抗の姿勢が必要だったと思うんですよ。でも、もう成熟して人口も減ってという21世紀を考えたときには、たぶんそういうカウンターじゃないと思うんですよ。皆カウンターになっていくとか。つまり、大きなメインストリームなんてどこにもなくて、重厚長大に均一化・画一化して、みたいな感じでは動いていなくて、地域もローカライズしていかざるを得ないし、個人も自立していかざるを得ない。そんな中で、なにがしかのセーフティーネットという大きな枠組も必要なのかもしれないんだけど、それぞれの秘められたカウンターとか、マジョリティとしてのカウンターではないと思っています。本来形容矛盾なんだけど、カウンターってマイノリティで、マジョリティのメインストリームに対するサブカルチャーなんだけど、今は皆がカウンターになっている。カウンターになれる時代をどうつくっていくのかということだと思います。個人の生き方もだし、地域のあり方もだし、たぶん企業のあり方も、ということなのかなと思います。

**矢野** こないだ、ある講演を聴いたときに、ある建築家が「今は第二のバブルなんじゃないかと思うときがある」と言ったんですよ。「でも、何となく皆モヤモヤしてない？ 僕が考えていたあの時代、バブルが崩壊する前も、

何となく皆モヤモヤしてた。それに今は近い」と言ったんですよ。でも、何となくそうかもしれないと思っていて、そのモヤモヤはそのときと違う。今の鞍田さんのおっしゃったことが私にとってヒントになったかもしれない。

**鞍田** 例えば、もしかしたらずれちゃうかもしれないんですけど、またオリンピックで万博かよ、というモヤモヤもある可能性はありますね。いつか来た夢をまたなぞるの？という mismatch 感もあって、脱皮しきれない感のモヤモヤももしかしたらあるかもしれない。

**矢野** あるかもしれない。

**鞍田** 別に、オリンピック反対とかそんなことではないんだけど、21世紀だから自信をもって新しい形をやっていけばいいはずなのになかなか、個人の中には起こっているんだけど世の中は…。ましてや環境問題などは、何年議論してきたのかという感じじゃないですか。これだけ皆考えているのに、あともうひと押しは何なんだと。

**矢野** 皆モヤモヤしてる。

**鞍田** これだけ皆いい人なのに、みたいだね。

## 5. フィンランドは決めるスピードが速い

**梶谷** そろそろ、Twitter に書き込んでいただいたことに引っかけ進めていこうかと思うんですけど。(Twitter の画面を見ながら) フィンランドに行つたと



いうことに関して言うと、日本は実験、実践の場所としてやりづらいことがあるんですかね。それとも、別に日本でもやろうと思ったらできるんですか。

**矢野** フィンランドに響くことがあるのと、あの人口の少なさゆえにすごくスピードが速いんですよ。何をやるにも早い。決めると言ったら決める、みたいな。僕は決める人なんだもの、という感じなんですよ。市長さんも八百屋さんも、「僕は市長をやっている人」「僕は野菜を売っている人」みたいな、すごくフラットだから、決めることは決める、何か壁がないんですよ。

**梶谷** だいたい、日本は皆決めないですよ。決めたがらない。責任を回避しようとするので。たとえ日本が500万人だったとしても、進まないかもしれないですね。

**矢野** そうですね。そうかな、どうかな。

**梶谷** 決めないでしょ、日本は。

**矢野** 決めないですね。あと、情報の拡がりの方が早すぎて、ちょっと私が来週フィンランドに行くと言ったら、「矢野さん、ヘルシンキに来るって聞きました」と何人もフィンランド人から連絡が来て、「早っ」と思いました。そういうスピードが全然違うというのは一つあります。

## 6. 民具の豊かさ、そして美しさ

**梶谷** あとは、順番に行きましょうか。…民具の豊かさって、さっきから出ているシンプルとか簡素ということがありますね。これはMUJIのものにもあるのかもしれないですけど、「豊か」という言葉で何か言えるものがあるとしたら何なんですかね。

**鞍田** 民具にも何らかの贅沢さ、豊かさがあるのだろうか。どうなんですかね。例えば、どういう趣旨の質問かは分かりませんが、二つあると思うんですよ。村の鍛冶屋みたいに職能をもった人が一生懸命やったという職人的なこだわりというものが、大量生産にはない形で凝縮されているという

部分もあるんだけど、一方で村の鍛冶屋は百姓でもあって、単なる専門職じゃなくて誰でもできることの一つをやっているだけみたいな。単に買ってくるものではなくてその気になれば自分でメンテナンスもできるし、最初のきっかけは村の鍛冶屋が作ってくれたんだけど後は自分で直すとか。そういうフレキシビリティに富んでいるというのも民具のもっている豊かさ、あるいは当時の社会的な、今の僕たちが忘れてしまった豊かさなのかなという気はしますけどね。

**矢野** あと、ぜひ皆さん見て感じていただきたいんですけど、経年変化が美しいと思うんですよ。

**鞍田** あれはそう思った、うん。

**矢野** 民具の美しさは経年変化をしてより美しくなっていくことで、MUJIはどうかになって思っちゃう。

**鞍田** 今日は民具と民藝というのをああいいう形で比較しましたがけど、時間というものはその違いを消去してしまうというか、どんな民具もすべて美しくなっていくんですよ。それはブリキのただのバケツが見事に、何なんだろう。

**梶谷** 確かに、古いバケツだといい感じになりますね。

**鞍田** すごい貫禄で、捨てられないようになっている。

**梶谷** 穴が空いてもいい、みたいなね。

**鞍田** 今日のポスター発表でも、intimacyと時間を結びつけた発表をしてくださっていましたが、時間ってもしかして僕らにとってすごく大事なファクターかもしれない。すぐに消費してすぐに使えないと納得できない、すぐに効果が出ないと、という感じになっている。時間軸の取り方が大事なキーかもしれないですね。

**矢野** はい、そう思います。

**梶谷** はい。次は…自動車が民具だとしたら、どういう点なんですかね。

**矢野** 来年1号機が走り始めるんですけど、今は「ガチャ」という仮称で、皆で合言葉ガチャって言うんですけど、ガチャとお籠を比較してみたいと思っています。それと、たぶん自動運転で運転手がいなくなる中の空間の話って、彼(ポスター G-02: 角城竜正)も研究してましたけど、たぶん空間の使い方は今のモビリティとは全く違ってくると思うんですよ。それもガチャにかけていて、ガチャガチャって100円入れないと中に何が入っているか最後まで分からないのと一緒です。ガチャもモビリティで人が最大16人乗れることになっているんですけど、人が乗っていないときもあるかもしれないなんて思っていて、カフェだったり図書館だったり、なんかパカッと開けてそれがバスじゃない使われ方とか、ちょっと取り込み中みたいな夜の使われ方とかいろいろあると思っていて、そういうのも新しい道具に絶対になるというふうに。

**梶谷** ある種フレキシビリティと豊かさということが結びついていたけど。

**鞍田** そういうところがポテンシャルになっていると思っていて、引き金になるものがたぶん変わってきていると思うんですよ。スキルを発揮するとか。だから今みたいな話になると、例えば眠っていたコミットメントや気持ちが湧いてきたりするんですね。デザインの力ってそういうことなんですよ。

**矢野** そうですね、はい。

## 7. MUJI はマジョリティになってもいいんですか

**梶谷** 質問を中心にいきたいので、「民藝の intimacy とは何か」とか、「親しみ深い物を買うということはどういう意味をもつのか」とか、「都市でも民藝を育むこと、それに関われるかどうか」というようなこと、それから「中国で人気になってきた素材感を出すデザインは中国人が日本らしさと一致して、そういうものが中国でも根付いているのではないか」ということで、それは中国の人の日常にとって融合しにくいのか」ということです。外国に行ったときにシンプルさが日本的なのかどうかとも思うんですけど、MUJI のそ

ういうものがどう受け入れられるのかということかもしれないですね。あと、機能性と用というのもけっこう微妙な関係にありますよね。機能が増えることより役に立つと思いがちだけでも、そうではないというのはあるのかもしれないですね。このへんまででざっと出ましたけど、全部に答えていただかなくてもいいんですけど、まとめてギュッと話していただけるといいかなと思います。すごく無責任な振り方ですが、すみません。

**矢野** 私の鞍田さんへの質問です。最後に柳宗悦さんが買い物をするということについて話されていたと思うんですけど、私も今、週に1回だけ大学生向けの授業をもって話すんです。まあ物欲がないんですよ。デザインを勉強しているのに物欲がないって、私からすればどういうことなんだって思うんです。何をもちてデザインをしたいのかってこみ上げてくるんですけど、やっぱり「買うということは自分自身を手に入れること」とか、聞いていてすごく感動したんですよ。それを今にどう伝えていけば豊かさというものが伝わるんでしょう。何を言いたいかという、皆さんメルカリをやられている方も多と思うんですけど、あれはC to Cだから、モノの価値がガラッと変わった新しいサービスだと思う。今私たちは物を作っていて、原価があってそこに利益が乗って皆さんに買ってもらう定価があるんだけど、その利益率とかそういう価値すらもメルカリはガラッと壊してくれたんですよ。メルカリで出品するときに、自分の原価率とか思う人はいないじゃないですか。そうすると、絶対に今の洋服の原価率の構造とかはこれからすぐが変わっていくと思うんですよ。だから、お買い物をするという価値観が、この10年くらいでぐっと変わっていくような気がしている。そこをもって、お買い





物をするとか、自分が気に入ったものを手に入れるという喜びをどう伝えていけばいいのかなと思ったんです。

**鞍田** なかなか妙案はないんですけど、一方で出口の問題もあるのかなと思うんですね。例えば、買わなくなったけどすぐ捨てる、だったりしたら、本末転倒な気もするんですよ。つまり、昔もメルカリではないけど、使い込んでいって転用して転用してとか、場合によっては蚤の市じゃないけど、ヨーロッパとかでは夜逃げしてきたのかというような蚤の市があるじゃないですか。家財道具全部が並んでたりして、全然アンティークでも何でもなくて、たぶんこれは泥棒だよな、みたいな状態で置いてあったりとか。ああいうのを見ると、物を買うというか物を共有するという観念がズタズタになっていく感じはあります。でも逆にそういう中で、人がゴミだと思っているものを大事にしていったり使い込んでいったりするような。買うという入り口の問題もあるんですけど、どうそれと過ごしていくのかという時間の使い方の問題でもあるのかなとも思うんですよ。ちょっと逃げたような答えになったかもしれないんですが、例えばこないだ樹木希林さんが亡くなりましたけど、樹木さんの話を聴いていると、服をとにかくリフォームして、義理の息子のモックんからもらった服も自分風アレンジして、しかもそれを着こなして、最後には雑巾にするまでやっていて、ああいうのを見てると確かに物を買わなくてもいいのかなと思えてきますよね。きっと昔の人は当たり前のようにそういうことをやっていたんですね。せっかく新しい物を、原価云々を考えて買うだけではなくて、それが流動するようになったときに、過ごしていく新しい時間がある。もう一回昔に還れということではない。ともすると買っては捨て、買っては捨てというサイクルだったものに、もしかして今ブレーキがかかっているかもしれない、そのブレーキをせっかくだから転用して位置づけるモノの長寿命化。それは同じ機能でずっと使い続けるということではなくて、持ち主も変わるかもしれないし用途も機能もアレンジされていくかもしれない、ということが今の時代に合った形で出てくると、面白い変化の兆しになるのかなと。そっちの提案をしていった方が、もしかしたらそこに頭を使いたいという人がいるかもしれません。

**梶谷** さっき少し話が出たんですけど、Off-Gridとか反体制とかあるんですけど、MUJIはマジョリティになってもいいんですか。反体制として、あるいはアンチとしての意義が存在意義なのか。皆がMUJIの、あんな感じになって、MUJIの理念が社会全体に浸透したらすごく嬉しいのか、あるいはさっき鞍田くんが言っていたみたいにいろんなアンチがある社会がこれから望ましいのか。今はまだそこは、どっちに行くか分からなくて、グローバルでも均一化していく力がすごく強くて、その中でポツポツ出てきてはいるのかなと思うんだけど。均一化へ向かう巨大な力があってこそアンチとしての意味があるのか。

**矢野** でも、そんなに浸透しないと思うんですよ（笑）。

**梶谷** 心配しなくてもいいですよ、そんなことは。

**矢野** 浸透しなくてもいいし、10人のうち2人くらいが「MUJIっていいな」と思ってくれたらいい。うちにOS商品というのがあって、内部用語なんですけど、MUJIの中でもすごく大勢の人に買ってもらいたい商品をOSと言っているんですよ。例えば靴下とか下着とか、無印良品の中だと収納用品とかをOS商品という名称にして、いかにシェアを上げてお客様にたくさん使ってもらえるかという物は、けっこう厳選してやっているんですよ。ある意味私たちの中で、シェアの何%くらいというのを可視化、数値化して、シェアの何%をこの商品で取っているかというのは役立つ指標にしているんです。だけど、それが全員とかシェア55%とかになると、ちょっと気持ち悪い世界じゃないかと。

**梶谷** 矢野さんが以前、家の中を全部MUJIで揃えている人ってなんか違うなっておっしゃっていたけど。

**矢野** こんなことを言ったら何なんですけど、本当に全身MUJIの服で揃えてます、みたいなのはどうかと思ってます。やっぱりそこに自分のアイデンティティを加えて、アレンジしてもらってこそそのMUJIだし、できれば賢い黒衣のようなものであってもらいたいと思うから。例えば真っ赤なカッシーナで欲しいソファがあって、それを買ったらお金がなくなったからもう

MUJI でいいっていう。あとは、押し入れは全部 MUJI にしておこう、それできれいに納めて物が無い状態にするために MUJI がいいっていう。

**鞍田** さっきの、若い子かと物をいうのもそうだけど、僕らの世代だったら「カッシーナの」とか言うときすぐパンと出てくるはずのものが、今は思い浮かび難い時代でもあるのかもしれないですよ。憧れる人だったりヒーローだったり、それ自体ももしかしたら、逆に僕らが考えなきゃいけないことなのかなと思ったりもしますけど。

あと一つだけ言わせてください。民藝の時代は民藝という言葉が成立しえていたんだろうなと、今聞いていて思ったんですよ。つまり、一つの言葉で、もちろん本家本元はあそこの駒場の民藝館だけれども、今やもう一般用語じゃないですか。民具もそうだけど。でも今は一言でくれなくもなっている。本来我々は言葉を生み出していくのが仕事でもあるけど、そんな中で MUJI というものが一つのキーワードみたいになっていることというのは、たぶんこれがすべてに行き渡るということではなくて、その中の何か黒衣的なものとして生活の背景に潜んでいるものをひとまず集約してくれる代名詞たりえているということなのかなと思ったりもしますけどね。

**梶谷** はい。ということで時間が来ましたので、これで終了させていただきますと思います。もう一度お二人に拍手を。

(拍手)





## Ⅱ . ポスターセッションの部

ここからは、日本各地から集まった博士課程リーディングプログラムの履修生等と地球研の研究者によるポスターをご紹介します。

今回のセミナーでは、この16件のポスターを軸に企画が構成されています。午前中のポスターセッション（発表者同士でのポスター発表）と対話ワークショップ、午後のポスターフラッシュ発表の題材は、全てこれらのポスターたちです。

ここでは、ポスターの内容を1人2分で説明したポスターフラッシュ発表の記録を、ポスターとともにご紹介します。なお、16件のうち掲載可とされた14件を掲載しています。



## 1. ポスターの題目と発表者

区分	ID	ポスタータイトル	著者	所属もしくは職位
大学院 など (G)	1	MaaS for SMEs: designing a sustainable shared mobility service for corporate errand needs	Nuren Abedin	九州大学大学院システム情報科学府 / 持続可能な社会を拓く 決断科学大学院プログラム 博士課程1年
	2	自動運転技術が居住地選択行動に及ぼす影響	角城 竜正	広島大学大学院国際協力研究科 / たおやかで平和な共生社会創生プログラム 博士課程前期1年
	3	人間と非人間の境界を越えるゾウ: タイの「ゾウの村」を事例として	大石 友子	大石 友子 広島大学大学院国際協力研究科 / たおやかで平和な共生社会創生プログラム 博士課程前期2年
	4	ChiikiNoudou: An “eco-preneurial” approach for building communities, the environment, and local economies.	Kloepfer Thomas Michael	広島大学大学院国際協力研究科 / たおやかで平和な共生社会創生プログラム 博士課程後期1年
	5	インティマシーと時間——B. ステイグレルを通じた日常のエコロジーについての考察	大池 惣太郎	東京大学 IHS 特任助教
	6	核の危険を「飼い慣らす」ラ・アーク再処理工場の作業員たち: 不確かな危険とともにいかに生きるか	芝宮 尚樹	東京大学大学院総合文化研究科 / IHS 修士課程1年
	7	アレクサンダー・フォン・フンボルトの環境思想——19世紀の環境破壊報告から	相馬 尚之	東京大学大学院総合文化研究科 / IHS 博士課程1年
	8	言語を手がかりに見出しうるもの —「アマモ」とセリ語の事例—	中川 亮	東京大学大学院総合文化研究科 / IHS 修士課程2年
	9	「もの」を通じて生まれるつながり——プロジェクト FUKUSHIMA! 福島大風呂敷を事例に	蒔野 真彩	東京大学大学院総合文化研究科 / IHS 修士課程1年

区分	ID	ポスタータイトル	著者	所属もしくは職位
大学院 など (G)	10	生活文化が「知」となるために： オープンチームサイエンスという 方法論	宮田 晃碩  近藤 康久	東京大学大学院総合文化研究科 ／ IHS 博士課程 2年  地球研 准教授
	11	定住自立圏における取組策定過 程に関する研究 ～宇和島圏域 を対象として～	土屋 泰樹	東京工業大学環境・社会理工学 院／グローバルリーダー教育 院 (AGL) 修士課程 2年
地球 研 (R)	1	「男」の生き方と生活感覚	大谷 通高	地球研 技術補佐員
	2	国立公園における住民協働型環 境ガバナンスの形成に関する調 査とモデル構築の試み	黄 琬恵	地球研 研究員
	3	アフリカのスラムにおいてサニ テーション価値連鎖をいかにデ ザインするか：「健康価値」に着 目したザンビア、ルサカにおけ る地域コミュニティの活動を事 例として	林 耕次 ほか7名	地球研 研究員
	4	まちづくり推進会議における市 民調査のデザインと実践	王 智弘 熊澤 輝一 木村 道徳	地球研 外来研究員 地球研 准教授 滋賀県琵琶湖環境科学研究セン ター 主任研究員
	5	私達は野生動物とどう付き合っ てきたのか？：大阪府でのシカ 調査を読み解く	原口 岳  幸田 良介	地球研 外来研究員／日本学術 振興会特別研究員 大阪府立環境農林水産総合研究 所 研究員

※ G-02、R-02のポスター発表要旨は、発表者の希望により掲載しておりません。

## 2. ポスター発表要旨

### G-01

### MaaS for SMEs: designing a sustainable shared mobility service for corporate errand needs

Nuren Abedin

(九州大学大学院システム情報科学府・大学院システム情報科学研究院 博士課程1年)

I am working on developing a mobility service, most specifically ride share in Dhaka, the capital of Bangladesh; for people are working in small and medium enterprises(SMEs). Basically, I started with observing the problems with current transportation in Dhaka doesn't provide a safe and smooth travel experience for people who commute to work every day. Such travel experience causes intentional mood before entering the workplace and affects their performance at work. People are buying more cars to have a safe and convenient transport, resulting in a rapid increase in number of private cars in Dhaka and causing congestions and loss of time and resources. We found that people going to a same location for working usually live in some common residential area. They use common route and have common travel time, which encouraged us to design a rideshare for their travel to work. This will help reduce the use of private cars for going to office. We have designed three services in this rideshare model that are Staff bus service, Company errand shuttle service and holiday rental car service. The staff bus service will provide a reliable ride from home to office in the morning and from office to home in the evening. The company errand shuttle bus service will provide loop ride services for the common errand that companies perform on daily basis like going to banks, postal services, meetings, visits etc. The third service will be provided during weekends as a car rental service for the employees of registered SMEs. We are currently testing the model and analyzing the market demand and sustainability aspects.





# MaaS for SMEs: Designing a Sustainable Shared Mobility Service for Corporate Errand Needs



Nuren Abedin,  
Doctoral Student,  
Kyushu University

Keywords: Corporate errand travel; safe travel Shared use of resource

## Goals



## Social:

To enhance women's participation in economic activities by providing a safer and better travel choice.

## Technology:

To develop a MaaS system for corporates through resource sharing for corporate individuals and companies

## Challenges

- Identifying services that provides solutions to real needs
- Making the system time and cost efficient system
- Encouraging resource sharing for environment benefit



## Corporate Commuting Pattern & Designed Services



### Problems of Corporates in existing transports in Dhaka

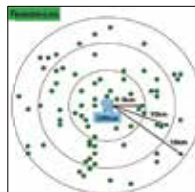
- a) Unsafe
  - Accidents
  - Unpredicted incidents
- b) Less productive
  - Impact on work time and personal time
  - Mental pressure
  - Waiting time on road
- c) Less cost-effective
  - Monetary cost
  - Energy cost
  - Psychological cost



### SSW System Model



### Employee's Commuting pattern



### Corporate Commuting pattern for errands



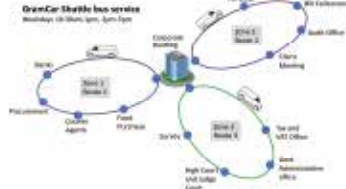
### GramCar Staff Bus service



### GramCar Holiday Car Rental Service



### GramCar Shuttle bus system



Social Business Technology Laboratory  
Department of Advanced Information Technology  
Faculty of Information Science and Electrical Engineering  
W26048 Ito Campus, 744, Moto'oka, Nishi-ku, Fukuoka8190395, Japan.  
Tel. +81-(0)92-802-3632, e-mail: ashir@ait.kyushu-u.ac.jp | www.socialtech.gramweb.net



## 人間と非人間の境界を越えるゾウ ：タイの「ゾウの村」を事例として

大石 友子

(広島大学大学院国際協力研究科／たおやかで平和な共生社会創生プログラム 博士課程前期2年)

まず、この発表における問いとして、人新世において地球環境と生活文化の関係をどのように捉えるのかということを挙げました。これまで地球環境は、自然や非人間の領域、そして生活文化は人間や文化の領域として二項対立的に捉えられてきました。しかし、近年の文化人類学における議論では、こうした見方は再考されています。まず、自然と文化を二分法とする見方は世界中で普遍的ではないということが指摘されました。また、自然と文化を切り離そうとすればするほど、媒介や翻訳の働きをもつネットワークが増殖するということが指摘されています。そこで、自然とされるものと文化とされるものの実際的な関係性を考察するために、人とゾウが共に暮らしているタイ・スリン県の「ゾウの村」を事例として挙げました。このデータは参与観察およびインタビューにより収集しました。

まず、「ゾウの村」の人々がゾウをどのように捉えているのかに注目しました。彼らは人間と精霊を対置させて捉えており、この対置を参照しながら村と森も対置させます。しかし、ゾウは森や村に属するものとは捉えられておらず、村では人間と関係性を築き、森では精霊と関係性を築く存在として捉えられています。また、ゾウは森から村へと境界を越える存在でもあります。こうした中で、ゾウ使いとゾウがどのような関係性を結んでいるのかに注目しました。一般的にはゾウ使いがゾウをコントロールしていると捉えられているのですが、実際には交渉し合い応答し合う関係にあります。ただし、この関係には言語能力や身体性といった権力性が内包されているものの、それぞれが行為主体性をもった存在として相手を動かし、動かされています。

結論です。人新世においてはこれまで、世界中で人間が地球環境に影響を与えているということが議論されてきました。一方、これまでで自然とされてきたものたち、例えばゾウを含む動物も、行為主体性をもって人間の生活や文化に影響を与えているということがこの事例により明らかとなりました。したがって、そのネットワークを対称的に捉え直していく必要があると考えています。

G-3

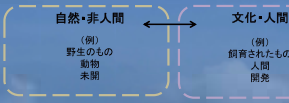
## 人間と非人間の境界を越えるゾウ:タイの「ゾウの村」を事例として

広島大学大学院国際協力研究科教育文化専攻文化コース / たおやかで平和な共生社会創生プログラム  
博士課程前期2年 大石 友子

人新世代に「地球環境」と「生活文化」を考えるとあたり、地球環境と生活文化がどのような関係にあるのかを再考する必要がある。ここでは、タイ・スリ景の人間とゾウが共に暮らす「ゾウの村」を事例に、「人間と非人間」もしくは「自然と文化」という境界に焦点を当て、実証的な関係を考察する。

### 1) 近年の文化人類学における人間と非人間の議論

- 自然と文化を二項対立的に分ける見方への批判
- 自然(非人間)と文化(人間)を切り離し、二分法として対立的に捉える見方は「近代」や「西洋」に特有の見方であると指摘されている。[ラトゥール,1993, 2014; ストラザーン,1981; カストロ, 2005]



※パラドクス

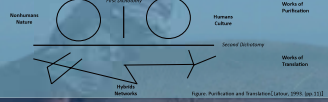
二分法を維持するために、超越的な社会と内在的な自然、内在的な社会と超越的な自然という二重の言説が用いられている。

### 1) 現地の概念における対置や差異

ストラザーン(1981)は、自然と文化を二項対立的に捉える見方が、世界的に普遍的なものではないことを指摘するとともに、現地の人々のイメージに着目し、対置を通じて生み出される意味や差異の認識について論じている。また、カストロ(2005)はアメリカ大陸先住民の宇宙論から、一つの意味が多数の意味を保持する間に、同じ意味の発音や指称を区別した。そしてこの区別を注目し、「ひとつの文化と複数の音節」という見方を提唱している。こうした論から、自然と文化(人間と非人間)とされるものの関係性を、現地の概念(現地の人々のハラスベクターや意味体系)から捉える必要があることが示唆されている。

### 2) 人間と非人間のネットワーク

カウール(1999,2014)は自然と文化を、人間と非人間を切り離すことを「純化」の働きと見て、「近代」の制度であるとした。加えて、こうした切り離しをすればするほど、自然と文化を部分・断片するハイブリッドなネットワークが増殖することを指摘している。ここでは、そのネットワークに注目し、ゾウと人間と対称的に捉える試みを提示されている。



→タイ・スリ景の人とゾウが共に暮らす「ゾウの村」を事例として、人間と動物(非人間、自然)の関係性について考察する。

- 一見、統御する人間としての「ゾウ使い」と統御される動物としての「ゾウ」という二項対立的な関係で捉えられそう。ゾウとゾウ使いの関係はどのようなものなのか?
- ①「ゾウの村」でゾウと共に暮らすクアイの人々は、ゾウをどのような中で捉えているのか?
- ②ゾウ使いとゾウはどのような関係にあるのか?

### 2) ①「ゾウの村」のクアイの人々の境界とゾウの存在



→ここでは、「人間」「精霊」と対置され(対置①)、この対置が「村」「森」という対置に参照される(対置②)。森にいるゾウは、精霊のゾウ使いを持ち、精霊との関係性の中で暮らしている一方、村にいるゾウは人間のゾウ使いを持ち、人間との関係性の中で暮らしている。したがって、ゾウは必ずしも人間と対置される「精霊」や「森」に分類されず、森から村へと移動することから、その境界を超える存在とされる。また、森で暮らすゾウも村で暮らすゾウもそれぞれが、それぞれの社会の中で関係性を築く存在であり、そこに自然・文化の見方で参照される「人間による統御」は参照されない。

### ②ゾウ使いとゾウの関係

#### ゾウ使いの役割

現在、ゾウを扱う仕事につく人や、畜殖上ゾウ使いと呼ばれている人々が伝統的「ゾウ使い」と呼ばれている。しかし、村の人文の語りによると、ゾウ使いは単にゾウを世話する人でもなく、ゾウを管理・統御する役割を持った人でもなく、ゾウと人間の身体的な差異を認知し、両方のついた差異を感知しながらゾウと交渉を行う役割を担う人とされる。

#### ゾウに動かされるゾウ使い

ゾウとゾウ使いは交渉を行い密着し合う関係にあるものの、言語能力や身体性による権力関係を内包している。その関係性の中で、ゾウは常に受動的な存在ではなく、音を出したり、物を投げることなどでゾウ使いを仕事(ショーなど)に誘ったり、交渉の行えないゾウ使いに対して攻撃をすることもある。ここでは、ゾウも交渉を持ちうる存在であり、ゾウ使いに影響を与える。



- 「ゾウの村」のクアイの人々にとって、ゾウは人間と精霊、および村と森という境界を越え、関係性を築く存在として捉えられている。つまり、近代や西洋に特徴的だとされる二項対立的な「自然・非人間」<「文化・人間」の概念では捉えられていない。
- また、ゾウ使いとゾウの関係性に着目すると、ゾウが人間の交渉に応じたり、人間にも交渉を持ちかけるという側面から、人間と非人間の境界を超える存在であると捉えることができる。そして、こうした関係性の中でゾウ使いもゾウも影響を与え合いながら共に生きている。
- 一人新世において世界中で人間が地球環境に影響を与えている一方、人間が「自然」と捉えてきたものたちも自ら行為主体性を持ち、人間の生活文化に影響を与えている。したがって、その関係性(ネットワーク)を対称的に捉えなおしていく必要がある。

参考文献: Latour, Bruno. (1993). *We Have Never Been Modern*. Harvard University Press. (2014) Agency at the Time of Anthropocene. *New Literary History*, 45, pp.1-18. / Strathern, Marilyn. (1981). No Nature, No Culture: the Iguan Case. In Mac Cormack, Carol P. (Ed.), *Nature, Culture and Gender*. pp.176-222. Cambridge University Press. / Viveiros de Castro, Eduardo. (2006). *Perspectivism and Multinaturalism in Indigenous America*. *The Land Without Evil: Territory and Perception of Environment*, pp.36-74. / 廣野英己, 山本孝彦編 (2012)『人と動物の人類学』青林社。

**G-04**

**ChiikiNoudou: An “eco-preneurial” approach for  
building communities,  
the environment, and local economies.**

**Kloepfer Thomas Michael**

(広島大学大学院国際協力研究科/たおやかで平和な共生社会創生プログラム 博士課程後期1年)

Due to the current increase in abandoned farm land, the increasing average age of farmers, and the lack of organic farming in Japan, new models and approaches must be considering to revitalize rural and local communities, creating businesses, and improving the management of the underutilized natural resources. *Chiikinoudou* is one such model that can be used to actively counter the current issues facing local communities. *Chiiki* and *Noudou* are two concepts in Japan that should be reevaluated and approached at the root level. *Chiiki* 地域 share the root 土 meaning soil, and soil becomes the main focus of our practice. *Noudou* means active as in *noudou teki*, because these methods require active thinking, farming, and communication amongst all parties that are involved. *Noudou* can also be a “way or road” farmers can navigate to build their businesses, make connections, and follow principles to constantly maintain and reexamine their farm practices.

Farmers must create, challenge, and celebrate their work considering the value they can provide to local communities, not only through food but rich experiences and education. *Chiikinoudou* is farming, failing, fixing, fighting, and again farming as a circular approach for beginning farmers to help navigate many of the challenges farming can bring. A continual analysis of Sales and Sources, i.e. resources and sourced materials will work to sustain both of the farmers improvement of Sales and Sources. Using the principles of sustainability, the farmer reviews a long term holistic plan that can maintain the environment, build economic resources, and provide equity through fair wages for fair work and appropriate prices that meet the need of the consumer. Farmers are eco-preneurs, meaning the act as entrepreneurs building their business models with environmentally sound practices reducing waste and impact.

People wanting to create sustainable opportunities for their communities can take many of the concepts of *Chiikinoudou* and apply them to their beginning farm operations. These concepts can also be applied to existing operations. We hope many future issues like food security, resource depletion, and local and rural abandonment can be deterred through the adaptation of *Chiikinoudou*.



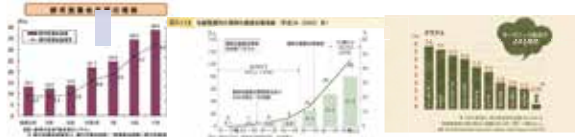
# ピッチフォークファームズ

*ChiikiNoudou*: An "eco-preneurial" approach for building communities, the environment, and local economies.

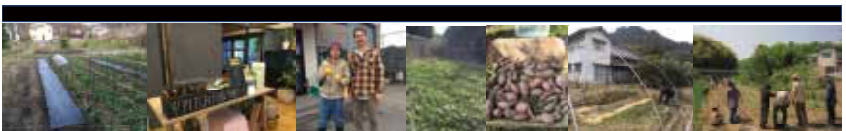
耕作放棄地が増えています

次世代の農家がない

持続可能な農業が少ない



Create, Challenge, Celebrate  
Farm, Fail, Fix, Fight, Farm  
Sales, Sources, Sustain



## インティマシーと時間——B. スティグレールを通じた 「日常」のエコロジーについての考察

大池 惣太郎（東京大学 IHS 特任助教）

私の発表は、生活文化を考える根本条件として、「日常」をテーマに取り上げました。「日常」とはそもそも何であるか、日常において自分と世界の間にも生まれる素朴な親しみの関係はどこから来るのか、という問いを、フランスの哲学者ベルナール・スティグレールの「技術と時間」の議論から掘り下げる内容になっています。

現象学者のブリュス・ベグーは「日常」と「平常」を区別しています。「平常」とは、秩序が規則やルーチンとして固定されたものとして意識された状態です。それに対して「日常」とは、たとえば戦争や大災害のあと日々の暮らしが立ち現れてくるような、無秩序から何らかの秩序が形成されてゆく創造的な過程である、とベグーは捉えています。この創造性こそが、「日常」に対して私たちが抱く「親しみ」（インティマシー）の感情の説明になります。つまり、〈私〉のもっている無形で特異な実感が、ゆっくりと何らかの形を獲得し、人と共有可能な現れ方を見出していくプロセスによって、〈私〉は自分の生きる世界を身近なものとして実感できるようになります。〈私〉が〈私たち〉に関与している感覚、これが「日常」のインティマシーです。

この観点で見たときに、今日のデジタル産業技術には、そもそも「日常」的な時間性の潜在的な脅威となる側面があります。それを指摘しているのがベルナール・スティグレールです。スティグレールによれば、問題となるのはインターネットや携帯、テレビなどのデジタル・メディアに私たちの意識が常にさらされていることです。アナログ・メディアと違い、デジタル・メディアは情報を受容するための時間それ自体を作り出し、私たちの意識の時間を情報受容の時間と同期させます（発表では、アナログ・メディア広告とデジタル・メディア広告の比較によってこの点を説明しました）。デジタル・メディアからの情報に晒されているとき、私たちの意識の時間は均一化しています。そのことが結局、〈私〉という特異なものが無形の感覚をゆっくり形にしていく「日常」の時間プロセスの衰退に繋がるわけです。

そのことから、私は最終的に〈スロー・ムーヴメント〉の意義をあらためて見直す必要がある、と結論づけました。単に物の流通のあり方を〈スロー〉に、ローカルにすることではなく、個々の無形の感覚が固有の形をとるには個別の時間が必要であること、そうした時間の確保は生活文化においてとても重要であるということ、を、再認識する必要があるのではないか、と思います。

第10回地球環境総合化学研究所東京セミナー「地球環境と生活文化—人世の学び」ポスター発表  
2018年12月15日 東京大学駒場キャンパス

# インティマシーと時間

## B.スティグレルを通じた「日常」のエコロジーについての考察

東京大学大学院博士課程教育リーディングプログラムHS 特任助教 大池悠太郎

### 0. 問い

- ・「生活文化」の形成・維持に不可欠と思われる条件：
  - 1.) 「日常」の時間が存在すること
  - 2.) 自分と世界との「親しみある」(intimate) 関係の持続
- 「日常」とその固有の「親しみ」はどこから生まれるのか。また、それはいかに維持され、あるいは破壊されるのか。
- ・ B.スティグレルの「技術と時間」の哲学を通じて、現代社会における「日常」のエコロジーについて考察する。

### 1. 「日常」とは何か

- ・ 「日常」(le quotidien) と「平常」(l'ordinaire) の違い

「日常」	「平常」
無秩序のなかに秩序が生成されていく連続的過程	秩序が規則やルーチンとして固定され意識された状態
→ 創造的・具体的・動的	→ 形骸化・抽象化・停滞

Cf. Bruce Bégout, La Découverte du quotidien, 2005




→ 「日常」は満足を与えるが、「平常」(ordinary) は退屈を生み、非日常なもの (extraordinary) の欲望を掻き立てる。

### 2. 「日常」と「親しみ」(インティマシー)

- ・ 「日常」は創造的プロセスであり、「私」と周囲の世界を「親しみある」(intimate) 関係によって結びつけている。
- 「日常」の創造的な秩序形成プロセス
- ・ 「日常」は、個々の「私」の特異で内密な(intimate)感覚が「私たち」の共通世界に投影され、共有される**持続的時間**。

(参考文献) 石田英樹「大人のためのメディア論読解」ちくま新書、2016/菊田崇「民衆のインティマシーとは何か」をデザインする」明治大学出版部、2017/ベルナル・スティグレル「常態の異常」ハルパー・インダストリアル社、新刊、2006/スティグレル「驚きということ」『自分』を、そして「われわれ」を、新刊、2007/スティグレル「技術と時間」エミタツスの選訳、法政大学出版局、2009/Bruce Bégout, La Découverte du quotidien, Fayard, 2005.

### 3. デジタル産業技術による「日常」の破壊

- ・ デジタル産業技術はいかに「日常」の潜在的脅威となるか。
  - 「意識」の市場化
- 
- Internet、携帯、テレビ、広告、視覚的・音声的な誘導・勧誘・案内...
- 現代は、消費者の意識・注意・感覚をそれ自身が、技術的な搾取の対象となっている。 → 「意識」の「メタ市場」化
- Cf. Bernard Stiegler, De la misère symbolique, 2004

### ● 「意識」の強制的シンクロニゼーション

「意識」捕獲の速度：アナログ/デジタル・メディアの差

写真と文字による広告	映像と音楽によるTVコマーシャル
1971 「野生の響きスバルレオーネ」	2014 「TOYOTA LEXUS AMAZING IN MOTION」

1) ポスターは特定の場所にある  
2) 文字を読む速度は人それぞれ  
3) 文章を読み取りイメージ喚起 → 意味の解釈・判断は本人

1) CMへの切り替わりで突然始まる(汎時的)  
2) 情報の受容速度 = 映像の速度 → 意識の流れと同期する  
3) 映像と音楽によって直接イメージ喚起 → 意味について判断や解釈の余地がない

- ・ デジタル産業技術は消費者の意識を強制的に「同期」し、目的とする情報にいち早く接続させる。 → 時間の短絡

### ● 「日常」のプロセスの機能不全

- ・ 「同期」により、消費者の生きる時間が均質化。同時に、「私」の無形の感覚がゆっくりと形を見出すプロセスが消える。
- 今の時代の居心地の悪さとは、「私」を「私たち」へと投影することが、どんどん難しくなり、ついには全くできなくなることです。(B.スティグレル、『象徴的貧困』)
- 「私が共通世界に関与している感覚」= intimacyも衰退。

### 4. 〈スロー・ムーブメント〉はなぜ必要か

- ・ 「生活文化」は〈スロー〉な時間性の中でしか保持できない。
  - 〈スロー〉とは個人々の無形の感覚が固有の形を取るために必要な時間を十分に持つこと。(= 「日常」) (≠ Slow food, life, cityのイメージ=商品化されたもの)
  - ・ 「現代の課題」：「活動」への呼びかけと、技術による過剰な「同期」に抗して、私たちの時間を「減速」させること。
- 無規定な時間(家族、遊び、議論、鑑賞、etc.)の擁護必要

G-06

## 核の危険を「飼い慣らす」ラ・アージュ再処理工場の作業員たち : 不確かな危険とともにいかに生きるか

芝宮 尚樹 (東京大学大学院総合文化研究科 / IHS 修士課程1年)

人新世と呼ばれる今日の世界を特徴づける事象の一つに、災害があります。気候変動や環境汚染、原発事故、あるいは科学的に発生が予想されている地震や津波などは、21世紀を生きる人類が直面している大きな課題です。例えばここ東京でも、30年以内に70%の確率でマグニチュード7の首都直下地震が起こると予測され、対策を講じることが呼びかけられています。しかし、こうした予測や呼びかけに対して、私たちはそれを自分たちの生活にひきつけてリアルなものとしてイメージすることができているのでしょうか。そこには、頭では理解できてもなかなか腑に落ちないという、不確かさあるいは分からなさといったようなものがあるように思われます。

それでは、このような不確かな危険を取り扱うに際して、私たちはいかなる選択肢をもっているのでしょうか。一つにはリスク・マネジメントと呼ばれる手法があります。危険の不確かさを確率で表されたリスクという数字に還元してコントロールしつくそうとする方法です。はたしてこの方法は、先ほど述べたような不確かさを完全に解消するのでしょうか。一方で、端的に危険を無視するというやり方もあるでしょう。しかし、テレビやインターネットに氾濫する災害の不気味なイメージを、排除することはもはや容易ではないように思われます。おそらく個人としても、そして社会としても必要なことというのは、この二つの選択肢の間、すなわち不確かな危険と「ともに」あるような方法なのではないでしょうか。

そこで今回のポスター発表では、Françoise Zonabend という人類学者がフィールドワークを行なって執筆した『核半島』を参照しながら、こうした不確かな危険とともにあるあり方の一つの例として、ラ・アージュ再処理工場というフランスの原子力施設で働いている作業員たちの実践を分析しました。原子力という目に見えない危険のそばで働き続けている作業員たちが実践しているある種の工夫のようなもの、核の危険を「飼い慣らす」技法は、人新世における重要な学びを提供しているでしょう。



第10回地球研東京セミナー「地球環境と生活文化——人新世における学び」  
2018年12月15日 於・東京大学駒場キャンパス

## 核の危険を「飼い慣らす」ラ・アーク再処理工場の作業員たち —— 不確かな危険とともにいかに生きるか ——

東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻文化人類学コース/IHS 修士課程1年 芝宮尚樹

### 1. 原子力施設で働くということ

#### 『核半島』(1993[1989])

- 仏ラ・アーク再処理工場の内外で行なったフィールドワークに基づいて、人類学者フランソワーズ・ゾナベントが執筆したエスノグラフィ。
- 1976年から現在にいたるまで稼働。



#### 高度な管理と安全な危険のイメージ

- **管理と制限**: 放射線に曝される程度による作業者の分類、放射線の強さによる工場内のゾーニング、線量計を携帯する個人による積算線量の管理など
- **安全でシンプル**: 「原子炉は圧力鍋のようなものです」、「ミネラルウォーターの方が高線量です」といった言葉遣いや、安心感を演出する映像を使った講習。疑問・不安を口にしない。

#### 危険を「飼い慣らす」(taming)

- ①単調かつ退屈な仕事、②漠然とした恐怖と不安を喚起する核。それらに対処するために、言語的・技術的な、危険を「飼い慣らす」戦術をとる。

#### ① 被曝と汚染の区別

- **被曝 irradiation**: 表面的一時的なもので、作業員の「タフさ」と結びつけて考えられ経験される。
- **汚染 contamination**: 血肉に染み込むものとして見られ、作業員の腐敗として経験される。

#### ② あえてリスクを犯す

- **カミカゼ**: 許容暴露時間を超過したり、防護措置を取らない。リスクを取ることで男らしさを証明したり、被曝インシデントを話の種にする。
- **金利生活者**: あえて手袋を外して仕事をすることで、汚染に対する意識を高める。

#### ③ 罪と罰、そして運命

- 核を扱うことは人事を超えた罪であり、癌などの病気はそれに対する罰である。職業病認定の書類の提出率の低さ。
- 父親たちが釜山で命を懸けてきた。自分たちが再処理工場ですらにさらされるのも一族の運命だ。

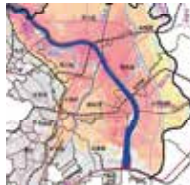
Zonabend, Françoise (1991[1989]). *The Nuclear Peninsula*. A. Underwood, trans. Cambridge University Press.

### 2. 身の回りの不確かな危険——荒川氾濫と首都直下地震——

#### 荒川氾濫



荒川下流河川事務所 (2018年12月6日参照)  
[http://www.ktr.or.jp/kyo\\_ah/ktr\\_content/content\\_00647102\\_01/](http://www.ktr.or.jp/kyo_ah/ktr_content/content_00647102_01/)



#### 首都直下地震

- 70%の確率で、今後30年以内に、M7の地震
- 最悪のケースで、死者2.3万人、経済的損失95兆円

朝日新聞Digital (2018年12月6日参照)  
[www.asahi.com/spcial/kyutodoku/](http://www.asahi.com/spcial/kyutodoku/)

#### 来るべき災害の「分からなさ」

- 情報やイメージがあふれ、技術や制度も充実しているが、結局よく「分からない」?

### 3. 不確かな危険とともに、私たちはどのように生きることができるか?

- 人新世を特徴づける災害を、いかに備え待つか (気候変動、環境汚染、原子力災害、予想される自然災害 etc.)。
- ①客観的な「リスク」に還元してリスク・マネジメントをするのでも、②危険を無視して無謀な行為・実践を行うのでもない、③危険を「飼い慣らす」かのような行いはいかにして可能か?
- 何を素材にいかに考え (学問)、どのようにイメージと行為を立ち上げることができるか (実践)?  
cf. 呪術、災害人類学、『リスクの人類学』(東ほか(編) 2014)、『イメージの人類学』(筋内 2018)、『虚構の「近代」』(ラトゥール 2008[1993])、後期・晩年のミシェル・フーコーの著作など。

G-07

アレクサンダー・フォン・フンボルトの環境思想  
——19 世紀の環境破壊報告から

相馬 尚之（東京大学大学院総合文化研究科／IHS 博士課程 1 年）

まず、アレクサンダー・フォン・フンボルトとはどのような人物でしょうか。彼はベルリン出身の鉱山官吏としてキャリアをスタートし、また博物学者としても活躍しました。このように科学者でもエンジニアでもあった彼は、同時にゲーテやシラーといったドイツの古典派やロマン派の文学者とも交流し、文芸にも高い関心を示しました。しかし、彼を決定づけるのはやはり探検家としてのキャリアです。その彼の探検で最も有名なのは、1798 年から 1804 年にかけて行われた新大陸探検だと思われます。ここで彼は南北アメリカ大陸の各地を探検し、動植物や気候、地形などを調査しました。そして、今回取り上げるのは、『新大陸赤道地方紀行』という彼の著作における環境破壊の報告です。

フンボルトは 1800 年 2 月にベネズエラのバレンシア湖の付近を探検し、現地の人から湖水面の水位が下がっているという話を聞きました。ここで彼は原因を考えます。そして彼は、以下のように分析しました。入植者が森林を伐採し、農地を開拓した結果、水源が枯渇しており、また森林破壊により土壤の乾燥が進行したことに伴って水位が低下し、さらに鉄砲水を引き起こしているのだと。フンボルトはこのようにすでに 19 世紀初めに、自然の中での環境破壊の連鎖を報告しました。なぜフンボルトはこのようなことを報告したのでしょうか。一つには、彼が最新の科学者であったということがあります。しかし同時に彼は、ロマン派的な自然哲学に親しんでおり、無機物から有機物に至る「自然の階梯」を前提としていました。フンボルトは人間と自然を科学的かつ包括的に捉える見方をもっていたのです。

自然を包括的に捉えるということは、今日の環境問題ではむしろ一般的になってきているようにも思われます。しかし、今日の環境思想がむしろ科学的に地球を有機体として分析することにこだわっているのに対し、フンボルトは逆に初めから、地球を一つの有機体として思弁的に捉えていました。このように、フンボルト思想を捉え直す意義があるのではないのでしょうか。

## アレクサンダー・フォン・フンボルトの環境思想 —— 19世紀の環境破壊報告から——

東京大学大学院総合文化研究科/多文化共生・統合人間学 (IHS) 博士課程1年 相馬尚之

### 0. 要旨

- アレクサンダー・フォン・フンボルト南米大陸探検
  - ・1800年ベネズエラにおける、森林破壊の報告例
  - ・人間の入植と森林、湖沼の水位のつながりの発見
- フンボルトの自然観
  - ・自然は有機的全体。人間は環境と連続
- 地球という自然観
  - ・ガイア理論との類似。フンボルトは先駆者？

### 1. アレクサンダー・フォン・フンボルトの経歴 Alexander von Humboldt (1769—1859)

- 自然科学と芸術
  - ・1769 ベルリンで貴族の家に誕生
  - ・1791 鉱山官吏に
  - ・1794 イーナを訪問
  - 以後ゲーテやシェリングらと交流
  - 同地で「動物電気」の実験



Alexander von Humboldt

- 探検旅行家
  - ・新大陸探検 (1798—1804)
    - ・1799 ベネズエラに到着
    - ・1800 オリノコ川流域の調査
    - ・1802 チンボラソ山 (6310m) 登頂
  - ・ロシア探検 (1829)
    - ・ウラル地方、アルタイ山脈、カスピ海などを巡る
    - ・多数の鉱物標本や微生物を採集
  - ・探検や自然研究の成果を『アメリカ旅行記』『コスモス』等で出版し、広く人々に発信

### 2. 『新大陸赤道地方紀行』における環境破壊

- フンボルトの報告
  - ・1800年2月
  - ・ベネズエラのアラグア谷とバレンシア湖付近を探検
  - ・湖からの蒸発量やかつての水面を測定
  - ・湖の水位低下について
  - ・森林破壊との関係を精査



フンボルトの探検経路 (ウルフ, 112-115頁)

- 人為的な環境破壊の連鎖
  - ・欧州の入植者が、森林を破壊し農地を開拓
  - 水源は枯渇し、流入する水量が減少
  - 太陽から土壌を保護し蒸発を抑える作用が弱まる
  - 湖の水位が低下
  - 豪雨は穏やかに土壌に浸透せず、鉄砲水に
  - ・森林の破壊、恒常的水源の不足、危険な奔流の出現は、互いに密接に関連した三つの現象となる。
  - (『新大陸赤道地方紀行』II、78頁、強調発表者)
  - ⇒ 人間の活動は、環境に大きな影響をもたらす
  - ・自然の中では、多くの現象が相互に作用する

### 3. 19世紀の環境科学

#### ○フンボルトの有機的自然観の形成

- ・近代科学の萌芽
  - ・六分儀や顕微鏡、時計など最新の機器の使用
  - ・経緯度、標高、温度、湿度、地磁気の数量化
  - ⇒精緻な経験科学の実践と人文科学の融合



Geographie der Pflanzen in den Tropen-Ländern  
○標高な植物種の観察と、縦断表現の報告の試み

- ・文芸サークルからの影響
  - ・ロマン派的、地球をつつ有機的全体とみなす自然哲学
  - ・無機物から有機物に至る「自然の階梯」
  - ・人間の内的宇宙と、外的宇宙の照応関係
  - ⇒人間は、自然の中で生きており、相互に影響

自然の性格に関する知識は、人間の歴史とその文化とも密接に結びついている。[...]文化の[ ]方向、民族性、人間性の明暗の気分も大部分さまざまな気候事情に依存しているからである。(『自然の諸相』、149頁)

- 自然は、人間精神も含め様々な存在が相互に影響し、巨大な有機体となる
- 19世紀にフンボルトは、人間と自然を科学的・包括的に捉え、人為的な環境問題を発見

### 4. 一つの地球：フンボルトは先駆者？

- 惑星という生命体
  - ・1971年 ジェームズ・ラブロック 「ガイア理論」
  - ・惑星そのものが一つ生命体のように自己調節する
  - われわれはガイアを生物も非生物も含めた総合システムと考えねばならない(ラブロック、57頁)
  - ⇒ システム論として単純な還元主義に反対
  - ・しかし、神秘主義にも流れる傾向

#### ○フンボルトの「コスモス」

- ・自然の全体的な統一は、所与のもの
- ・科学と人文学、芸術を合わせる学際性
- フンボルトの南米探検報告は、環境問題への鋭い洞察の一方、彼の有機体論は初めから思弁性
- 後の有機体論は？

### 5. 主要参考文献

- Humboldt, Alexander: Reise in die Aequinoctial-Gegeuden des neuen Kontinents, In. 4. Bde, Übers. von Hermann Hauff, Stuttgart (J. G. Cotta) 1859-1860.
- フンボルト, アレクサンダー『新大陸赤道地方紀行』エンケル/リット・ヴアイクル編, 大野英二郎, 荒木善太郎, 全3巻, 岩波書店, 2001-2003
- 『自然の諸相——一帯帯自然の絵画的記述』木村匡司編訳, ちくま学芸文庫, 2012年
- ウルフ, アンドレア『フンボルトの冒険——自然という<生命の網>の発明』飯塚多恵子訳, NHK出版, 2017年
- プラムウエル, アンナ『エコロジー——起源とその展開』金子勝監訳, 森脇誠子, 大槻有紀子訳, 河出書房新社, 1992年
- ラブロック, ジェームズ『ガイアの復讐』秋元篤己監修, 竹村健一訳, 中央公論新社, 2006年

G-08

言語を手がかりに見出しうるもの  
— 「アマモ」とセリ語の事例 —

中川 亮 (東京大学大学院総合文化研究科 / IHS 修士課程 2 年)

発表の出発点としましては、このセミナーのチラシにある「作られた物を消費する力から、既にある物を探し出す力へ」という言葉を選びました。「既にある物」を活用しようとする場合にふと同時に浮かぶものという、数が減ったり絶滅しそうだったりする動植物、あるいは危機言語の存在です。そうした生物の危機や言語の危機というのは「既にある物」にこれからどういふふうに向き合っていくのかを考えるきっかけになるのかなと思います。私の専門である言語学あるいは言語研究に引きつけてということであれば、すごいスピードで変化していく生物であったり言語であったりの多様性に、どのように言語研究が向き合っていけばいいのかということが問われているかと思えます。

少なくとも言語多様性に関して言語学がどのような姿勢をとってきたかという、地球上に存在する言語の多くは話者が少なく消滅の危機に瀕しており、しかしながらそうした各言語には同じような文化的価値があるので、その損失は人類にとって損害であり、したがって消滅する前に危機言語は記述ないし記録されていかなければならないという考え方があられるわけです。しかし、記録や記述がどのようなことをもたらすのか、そして危機言語の話者の居場所はどこにあるのかということについては、もう少々検討が必要であると思われまます。

そこで、そういった論点について考えるために、「アマモ」という海草と、アマモについて特徴的な使用をしているセリ語という言語の話者たちについて考えてみたいと思います。実際の発表の中ではアマモが穀物として使われているということ、そしてその知識の伝達によって、セリ語の役割として記録・記述の翻訳がどのような役割をもっているかということについて検討したいと思います。

## 言語を手がかりに見出しうるもの —「アマモ」とセリ語の事例—

東京大学大学院総合文化研究科 / 多文化共生・統合人間学(IHS) 修士課程2年 中川亮

**作られた物を消費する力から、既にある物を探し出す力へ。** (本セミナーフライヤー)

入新世においては「既にある物」を活用することが求められているが、その一方で、多くの文化や生物がひっそりと失われつつある。「既にある」リソースを活用しようとするならば、失われつつあるものをひとつでも多くすくいあげていかねばならないだろう。だが、私たちがどのようにそうした文化や生物に関心を持ち、知り、活用することができるだろうか。

### 1. セリ語から「アマモ」を学ぶ

#### □セリ語(Seri)

- ・メキシコのソノラ州において、狩猟・採集・漁労生活を伝統的に営んできた数百人程度の話者により話される少数言語
- ・Moser夫婦による言語調査

セリ語が使用されるエリア



#### □アマモ

- ・狭義にはアマモ科アマモ属の海草(*Zostera marina*)。
- ・日本では3科8属16種に及ぶ海草をアマモ類と呼んでおり、うち13種が**準絶滅危惧種**または**絶滅危惧種**に指定。  
※*Zostera marina*は絶滅危惧種でない



アマモ  
(三重県農水商工部水産養殖室(2008)による)

#### □セリ族(*comcaac*)にとってのアマモ

- ・Moserらは調査の過程で、アマモ(eelgrass)の種子が *xnoois* (フノーイス) と呼ばれており、セリ族の重要な食糧源であることを知る。
- ・種子が食用になる。4~5月に収穫し、たとえばオートミールのようにして食べる。
- ・同じくセリ族にとって重要な資源であるウミガメの餌にもなる。
- ・Felger & Moser (1973) と Sheridan & Felger (1977) の報告によれば、*xnoois* は海から採取される唯一の穀物。

### 2. 言語を通じて知識にアクセスする

#### □伝統的知識へのキーとしての言語

- ・ *xnoois* という単語がセリ語話者の知識を引き出すトリガーになる。
- ・セリ語が調査されなければ、Moserらが収集したような知識を得るのは困難。
- ・17~18世紀の宣教師たちは、カリフォルニア湾の住民が海草の種子を食用を知っていたが、Moserらの報告ほど詳細な知識であったかは疑わしい。

#### □記録・記述の媒体としての言語

- ・遠隔地から共同体の知識へアクセス可能に。
- ・翻訳による知識の伝播の可能性
- ・翻訳と知識の相対化  
→各地における「アマモ」の呼び方が手がかりに、様々なアマモの使いみちへアクセスする。  
e.g. *Zostère* → マットレスの詰め物  
Eelgrass → 乾かして防火材に使用  
アマモ → 水生生物の住処、水質の安定

### 3. 知識を活用する・取り入れる

#### □共同体の知識を応用

- ・「アマモ」を食用にする、防火材にする 等  
→ 生活文化のハイブリディティ

#### □少数言語話者を包摂した「知」の生成と活用

- ・共同体の知識を人類の知識へ。
- ・記録や翻訳を通じてセリ語の足跡を残す。

#### □生物多様性への関心を喚起する

- ・絶滅の危機にあるアマモ類の存在と有用性が「アマモ」という語を媒介に伝達される可能性。

結論

セリ語話者たちが持つ「アマモ」についての知識は、セリ語が調査されたことで私たちにもアクセス可能なものとなった。その知は記録・記述・翻訳を通じて伝達され、生活文化の多様性やマイノリティを巻き込んだ知の生産過程へとつながっていくだろう。言語は、「既にある物」へのアクセスを可能にし、私たちの生活にヒトを与えるかもしれないのである。そうしたことを見出し記録に残しておくことこそ、入新世における言語学・語彙論・辞書学の使命の一つではないだろうか。

主要参考文献

エヴァンズ, N. (2013) 『危機言語 — 言語の消滅とわれわれは何を失うのか』 (大西正幸・泉田俊樹・森若葉訳), 京都: 京都大学学術出版会。 / Felger, R. S. & Moser, M. B. (1973). Eelgrass (*Zostera marina* L.) in the Gulf of California: Discovery of its nutritional value by the Seri Indians. *Science*, 181, 395-396. / Felger, R. S., Moser, E. & Moser, M. B. (1980). Seagrasses in Seri Indian Culture. In R. C. Phillips & C. P. McRoy (Eds.), *Handbook of Seagrass Biology: An Ecosystem Perspective* (pp. 260-276). New York: Garland STPM Press. / 三重県農水商工部水産養殖室(2008) 『アマモ増再生ガイドブック』 / Sheridan, T. E. & Felger, R. S. (1977). Indian Utilization of Eelgrass (*Zostera marina* L.) in Northwestern Mexico: The Spanish Colonial Record. *Kiva*, 43(2), 89-92.

G-09

「もの」を通じて生まれるつながり  
——プロジェクト FUKUSHIMA! 福島大風呂敷を事例に

蒔野 真彩（東京大学大学院総合文化研究科／IHS 修士課程1年）

私はこのプロジェクト FUKUSHIMA! というアートプロジェクトの中の福島大風呂敷というアートを通してのものと人、そしてものを介した人と人のつながりというものについて考えてみたいと思います。これを考えるにあたって、人がものにどういう意味を込めるかとか、そういう人からの視点ではなくて、ものが何を人にさせるのかという非人間中心主義的な視点からこのアートについて考えてみたいと思います。

今回、大風呂敷がそこに関わる人にどういう影響をもたらすのかということを考えるにあたって、「作る」「広げる」「つながる」という三つのフェーズに分けました。この風呂敷自体が、写真で分かるように10mくらいあってすごく大きいものなんですけど、これを一緒に縫ったり広げたり畳んだり、すごく手間のかかる共同作業なのですが、それを通して人々がつながっていく過程というのをお話しできたらと思っています。また、現在これは福島だけでなく福島以外の地域にも広がっていて、札幌とか名古屋とか、今年はニューヨークでも広げられたりしています。そういうふうに地域を越えた大風呂敷ネットワークが生まれています。

それについて私は、〈共〉の領域を生み出す仕掛けとして大風呂敷を捉えました。この〈共〉というのはもちろん、福島と福島以外という、エンパワメントという意味での〈共〉でもあるんですけど、何かそれをもう一つ越えた、大風呂敷が可能にしている共同性のようなものがあるのではないかと考えていて、ここは実際まだあまり言語化できていない部分もあるので、実際に私がこの夏参加した経験も交えながら皆さんとお話しできたらと思います。

「もの」を通じて生まれるつながり  
 ——プロジェクト FUKUSHIMA! 福島大風呂敷を事例に——

東京大学大学院総合文化研究科/多文化共生・統合人間学 (IHS) プログラム 修士課程 1年 蒔野真彩

<目的>

・“もののエージェンシー”という視点から、福島大風呂敷が参加者に与える影響を分析することで、ものとの関係、ものを介した人々の関係について考察する

<ものエージェンシーとは>

・芸術人類学者アルフレッド・ジェルは『Art and Agency』(1998)において、もの(アート)を行為の媒介物(エージェント)とし、見る人に様々な感情や行為を引き起こすか(エージェンシー)を分析

・「人がものにどのような意味をこめるか」という人間中心主義的な視点ではなく、「ものが人に何をさせるか」という非人間中心主義的な視点  
 cf.床呂部哉・河合春史(2011)『もの人類学』

<福島大風呂敷とは>

「プロジェクト FUKUSHIMA!」の一連の活動の1つ

◎プロジェクト FUKUSHIMA!

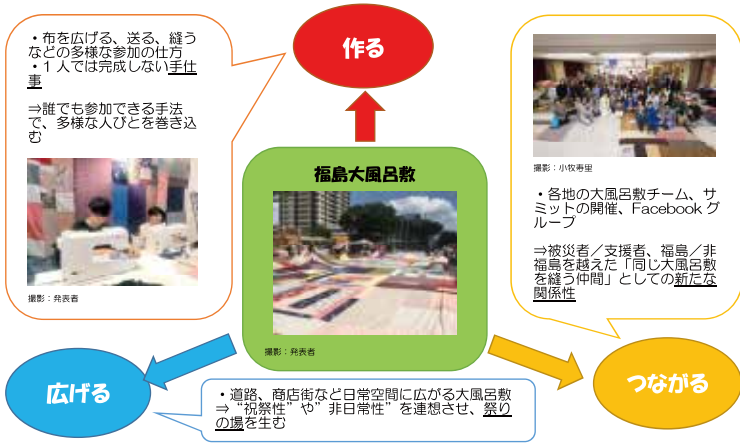
- ・2011年の東日本大震災後、「FUKUSHIMAをポジティブに変換する」を掲げ、音楽家・大友良英氏を中心とした福島にゆかりのあるアーティストや詩人らにより始動したプロジェクト
- ・立場や主張の違いに関わらず、誰もが参加できる「分断のない場」を目指している
- ・これまでに、「フェスティバル FUKUSHIMA!」や「放射線の学校」、「音楽ワークショップ」などを開催

◎福島大風呂敷

- ・初年度はフェスティバル会場の放射線対策として制作されたが、現在は「違いを縫い合わせて1つの場を作る」というプロジェクトの精神を示すアイコンとなっている
- ・名古屋、札幌など福島以外の地域にも広がり、過去2回、大風呂敷サミットを開催(2015・2017年)



(上) プロジェクト FUKUSHIMA! OGOマーク  
 出典: <http://www.go-fukushima.jp/about/>



<結論>

・“福島大風呂敷”は、思想や血縁の違いが問題にならない、新たな「あつまり」の仕掛けとなる

・「大風呂敷を作る・広げる」という共通の体験を通して、参加者の間に<共>の領域が生まれる

⇒震災を機に生じた(顕在化した)様々な問題を、福島固有の問題にさせない

G-10

生活文化が「知」となるために  
：オープンチームサイエンスという方法論

宮田 晃碩（東京大学大学院総合文化研究科／IHS 修士課程1年）

近藤 康久（総合地球環境学研究所 准教授）

発表の背景ですが、実は地球研に9月末から3ヵ月間インターンに行かせていただいております、本当に素晴らしい機会を頂いていることをここで改めて強調しておきたいと思います。私がメンバーとして参加しているのが、近藤さんがリーダーをされているオープンチームサイエンスプロジェクトです。これは、地球研には様々な実践プロジェクトがあるのですが、それらのハブとなって、地域社会との協同の方法論をつくるというものです。今回はそれについて、自分自身の観点から少しお話しできればと思っています。哲学研究をやっているので、知識とはそもそも何ぞや、という関心ですね。

オープンチームサイエンスというのは、そもそも現実の問題に対する多様な主体がいるわけですが、その間の認識のずれをどう乗り越えるかという問題意識で取り組まれています。特に環境問題の場合、学問分野の違いだけでなく、市民、行政、さらにその中でも様々な関心や理解をもった主体がいますので、その間の協同を考えるわけです。オープンチームサイエンスの究極的な理念は、これは私の理解ですが、「知」と「未知」についての見方を変えることだと思っています。この図はポスターでは使っていないのでぜひこの場で目に焼き付けていただきたいのですが、左に示しているのが乗り越えるべき見方です。そこでは、何が知識とされるか、何が問いとされるか、何が未知なのかということが、それぞれのディシプリンの中で決まっていって、そこで生産・蓄積された知識が環境問題にアプライされる、その際に社会とのネゴシエーションがなされるという見方になっています。

それに対して右に示したのが、オープンチームサイエンスの考え方です。重要な変更点は、まず科学のディシプリンを社会の多様なアクターと対等な位置に置くということ、それから環境問題をそれぞれの間に存在するものとして捉えるということです。各主体は他の主体について十分な知識をもっているわけではありませんし、その主体がそれぞれ何をもっているか、何を知識としてもっているかに関しても大抵はよく分かっていないわけです。その意味で、何が未知かということはまさに多様な主体の間にあるもので、まさにその間で知をつくり上げて、共に未知に直面する、あるいは不確かさに直面するというその方法論をつくり上げるのが、オープンチームサイエンスプロジェクトが今取り組んでいることです。具体的なアプローチや実践については、ポスターでご紹介できればと思っています。



2016年12月15日(土) 第14回地球研東京セミナー「地球環境と生活文化」

## 生活文化が「知」となるために——オープンチームサイエンスという方法論

宮田真碩(東京大学大学院総合文化研究科 / IHS 博士課程)、近藤康久(総合地球環境学研究所)

### 問い

我々の日常に根差した考え方や暮らし、即ち「生活文化」とは本来、自ら意識し難いものである。ふだん「当たり前」になっているものが「生活文化」と呼ばれるのである。だがその生活文化と地球環境の問題とをつなぐためには、それを改めて「知」として反省し、共有し、活用する必要がある。

では「生活文化」は「知」として活かされるべきだろうか?  
本発表では、そうした「知」を活用するための方法論として、**オープンチームサイエンス**の枠組みを紹介し、その可能性について考察したい。

### オープンチームサイエンスプロジェクト @地球研



#### 現実の問題に対する、多様な主体の間の認識のずれをどう乗り越えるか?

- 方法論: <超学際研究 + オープンサイエンス>
- ⇒ プロジェクトの目的: 方法論を実践し、効果を測り、改良していく

#### 超学際研究(transdisciplinary research)

多様な要因が複雑に絡み合う環境問題に対し、さまざまな分野の研究者と行政や住民をはじめとする社会の多様な人々が連携して解決策を共創する。

→ 課題: 問題理解のずれをどのように乗り越えるか?

#### オープンチームサイエンス(トッピングアップの政策として)ポトムアップの動きとして)

昨今の学術界では、従来の知識を広く社会に開き出す**オープンサイエンスの動き**が、トッピングアップの研究オープンデータ政策とポトムアップのシズンサイエンスの圏域から広がりがつつある。また、**直接エンゲージメントがオープンデータを活用して地域の課題を主体的に解決する、シズンサイエンスの動き**が普及しつつある。

⇒ 課題: どのように活かせるか? どのような点に気を配らなければならないか?

### 超学際理論における「知」の問い直し

#### 「知の生活空間」(ontogenic living spaces)

… 科学研究において何が重要な問いとされるかは具体的な環境・関心によって動機づけられており、それぞれの「生活空間」の中で科学知識は生成される。(Fol 2009)

⇒ 超学際研究においては、研究成果が応用されるだけでなく、多様な「知の生活空間」自体が重なり、相互作用し、変容するのでなければならぬ。  
超学際研究は、狭義のデザイン論においてではなく、**それの「あいだ」(in-between space)で進む**。(Vilsmajer et al. 2017)

⇒ 特に、超学際的に取り組まねばならない環境問題において「知」とは、多様な「知の生活空間」のあいだに生成し、活用されるものでなければならない。

### オープンチームサイエンスのアプローチ

#### ▶「へだたりをこえてつながる」という意涵

環境問題を多様な生活空間の「あいだ」にあるものとして捉え、それに取り組むための「Knowledge>Action Network」を作り出していく

▶ **ずらし**。「ズレを認識し、フレームをずらしながら前に進んでいく」(宮内編 2013)  
地域の状況や動機、価値とできることを見出す。必ずしも「統一」に向かわなくてよい。

#### ▶ **エンパワメントと対話**

異なる知の生活空間に属する知識は、そのままでは互いに知識として承認されない  
⇒ 多様な主体の声が開き取られ、「問題」の把握に参加し合うようにする  
⇒ そのうえで、多様な主体の間で対話を起こし、知の共有の場としていく

#### ▶ **可視化**

1. 様々な主体の主張や問いを互いに見えるようにし、対話の場に出れ出す  
2. 対話において言われたこと、起こっていることを記録し、「あいだにおける知」を形にする

▶ **倫理的公平(Ethical equity)** … 非対称の構造を極力排除する(搾取の危険)  
報酬の問題と併せて、単に知識を開放するだけでなく**知識生産システムを開放することが重要**

### 理論的反省 … 知識とは?

各主体はそれぞれ知識の「不確かさ」を有している

(科学知の不確実性 … 科学知は「一定の境界条件を設定することで成立する」)  
⇒ それぞれ未知ないし「不確かさ」に直面するものとして互いを認識することが価値の条件になる。知識への信頼に添って、「未知」に向き合う者同士の信頼関係が必要  
▶ **共に未知に向き合い、探求する主体の生成がオープンチームサイエンスの本質と言える**

### 答え——「探求の共同体」としてのオープンチームサイエンス

生活文化は、具体的な環境の中でのように持続的な生活を築き、という知を有しているだろう。環境問題は、その生活文化にわたっての「未知」として現れてくる。従って生活文化が環境問題に対する知として働くためには、一つの生活空間のうちに閉じたのではなく、多様な主体のあいだで、他の「知の生活空間」と相互作用するものとして動く必要がある。そこで環境問題に対する知が生産される。

### 実験事例: 琵琶湖の水草問題 … 水草の大量繁茂

This block contains several images and text snippets related to the waterweed problem in Lake Biwako. On the left, there's a photo of a person working with water plants. In the center, there's a photo of a group of people, likely researchers or citizens, engaged in a discussion. On the right, there's a photo of a large body of water with waterweeds. Text snippets include '琵琶湖の水草問題' (Lake Biwako Waterweed Problem), '1986年大水害以降増加、抑制されている。異域では除去、数回採取、増殖を防ぐ対策に取り組みている。技術論、制度での取り組みが課題とされている。', and '▶ 主体によって水草問題の捉え方が異なる。そこには行政と市民による制度も異なる'.

### ▼ びわ湖の水草ワークショップ(シズンチェック)

This block contains photos and text from the waterweed workshop. On the left, there's a photo of a group of people sitting around a table, engaged in a discussion. In the center, there's a photo of a person working with water plants. On the right, there's a photo of a large body of water with waterweeds. Text snippets include 'グラフィックレコーディング 多様な主体の「知」を可視化する' and '▶ 様々な主体の間で知識や関心が繋がっていった'.

### ポイント

互いに互いの知識を交換し、あるいは意見を磨き合っているのではなく、むしろ対話を通して「価値」となりうるような「知識」となりうることを広げる  
⇒ 協力できるところで協力する仕組みを共に作る

Fol, Ulrika. 2009. Introduction: Knowing and Living in Academic Research. In: Fol, U. (ed.) Knowing and living in academic research: Convergence and heterogeneity in research cultures in the European context. Prague: Institute of Sociology of the Academy of Science of the Czech Republic, 1-40.  
Fol, Ulrika, and Fischer, Maximilian. 2010. Reconfiguring Epistemic Living Spaces. On the Task Governance Effect of the Public Communication of Science. Department of Social Studies of Science, University of Vienna, October 2010.

Vilsmajer et al. 2017. Research In-Between: The Constitutive Role of Cultural Differences in Transdisciplinarity. *Transdisciplinary Journal of Engineering & Science*, Vol. 8, pp. 104-129, 2017.

宮内典子編『知識の境界は曖昧なものである』(2013)から発展させた「知」の動的な生成と「探求の共同体」の可能性(宮内典子, 2013年)。『オープンサイエンスの未来』(2014)から発展させた「知」の動的な生成と「探求の共同体」の可能性(宮内典子, 2017年)。

G-11

## 定住自立圏における取組策定過程に関する研究 ～宇和島圏域を対象として～

土屋 泰樹 (東京工業大学環境・社会理工学院/グローバルリーダー教育院 修士課程2年)

地方での人口減少というのが、近年話題になっています。日本全体が人口減少というのは、お話を聞いたことあるかと思いますが、地方では、都市への流入、東京だったりとかへの流入が起きているため、地方ではより問題が深刻化しています。そのため、地方では生活がそもそも維持できないということになっています。例えば病院が無かったりとか、図書館に行きたくても図書館が無かったりとか、そもそも結婚するにも結婚相手がいなかったりとか、そういう問題が起きています。そのため、地方では自治体同士で一緒に取組をして、なんとか生活機能を維持しようという取組があり、それが定住自立圏構想と呼ばれるものです。

今回は、この宇和島圏というところで、定住自立圏の話をしたと思います。ここでどのような取組をしているのか、そもそもその取組をどうやって決めているのかということ、今回の研究では明らかにしました。宇和島圏では、医療ネットワーク、病院を一緒にやったりとか、図書館の広域利用などに取り組んでいます。ヒアリングを行いまして、やっぱり自治体間同士で協力というのはなかなか難しく、例えばこの定住自立圏では、宇和島市というところが一番大きな町なんですけれども、どういうことをやりたいかという取組を提出するまでの期間が(案の提出を求められた3町にとっては)短くてなかなか協力できないという話だったり、懇談会というところで取組を話し合うんですけども、いろんな分野の人が居過ぎてなかなか医療の話についていけないようだったり、交通の話をされても、ちょっと僕には分からないよ、みたいな話が、そのヒアリングではありました。

今回のポスター発表では、どのように改善すれば良いのか、ということだったり、今後も取組は進みますので、どのようにしていけば、自治体間同士でうまく連携できるのかという話をしていきたいと思います。

定住自律圏における取組策定過程に関する研究

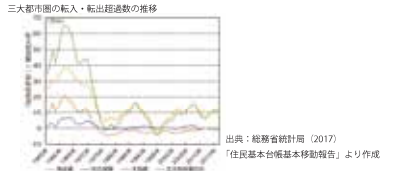
～宇和島圏域を対象として～

○土屋泰樹（東京工業大学 環境・社会理工学院 / グローバルリーダー教育院）

【1. 研究目的と背景】

■ 地方での人口減少

日本全体で人口減少するなかで、地方から都市への流入が起こっている。地方では高齢化による自然減及び、人口が外部へ流出する社会減の双方が発生している。そのため特に地方では人口減少が深刻化している。



■ 定住自立圏構想

三大都市圏への人口流出を食い止め、地方圏への人口の流れを創出するため、自治体間で相互に連携して取組を行うことで都市機能や生活に必要な機能を確保する定住自立圏構想が平成20年より始まっている。取組を実施する際には国から特別交付税の措置など優遇を受けられる。実施から約10年が経過した現在では全国で121の圏域が作られている。

構想開始から10年が経過したこと、全国で広く採用されていることから、自治体間の取組策定過程に着目することで広域連携の意義と課題の一部を明らかにすることを目的とします。

【2. 研究方法及び対象圏域】

■ 研究方法

研究方法としてはヒアリング調査を実施した。実施対象者は各自治体の定住自立圏担当者、取組策定を主に担っている定住自立圏共生ビジョン懇談会委員に対して行った。

■ 対象圏域

宇和島圏域定住自立圏は宇和島市を中心市として、松野町、鬼北町、愛南町の一市三町で構成される圏域。取組としては、医療ネットワークの構築や移住促進イベントの共同実施、図書館の広域利用などに取り組んでいる。宇和島圏域では2017年度に取組策定が行われたため、取組策定過程に着目可能であることから対象圏域として設定。



【3. 定住自立圏の形成過程】

■ 定住自立圏の形成過程

- ① 中心市宣言  
中心市が、定住自立圏をつくる意思を表明
- ② 定住自立圏形成協定  
中心市と近隣市町村が1対1で取組の大枠について、関係市町村の議会の議決を経て定める協定
- ③ 定住自立圏共生ビジョン懇談会  
取組の大枠をもとに、具体的取組を決定。医療・福祉・教育・産業振興・地域公共交通等各分野の関係者が参加

■ 宇和島圏域における定住自立圏の形成過程



【4. 取組の策定過程】

■ 取組策定過程における課題

① 要望調査の期間の短さ

宇和島市から5月に3町へどのような取組をしたいか要望調査があったがその締め切りは6月であり、短く役場内で調整ができなかったという課題が顕かとなった。

② 専門外の話についていけず、発言しにくい

懇談会では医療、福祉、産業、交通などの各分野の担当者が参加し、多種多様な取組に関して懇談会で議論している。委員へのヒアリングから、話題が自分の専門外のものになるとついはいけず、発言しにくかったとの意見あり。



【5. 改善策～本研究のまとめとして～】

■ 分科会の実施

分野ごとに分科会を実施することで、分野ごとに自治体が運営を分担するなどすることができる。そのため、圏域内で広域連携が可能になる。

また、分科会ごとに話し合いを実施することで、議論を活発化し、発言を多くすることができる。

これらのことから、定住自立圏を形成し、実際に取り組みを実施することがより円滑になる。



## 「男」の生き方と生活感覚

大谷 通高（総合地球環境学研究所 技術補佐員）

まず、日本の高度経済成長期の「男」の生き方を例に言わせていただくと、それは一言で言えば「会社人間」です。会社人間とは、出世競争への参加が自己実現だと信じていて、身を粉にして働き、さらには自分がいないと組織が動かないと思いつ込んでような人間のことです。こうした「会社人間」の頑張りの結果、豊かさをもたらされますが、同時に生命や動植物に対する深刻な侵害、すなわち環境汚染や公害問題が起こります。公害問題では、「会社人間」たちは企業の利潤や生産性の低下を最重要の問題とし、被害者そっちのけで問題を隠蔽したり救済への対応をしてこなかったという事実があります。そうした会社人間の生き方とは、「組織のためなら非合法すれすれの行動をとり、自分の所属する組織にのみ目が向き、幅広く国際問題、社会問題に関心を払うことができない生き方」として、1991年には経済企画庁が定義しています。それは自然や生命といった領域が極端に除外された生き方ではないかといえます。

これではいけないということで、男が自然や生命への感度を高めるにはどうすればいいか。ひとつは男の「主夫化」です。家事労働や育児、そういった身体や生命に関わる物事を自分ごとにする必要があります。ただ実際には、現在の日本の男性の家事労働時間は、1日平均19分です。これは女性と比べると2時間以上の差がありまして、ほとんどの「男」は家事に時間を割けていません。調べてみると、男性の1日の社会生活の時間は労働時間がやはり多い。高度経済成長期と比べて労働時間は減っていますが、それは非正規雇用人口が増えた分、労働時間が相対的に減っているという話でもあります。実際には1990年代以降、フルタイム労働者の労働時間はあまり減っていないという実態があります。また他の国との比較において日本の父親の帰宅時間は20時台以降が60%以上となっており、日本は父親の帰宅時間が遅いということもあります。これでは家事の時間をつくるのが難しい。ではどうしたら男の生活の感度を上げることができるか。一つの解は、消費行動に注目することがあります。「男」は、もう少しパソコンといった生産ベースのアイテムではなく生活雑貨などの消費ベースのアイテムに目を向けて生活の感度を上げていく、というのが今回の私の結論です。詳しい話はまた聞きに来てください。

# 「男」の生き方と生活感覚

大谷 通高 OHTANI Michitaka  
総合地球環境学研究所・生命館大学生存学学術センター

**\* 本報告のスタンス**

**\* 環境問題は人の営みによるものである**

「地球環境問題の根源は、人間の文化の問題である」  
(地球研HP「設立の趣旨と目的」)

**\* 本報告の視点**

**\* ジェンダー（社会的・文化的性差）**

ジェンダーは人間の文化的産物。ジェンダーから環境問題を考える思想・運動にエコフェミニズム、エコフェミニズムを手がかりに、「男」の生き方から環境問題を考える（本報告の目的）

**1: エコフェミニズム**

1974年に誕生。「女性の抑圧と自然破壊には関連がある」とそこでの再生産活動のあり方に注目する。また自然と人の本性は、歴史的・社会的に構築されるものであり、人間の実践によって作りかえられるものとして捉える。

ソーシャリスト・エコフェミニズムは、資本主義経済システムとそこでの再生産活動のあり方に注目する。また自然と人の本性は、歴史的・社会的に構築されるものであり、人間の実践によって作りかえられるものとして捉える。

資本主義の賃金化された労働の背後に、「自然のもの」とされてきた領域が見出され、ヒト、モノが無償・低賃金生産として奪われていく搾取体制が資本主義を駆動させる。

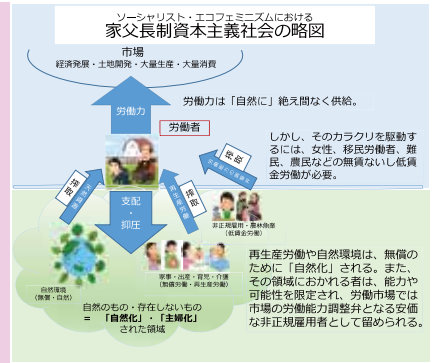
◆「主婦化」の作用

主婦の出産・家事・育児・ケアを担う者としての立場と、その立場にあることの自負と責任が、産む力がつかうとする性として、安らぎと愛を与えることに同一視される。上記の価値が規範化し、さらには自然のもの（本性）とされ、本質的な規範として内面化されていき、文化的価値の高いものとして社会的に評価される。

◆サブシステンス・パースペクティブ

サブシステンス：生命や生存のための活動を意味し、人々の営みの根底にあって社会生活の基礎をなす物質的・精神的基盤。再生産労働をサブシステンスとして概念化し、サブシステンスが特長的に保障されることを基軸にして、生産や消費行動のあり方を、ひいては社会システムそのものの変更を求めらるる視点。

**2: 問題構造**

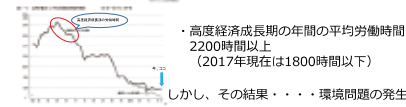


**3: 「男」の生き方と環境問題**

◆「男性化」：「会社人間」化

「出世競争への参加を自己実現だと信じ、身を粉にして働き、さらには自分がいなければ組織が動かないと思込込しているような」人間のこと  
(経済企画庁1991, 7)

= 日本の高度経済成長期（1955～1973）を支えた一般男性像



しかし、その結果・・・環境問題の発生！

・例：1950～70年代の公害問題

公害：食物・水（飲水・生活水）・空気の汚染  
= 生命を維持する根幹の部分の汚染

⇒ 公害の事実や原因を否認・隠蔽する「会社人間」たちの生命維持の根幹の汚染や被害よりも、企業の利潤や生産性の低下を重要視

◆「会社人間」の生き方

「組織のためなら非合法な手段もいとわぬ行動をとり」「自分の所属する組織のみ目が向き、幅広く国際問題、社会問題に関心を払うことができない」生き方 (経済企画庁1991, 8)

= 「自然」や「生命」、「家族」を省みず、企業や組織を優先して働く高度経済成長期の「男性」の生き方であり、そこにはサブシステンスや再生産労働（家事・育児・介護など）の領域が極端に除外されている。

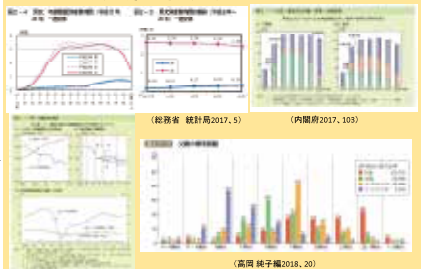
⇒ **これではいかん！「男」の生活感覚を高めないとい！**

**4: 「男」の生活感覚を高めるには？**

サブシステンスなものに対する感覚を高める。

例：家事・育児・介護などの再生産労働の実践  
他の生命・身体を維持を感通して、食事を作る、生活環境を整える、喜ばせる、などなど

すなわち、男性の「主夫化」  
⇒ じゃあ、現在の男の家事労働時間は？



⇒ 労働時間や問題構造はなかなか変わりそうにない、じゃあどうすれば・・・

**※「男」の消費行動に着目しよう！**

これまで「生産者」に置かれてきた「男」を、「消費者」として捉えかえす！  
「男」の消費行動の内実を「生産」から「消費」に力点を変えてみる。  
例：生産ベースの道具（リボンなど）ではなく、生活にかかわる消費ベースの商品（生活雑貨など）の良や楽しさを発見したり・考えたりすること。

R-03

アフリカのスラムにおいてサニテーション価値連鎖を  
いかにデザインするか

：「健康価値」に着目したザンビア、ルサカにおける  
地域コミュニティの活動を事例として

林 耕次（総合地球環境学研究所 研究員）ほか7名

サニテーションに関する問題の背景ですが、世界で約23億人の人がトイレなど基本的な衛生設備にアクセスできていないということ。また、そのうち約10億人が日常的に屋外排泄をしているという報告があります。

今回の発表では、アフリカ南部のザンビアという国の首都ルサカのスラム地区で、どのようなサニテーションの状況であるかを把握して、それらの問題解決をいかに図るのかという取り組みについて紹介しています。清潔なトイレをつくり、しかるべき処理をして、利用したり適切に廃棄する、というのが理想なのですが、現実としては実際に使用されているトイレも非常に粗末なものが多く、屋外排泄も日常的に行われています。同じくゴミなども野外に放置されており、周囲にハエが飛び交って不潔といわざるを得ません。地下水由来の飲み水も汚染されていて、大変好ましくない状況です。こうしたことも含めて、サニテーション問題として地域の人々がどのように捉えるのかということです。

私たちのプロジェクトでは、現地子どもたちや青年に積極的に問題に関わってもらうことで、地域のサニテーションに関する問題意識の向上や、状況の改善について考えてもらうことを促しています。すなわち、地域の青少年らによるボトムアップ型の取り組みに参加しています。その団体名は、「Dziko Langa」という現地語で、My Community という意味なのですが、彼らの活動を通じたアクションリサーチを試みています。活動の様子については、映像などで記録して、そのフィードバックを通じて自らの理解を深め、問題解決の模索とともに、地域内外への発信もおこなっています。他にも、健康改善効果を目指した調査研究として、病原菌である大腸菌といったものが、どういうふうに拡散しているか、それがどのように人々の健康価値につながっていくのかということにも注目しています。



## アフリカのスラムにおいてサニテーション 価値連鎖をいかにデザインするか : 「健康価値」に着目したザンビア、ルサカにおける 地域コミュニティの活動を事例として

第10回地球研 東京セミナー  
2018年12月15日  
東京大学 (駒場キャンパス)

林 耕次<sup>1</sup>, Sikopo P. Nyambe<sup>2</sup>, 原田 英典<sup>3</sup>, Chua Min Li<sup>3</sup>,  
伊藤 竜生<sup>4</sup>, 牛島 健<sup>5</sup>, 片岡 良美<sup>5</sup>, 山内 太郎<sup>1,2</sup>

1. 総合地球環境学研究所, 2. 北海道大学大学院保健科学研究所, 3. 京都大学 大学院地球環境学,  
4. 北海道大学 大学院工学研究院, 5. 北海道立総合研究機構 北方建築総合研究所

### 【背景と目的】

SDGs (持続可能な開発目標: 2016-2030) においてサニテーションの問題は「3. 健康」「6. 安全な水とトイレ」に深く結びついている。トイレに関しては、2015年時点で約23億人がトイレなど基本的な衛生施設を持っていないという報告があり (WHO)、そのうち約6億人が野外で排便をしているという。  
本発表の舞台である南部アフリカのザンビア共和国、首都ルサカでは、 Peri-urban といわれる低所得者層が集中する地区に、70%の人々が居住している (CSO, 2012)。そこではトイレや上下水道などのインフラが十分に整っていない。地下水や生活用水の汚染のほか、野放排泄も日常的であり、毎年のようにコレラのアウトブレイクが見られることは想像されるように、衛生・健康被害の問題が顕著である。  
本研究では、地産物の「サニテーション価値連鎖プロジェクト」において、国内外の各地でサニテーション価値連鎖 (Sanitation Value Chain) モデルのデザインを提案するなかで、プロジェクトの2年目時点でのザンビア、ルサカにおける現状と課題について報告・検討する。



図1. 都市圏に隣接する人々の割合 (%) (UN HABITAT, 2014)



図2. 2016年の目標達成が「健康と水と衛生」の価値連鎖の発展のために必要である



図3. 調査地 ルサカ共和国



図4. Lusaka Peri-urbanの調査地 (Nyambe et al. 2013)

### 【方法】

- ルサカ市内の Peri-urban 地区を調査地として、
1. サニテーションに関する意識向上とコミュニティの改善を目指した、青少年が主体となった組織 **Dziko Langa (-My community)** の活動を通じたアクションリサーチ。
  2. 地域の住民と現地の実験作家による上記活動の記録・可視化と、それらのフィードバックを通じた問題の理解や解決に繋がる取り組み。
  3. サニテーションによる健康改善効果の定量化・可視化を解析する観点から目指す。

### 【結果と考察】

1. **Dziko Langaのアクションリサーチ**: ルサカ市内 Peri-urban の2カ所 (Chawama地区、Kaanyama地区) において、地域の子どもたちと青年の連立で自らの居住地域におけるサニテーションの現状を自ら調べ、理解し、それらの情報を親族やコミュニティと共有して改善を図る試みが続いている。



写真1. ルサカ Peri-urban の調査地にて現地実験作家とメンバーによる調査の様子 (Photo by Nyambe)



写真2. コミュニティの価値連鎖を記録し、サークルと色紙を用いて可視化する「記録・可視化」の取り組み (Photo by Nyambe)

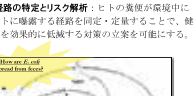


写真3. 調査地における水源地の調査結果 (Photo by Nyambe)



写真4. 調査地 (Nyambe) に Dziko Langa 設立の啓蒙活動を行うメンバーの様子 (Photo by Nyambe)



写真5. Dziko Langa の活動の様子 (Photo by Nyambe, 林)



写真6. 調査地 (Nyambe) に Dziko Langa 設立の啓蒙活動を行うメンバーの様子 (Photo by Nyambe)

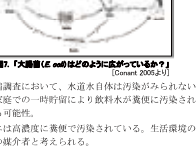


図7. 「大循環 (E) のほどどのよかに広がっているか?」 (Gizwa, 2018年)



図8. Dziko Langa の活動を通じたサニテーションに関する問題の「発見・理解・解決」に向けた取り組みの記録と映像活用

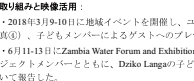


写真7. Dziko Langa の活動の様子 (Photo by Nyambe, 林)

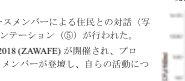


写真8. 調査地 (Nyambe) に Dziko Langa 設立の啓蒙活動を行うメンバーの様子 (Photo by Nyambe)



写真9. トイレなど施設内に汚染される排泄物の回収の様子 (Photo by Nyambe)



図9. 調査地におけるサニテーション価値連鎖の「記録と可視化」を主とした一側 (By Nyambe)

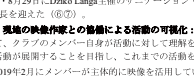


写真10. 調査地 (Nyambe) に Dziko Langa 設立の啓蒙活動を行うメンバーの様子 (Photo by Nyambe)

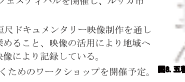


写真11. 調査地 (Nyambe) に Dziko Langa 設立の啓蒙活動を行うメンバーの様子 (Photo by Nyambe)



写真12. 調査地 (Nyambe) に Dziko Langa 設立の啓蒙活動を行うメンバーの様子 (Photo by Nyambe)



図10. サニテーション価値連鎖のインドネシア (C) のモデル (Ushijima et al.)



図11. 調査地 (Nyambe) に Dziko Langa 設立の啓蒙活動を行うメンバーの様子 (Photo by Nyambe)



図12. 調査地 (Nyambe) に Dziko Langa 設立の啓蒙活動を行うメンバーの様子 (Photo by Nyambe)

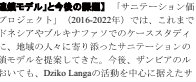


図13. 調査地 (Nyambe) に Dziko Langa 設立の啓蒙活動を行うメンバーの様子 (Photo by Nyambe)

### 【参考文献】

Nyambe, S., Hayashi, K., Zulu, J. and Yamachi, T. 2018. Water, Sanitation, Hygiene, Health and Civic Participation of Children and Youth in Peri-Urban Communities: An Overview of Lusaka, Zambia. Field Research Report 2016. Sanitation Value Chain No.2, No.1.  
Ushijima, K., Hijikata, N., Ito, R., & Yamamoto, N. 2012. Effect Evaluation of Dry-Toilet Application for Rural Farmer Family in Burkina Faso. Journal of Arid Land Study 22(1)

本研究は、総合地球環境学研究所「サニテーション価値連鎖の発展 価値のほどによりするサニテーションのデザイン」プロジェクト (代表: 山内 太郎) の研究成果の一部です。

### 【価値連鎖モデルと今後の課題】

「サニテーション価値連鎖プロジェクト」(2016-2022年) では、これまでにインドネシアやブルキナファソでのケーススタディをもとに、地域の大人と若者層からのサニテーションの価値連鎖モデルを提案してきた。今後、ザンビアのルサカにおいても、Dziko Langaの活動を中心に据えたサニテーションを取り巻く社会・地域環境を背景として、技術やビジネスの要素も視野に入れた「健康価値」に着目したモデルを構築していく予定である。

**R-04**

**まちづくり推進会議における市民調査のデザインと実践**

王 智弘（総合地球環境学研究所 外来研究員）

熊澤 輝一（総合地球環境学研究所 准教授）

木村 道徳（滋賀県琵琶湖環境科学研究センター 主任研究員）

地球研の熊澤といいます。第一著者の王智弘さんの代わりに発表します。研究の背景としましては、財政状況の悪化から行政サービスの維持が懸念される中で、新しい公共の担い手として住民の参画が求められています。そういった中で、市民を実践に導く「まちづくり推進会議」をどのようにデザインするのかということを研究の問いとしています。それを実現し、問いに答えるために、地方自治体が事業として市民調査を取り入れる意義と可能性を検討することを今回の研究の目的としています。

対象とする自治体は滋賀県の北西部にある高島市です。対象事業は、第2期高島まちづくり推進会議です。活動主体は市民26名と市職員18名の、合計44名です。2年間の事業で、1年目は高島市の将来像と課題を共有するワークを行いました。2年目は参加者間で問いを出し合い、その問いを共有するワークを行いました。このように出てきた問いを参考にしながら、現在市民調査を実施しています。この市民調査については研究者がサポートする形で進めています。そういった中で、まちづくり推進会議をまちづくり戦略ストーリーとしてどのように位置づけるのかということについて考察しています。ぜひポスターを見に来てください。



## まちづくり推進会議における市民調査のデザインと実践

王 智弘 (総合地球環境学研究所)

熊澤 輝一 (総合地球環境学研究所)

木村 道徳 (滋賀県琵琶湖環境科学センター)

### 〇問いと目的

- 財政状況の悪化から行政サービスの維持が懸念される中で、「新しい公共」の担い手として住民の参画が求められている
- 住民を「実践」に導くまちづくり推進会議をどのようにデザインするか
- 地方自治体が事業として市民調査を取り入れる意義と可能性を検討する

### 〇滋賀県高島市の概要

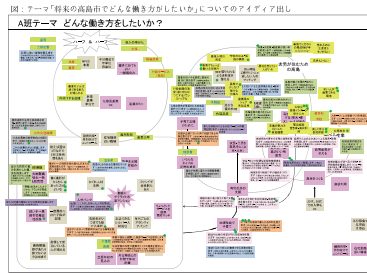
- 滋賀県の北西部に位置
- 平成17年に5町1村(マキノ町・今津町・朽木村・安曇川町・高島町・新旭町)の合併
- 市の面積の約5割が森林、約1/4が琵琶湖
- 人口現在5万人弱→2060年に3万人を割り込むと推計

### 〇高島市まちづくり推進会議とは

- 平成27年4月に一体的な市の発展に取り組む事業として設置
- 市民自らが課題と対策を検討することで、魅力あるまちづくりを推進
- 平成29年度からの第二期では、市民協働課、たかしま市民協働交流センター、研究者による2年間のプログラム設計と運営
- 活動主体は市民と市職員の26名

### 〇1日目:将来像と課題を共有するワーク

- どんな働き方をしたいか?
- オフをどう過ごしたいか?
- 高島市に残したいものは何か?
- 何にお金を使いたいか?



### A-Eの課題を設定

- 「地域で支えあうコミュニティづくり」
- 「多様な働き方ができる」
- 「活かす自然・守る自然」
- 「地域で学び育つ」
- 「高島の文化」

### 〇参考文献

- 1) 橋本健 (2010)「ストーリーとしての戦略—優れた戦略の条件」,東洋館経済新報社
- 2) ジーン・レイヴ&エイデン・ウェンガー (1993)「状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加」,産業図書
- 3) マシュー・リップマン (2014)「探求の共同体:考えるための教室」,玉川大学出版
- 4) 内藤泰介 (2004)「自分で調べる技術:市民のための調査入門」,岩波書店

### 〇2日目:「問い」を共有するワーク

- 触発し合いながら問いを立てる練習
- →6枚の疑問詞カード(5WH)を使用。1人1問に約1分。時間内に順番に回していく
- →選んだカードを出しながら「問い」を発表。思いつかない時は「パス」カード
- 質より量→いろいろな問いの立て方(切り口)を知る
- 投票を通して「問い」の力を感じる
- →調べてみたくなる、考えてみたくなる問い

図:テーマ「地域で支えあうコミュニティづくり」について立てられた問いと投票の結果

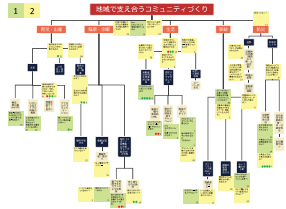


表:各テーマで関心を集めた問い(カッコ内は産育期数)と各グループが設定した課題課題

グループ名	関心を集めた「問い」	設定された課題
地域で支えあうコミュニティづくり(40)	【1】中高生が自分である役割とは何か(4) 【2】(高齢者)共同生活をしたいと思ってる理由は? (4) 【3】地域のボランティア活動は簡単ではないと思いませんか(3) 【4】「住居+出稼」地域社会で育ててほかにできるのか、何をしてほしいのか、何をしてほしくないのか(3)	子育て支援におけるコミュニティの可能性
多様な働き方(38)	【1】多世代の活躍が求められるような働き方を求めているのか(7) 【2】シェア・労働(短時間労働)を活用してどんな働き方を求めるのか(4) 【3】RPO・ボランティア活動がボランティアを求めているのか(2)	若者の働き方
自然・環境(34)	【1】(農地)果樹を育てたいのか(6)、どのようにしてこぼれ果を処分するかと関係する人々をどうするか(4) 【2】(山林)所有者不明の、規程がわからない山林をどうするか(6)	家族集団・自治的農業の実践
子育て(34)	【1】(子供+人材)なぜ子どもや若者を地域で育てる必要があるのか(6) 【2】(子供)子育てを担う地域には何をすべきか(4)、若者が育ちにくくなる高島は何(4) 【3】(教育)市内の公立の教育施設と関係(4)	子どもが活動する場があり(大人の職業・役割)
高齢者の文化(31)	【1】(祭り・祭り)土曜日を育むにはどうすればいいか(3) 【2】(文化)「つながり」イベント事業の開始・継続(誰/リーダーと組織づくり)	祭りへの思いと課題(食とのつながり)

写真:フィールド調査(高島の文化)とアンケート調査(地域で支えあうコミュニティづくり)の様子



### 〇考察:ストーリーとしてのまちづくり戦略

- 静止画から動画へ:「参加のほしご」を上るしくみ
- 「周辺の参加」から「十全的参加」に至る制度設計
- 「違い」としてのまちづくり推進会議における市民調査

R-05

## 私達は野生動物とどう付き合ってきたのか？ ：大阪府でのシカ調査を読み解く

原口 岳（総合地球環境学研究所 外来研究員／日本学術振興会特別研究員）

幸田 良介（大阪府立環境農林水産総合研究所 研究員）

今回は2017年度から私が関わり始めたプロジェクトについてご紹介したいと思っています。ニホンジカは写真を見ていただいで分かるように、国内では人間との関わりの深い生き物で、長い間身近な存在でした。シカの個体数密度というのは戦後、保護の対象になるくらい減少した時期を経て、その後爆発的に増加して分布も拡大した後に、捕獲頭数を増やした現在でも依然として高止まりした状態にあります。それと関連しまして、現在ではシカは植物の世代交代などに著しい悪影響を及ぼしている状況で、農作物被害も顕在化しています。つまり、過去数十年間のシカの変化というのが在来動物の共存であるとか生態系管理、地域の農業存続上の問題をもたらしているのです。ところが、継続的にシカを調査してきた事例は地域的にもすごく少なく、ほとんどの地域ではシカが害獣化するまでに何が起きているのかということを知る方法がありません。私たちはこうした問題意識をもって、特に大阪のシカを調査しています。様々な野外調査と、過去と現在に採集された試料の安定同位体の分析を通じて比較するという方法を組み合わせて、空間パターンから農業被害を引き起こすような条件を発見しようとするアプローチを使って、捕獲とか防護柵といった防除施策がシカの生態に対してどういう影響を与えているのか、あるいはなぜ施策がうまく機能しないのかということを研究しています。最終的に、一連の研究を通じてシカの生態の過去と現在を理解して、現状の「ともかくシカが増えすぎたから減らす」という取り組みの一步先を見ることを目標にしています。

藤口 岳 (RIN), 幸田 良介 (大阪理農大研)  
takashi@rnc.chikyu.ac.jp

**[R-5] 私達は野生動物とどう付き合ってきたのか？ 大阪府でのシカ調査を読み解く**

**歴史的経緯** なぜニホンジカの生態について調べるのか？

- ・身近な在来の野生動物である 在来種 (*Cervus nippon*) *yessoensis*, *yakushimae*, *mageshimae* など
- ・地域亜種が存在 → 古くから日本に生息
- ・人と関わりの歴史が長い
- ・本邦においては特に農作物への加害者として
  - f. 鉄砲遺文(てっぽうしやうもん)、吾歌(ごか)の南狩のために、鉄砲の貸出を届いた音類
- ・個体数の減少 → 増大 → 高止まり
- ・食の意欲依存効果が働きづらい (自然な個体数密度の制御作用が弱い)
- ・食物の可塑性の高さ
- ・栄養条件など、生息環境が悪化しても妊娠率・成獣死亡率が変わりづらい (上野, 17)

**モニタリング・管理が必須 → 生態学に立脚して手法を考える**

Introducing ecological survey on deer in Osaka pref.  
How have we interacted with wildlife?

**Acknowledge**  
Funds: JGSF (2018)0774, 17407341, 20091016, 16K118227

**地域的特徴** どうして大阪府 (北摂地域) なのか？

- ・管理単位としての代表性・好適性
- ・野生動物の管理: 都道府県単位
- ・都市化し、森林面積(ひか生息域)が小さい
- 1. 研究・管理施策のリソースを集中出来る
- 2. 人口密集地 ~ 郊外 ~ 山林が隣内で
- 3. (1と関連して) 過去のシカの生息状況について情報が残されている

・大阪府での調査から...

**管理 (捕獲・防除) の効果を評価する手法の開発**  
北摂のシカ生態を復元/変化する

**手法** どうやってシカを調査してきたのか？

- ・手法幅に“限界”、“長短”
- ・累積的なシカの影響を知りたい
- ⇒ シカの活動のスナップショット
- この地域一帯に何頭シカがいるか
- ⇒ 土地利用と個体数密度の関係

・異なる手法から得られた情報を統合する方法論の不在

規格化された手法の体系がない

質的に異なる情報の組合せ困難 (e.g. CPUE & 草密度 & 食痕 & ハビタットタイプ毎の滞在時間...)

**草場密度調査 + 捕獲試料に新たな“分析技術”を導入してみる**

**情報・試料の蓄積** 継続調査から見えること

- ・過去の前調査に供した“齒”
- 過去のシカの生息情報が残っている
- ⇒ 安定同位体 (=移動・農作物利用)
- ・同一手法による継続調査
- 比較により近年の変化を詳細に追う (分布・高密度生息地の変化)

**生息密度と分布の推移** “食痕分析法による推定”

シカ生息密度の推移

**R&D.1** シカやシカ糞の同位体組成はどんな情報を伝えるのか？

**糞・齒のδ<sup>15</sup>N指標による農作物利用度推定**

エナメル中コラーゲン、食物由来・合成作用がないシカは植食性、動物由来Nの影響を受けない

餌植物中の有機δ<sup>15</sup>Nを反映したδ<sup>15</sup>N値を示す

施肥の結果、農作物のδ<sup>15</sup>N値が野生植物と比べて高いことから、シカのδ<sup>15</sup>N値は農作物利用度の指標となりうる

株間帯と比べて非常に顕著な、糞の分析によるモニタリングの手法を開発中

17年度: 餌が既知である飼育個体を用いて、餌と糞のδ<sup>15</sup>N値の関係を検討した

**R&D.2** 新たなモニタリング手法の可能性をさぐる (提案中)

**糞のδ<sup>13</sup>C分析による移動履歴推定**

糞の炭酸塩(CaCO<sub>3</sub>)成分、血中CO<sub>2</sub>由来生時の生息標高を反映したδ<sup>13</sup>C値を示す

年輪に沿った初期・微量分析による個体移動の履歴推定が可能?

分布域と農作物利用の関係を解析できる?

**予測** 「人為」とシカ「生態」の関わり、個体数密度非依存性

**農業被害 (アンケート調査)**

**生息密度 (c.f. R&D.1) と被害密度に対応はあるが、≠ではない**

H1. 一定以上過密状態になってはじめて農作物を利用するようになる? (集団構造や生態が変化しているか、検討する必要がある)

H2. 防除施策の強調や農地の空間分布など、別の要因が関与している? (人間活動の影響とシカ生態の関係を解明する必要がある)

**展望** シカ生態の過去・現在を調べ、未来を予測する

**過去の生態を推測する**

農業加害者としての長い歴史

排除ではなく「管理」「共存」の対象

分布域や農作物利用度の評価

被害が少なかった時期と比べて何が変化した?

**現在の生態を記録する**

農業被害が起きやすい条件の解明

空間パターンからこの→

トライアングルを解く

防除施策の有効性?

(捕獲・防護網) 少頭数・高集積

**情報を組合せて予測する**

農業被害 ≠ シカの個体数密度

農業被害 = 餌が分布範囲、農作物へのアクセス性、個体数密度

両者の関係を解明することで、特に防除とシカの変化の対応を理解する

**地域計画・生態系管理に繋ぐ**

どこでどのような防除策をおこなう?

実績に基づいて施策を変える (PDCA) のための方法開発

「増えすぎたシカを減らす」の一歩先



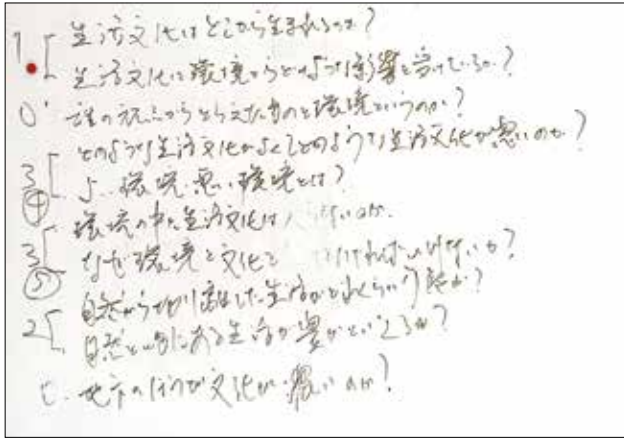
### Ⅲ . 対話ワークショップの部

ここでは、1日目のポスターセッション（発表者同士でのポスター発表）の後に行った対話ワークショップと、2日目の対話ワークショップ（1日目のふりかえりが主な目的）で出た問いとファシリテーターの感想をご紹介します。対話は、2回とも哲学対話の形式で行われました。



12月15日

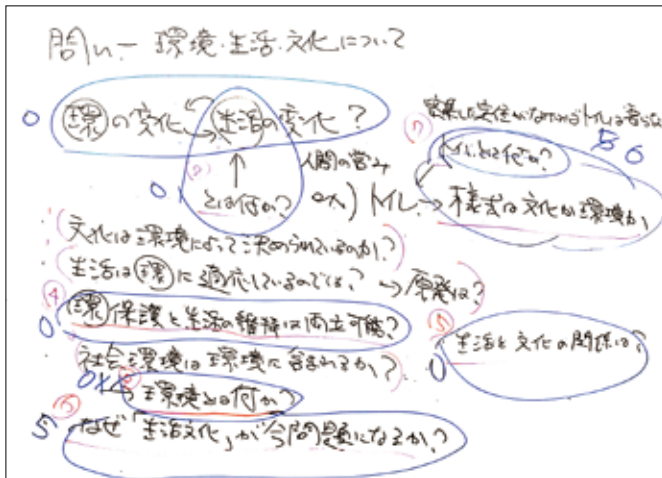
会場：東京大学駒場キャンパス 学際交流ホール



最初に対話のテーマとなる問いを出してもらったところ、環境と生活文化はどう関係しているか、いい生活文化と悪い生活文化は何か、自然と生活の豊かさはどう関わるかといった問いが出された。結局、環境と文化の関係について対話を行い、なぜこの二つが対立しているように語られるのか、人間にとっては文化も環境の一部ではないかといったことを巡り、様々な意見が出された。言葉の根底にある前提に立ち返り、シンポジウム全体のいい準備になった。

ファシリテーター 梶谷 真司（東京大学）





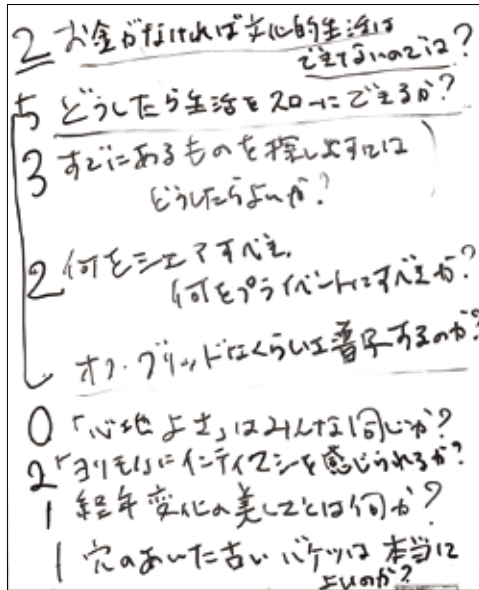
まず環境と生活文化に関わる問題として、環境保護と生活維持の両立可能性や、なぜ生活文化が今問題なのか、といった点について参加者が各々の見解を述べながら問いを深めた。哲学対話では「トイレとは何か?」という具体的な問いが選ばれ、個人の体験談からインドや中国、アフリカなどの世界のトイレ事情までが語られた。対話を通して、トイレが生活に必要な存在であるだけでなく、環境や文化と不可分であることが明らかになっていった。参加者が多様な考え方を吸収し、共通の問題を議論していくための人間関係を築くことができた。

ファシリテーター 八幡 さくら (東京大学)



12月16日

会場：東京大学本郷キャンパス ライブラリープラザ イベントスペース

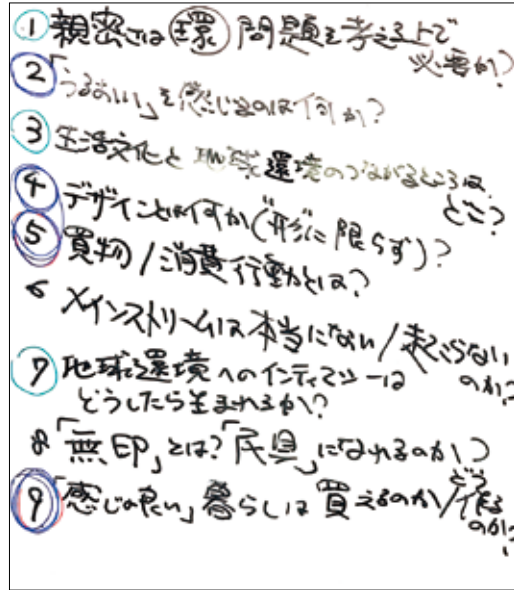


「どうしたら生活をスローにできるか？」という積極的な方法の問いは、「オフ・グリッドな暮らしは普及するのか？」という疑念を含む問いとまとめられ、それに引き続き、「お金がなければ文化的生活はできないのでは？」という明確な疑いの問いが掲げられた。対話のなかで、肯定と否定のこの両面性は、一貫して維持されていたと感じる。言うなれば、肯定もしくは否定の一面性に取り込まれないための手立てとして、対話はおそらく機能している。これは確かに、肯定的な可能性である。

ファシリテーター 石川 学 (東京大学)







初日の講演の話題を引き継ぎ、日常における広い意味での〈デザイン〉がテーマになった。日々の生活のなかで「うらおい」を感じるものは何か。「感じの良い」暮らしはそもそも物として作ったり買ったりできるものなのか。対話のトーンには若干の懐疑が含まれ、単にデザインのポジティブな可能性を語る言葉は少なかったと思う。都市型生活に限らず、現代の「生活文化」の基層は大規模産業技術のデザインに依拠せざるを得ない。そして、人間も物質である以上、環境のデザインによって動かされる。だからこそ、〈私たちは人間の生の内実をどこまで工学的、意図的に設計し得るとみなすべきか〉と、あらためて実践批判的に問い直してみることに今日の重要性がある、と感じた。

ファシリテーター 大池 惣太郎 (東京大学)





## IV . 地球研と東大 IHS による東京セミナー を振り返る

ここでは、阿部健一（地球研・教授）と梶谷真司（東京大学 UTCP・教授）の語り合いを通して、共催した3回の東京セミナーを、第3回の内容を軸に振り返ります。



## 地球研と東大 IHS による 東京セミナーを振り返る

2019年2月4日（月） 地球研にて

阿部 健一 総合地球環境学研究所 教授

梶谷 真司 東京大学 教授 / 共生のための国際哲学研究センター (UTCP) センター長

### 1. おもしろい研究所の人たちとおもしろい発表をすること

阿部 これまで3年、地球研の東京セミナーにつきあっていただき、ありがとうございました。地球研は、関西ではそこそこ知られるようになったんだけど、東京ではまだネームバリューがないということで、東京セミナーを1年に1回やっていた。そこそこの人を集めて、話題提供者も地球研の最新の成果、そしてそれにマッチングするようなそれなりの人を呼んで、お客さんもけっこう来てくれて、シンポジウム形式でやった。それ自体はすごくおもしろかった。

けども、いつまでもこれを続けてどうするというのがまず疑問にあったのです。一般の方がたを相手に話をするのは、とても大事なことです。話すほうも、たんに地球研の広報をするというよりも、あらためて自分のしている研究を紹介するというのは大事なことだと思ったのです。しかし、もっとべつのやり方ができないかというときに、地球研の弱点といったらなだけ



梶谷 真司



阿部 健一

ど、あまり大学生や大学院生と話す機会がない。

**梶谷** そうですか。

**阿部** もちろん、名古屋大学などとは学術協定を結んでいますが、特定のプロジェクトで授業をもっているわけでもない。むしろ、私たちが地球研のよさを聞いてもらう、あるいは話をする相手は、「地球研という研究所がある」ということを知ったら、おもしろいと思ってくれるような人です。たとえばリーディング大学院プログラム、それにはいくつかの環境、あるいはもうすこし広い国際理解、それは梶谷さんのところのプログラムですが、広い意味での環境あるいはこれからの世界をどうするかを考える、そういったプログラムに属している若い研究者。これから地球研の研究者として、「そんなにおもしろい研究所があるのだったら、ぜひオレも」と思ってくれるような人を相手に話したい。

**梶谷** そういった感じのことはおっしゃっていましたね。

**阿部** いきなり結論というのもなんだけれども、こちら側としてはおもしろかった。

**梶谷** こちらとしても、毎年なんだかんだと5人くらい、この2年は院生がポスター発表をさせていただいた。リピーターで2回連続でやっているのは、もちろん楽しかったからやっている。「よかったから、今年も……」ということでやってくれていると思うのです。関心をもってくれている学生も多いですね。

**阿部** もちろん制度的に東京セミナーと名づけているから東京で、というのが最初にあったのですが、結果としてこの距離感で、年に1回というのもよかったような気がする。年に1回の研究発表会——学会とはちょっと違うけど学会的な、多少は袴を着てあらためて、こちらも学生さんのポスターを中心とした発表を聞く。そして、うちの研究員も発表する。日常的でない非日常的なところもよかったかなという感じはします。

**梶谷** リーディングということを核にして、東大だけでなく日本のあちこちの大学から同じような年齢の研究者が集まったのもすごくよかったですね。

**阿部** 東大のほうではリーディングですが、いまごろになってと思われるかもしれないけども、参加してくださった院生の人たちは、メジャーはそれぞれの専門があって、あくまでもリーディング大学院プログラムの多文化共生というのはマイナーというか。

**梶谷** そうですね、副専攻ですね。今回の彼らは、もちろん自分の専門があつてのものだけでも、そのときに彼らには、「あまり専門の話が無理にしないで」とは言っていました。自分の専門じゃないから、いい加減な話になるかもしれないけど、「それは恐れるな」と言っていたのです。

地球環境とか政治とか、そのときそのときでテーマがあつたのですが、そこに結びつけて、なにかそれなりのことができればよいくらいのことで。とにかく専門から離れるということを彼らに意識させたんですね。

**阿部** 私もびっくりしたのは、たとえば日常・非日常のことを話していた大池惣太郎さん（ポスター G-05）も、べつにそれを専門でやっていたわけではない。

**梶谷** 大池さんはバタイユなので、まったく関係ないですね。

**阿部** でも、私たちにとってはすごくおもしろかったし、彼自身もおもしろがってやっている。あとは、みなさん大なり小なりそうだったと思うけど、メキシコのアマモの種の、言語学の中川亮さん（ポスター G-08）かな。

**梶谷** 彼も専門は言語学だけれども、あの研究をやっているわけではないんです。

**阿部** そういう具合の広がりですよ。まったく違うところの研究を彼ら自身がおもしろがってやっているのが伝わるし。

**梶谷** 彼らも、言語なら言語とか、大池さんもフランスで思想家を扱うとか、どこかで専門性を残しているんだけど、フィールドとかテーマとしては

外に出るということは彼らも意識してくれた。そのうえで、要は、話として、テーマとしておもしろいかどうかですよね。専門的に緻密かどうかということよりも視点とか見方がおもしろいかということを中心に重視した。準備のために、最初にどういうテーマでやるかという勉強会をして、ポスター発表のポスターのつくり方も相談して、2回は少なくともやっています。それから当日を迎えているので、けっこうきっちりやっています。

**阿部** いろいろと準備をしていただいてありがとうございます。

## 2. 3年間やってきたことのあらまし-第3回を終えての目線で

**阿部** 今回は3年目で、最初の年が「地球の想像力」(付録参照)。第1回は想像力というキーワードで、高野孝子さんは現場主義というか、地に足をつけるヴァナキュラーな考え方をすごく大事にするし、近藤康久さんは、我々のもっている知識情報をどう活かすのかを常に念頭に置いて彼は研究をしている。そのなかで梶谷さんが経済という視点と、豊かにどう生きるかということを出してくれたのかなという感じはします。

それを受けて、第2回は政治ですよね(付録参照)。正直に言って、地球研がいちばん弱い部分で、政治というものを正面きってあまり議論したことはなくて。

**梶谷** でも、どこでなにをするにも、どこかで政治が関わっているはずですよ。地球研・地域環境知プロの佐藤哲(注1)さんとか地球研・エリアケイパビリティープロの石川智士(注2)さんと話をしていて、行った先で地元の役人なども含めて、そういう人たちとどのようにしてやっていくのかがきち

---

注1) 地球研プロジェクト「地域環境知形成による新たなコモンズの創生と持続可能な管理」(2012年度～2016年度)のプロジェクトリーダー。地球研名誉教授。現愛媛大学社会共創学部教授。

注2) 地球研プロジェクト「東南アジア沿岸域におけるエリアケイパビリティープロの向上」(2012年度～2016年度)のプロジェクトリーダー。現東海大学海洋学部教授、地球研客員教授。

んと整わないと最終的には進まないのだという話をしました。広い意味での政治が大事だなと。

あとは、いまの時代だと、住民との合意を取り付けるという民主主義的な手続きもとても大事です。たまたま私はその前に國分さんの本を読んでいて、それも小平の森林を守るという環境問題に直結するような話でした。彼を呼べてよかったですね。

**阿部** あのときの基調報告は國分功一郎さんと地球研の熊澤輝一さんでした。國分さんの場合は、道路をつくる・つくらないという、はっきりとしたイエス or ノーの答えをどうするのだという、課題が明確ななかでの民主主義。熊澤さんの場合は、地域をこれからどうするのだと。課題がないかということではなくて、課題だらけなのだけれども、これからどうするのだということをとともに考える。これはかつこつきの「民主主義」、みんなが参加して決めるという意味での民主主義ですが、國分さんの話と熊澤さんの話は、同じようではじつは違っていた。

**梶谷** そうですね。住民主体のコミュニティづくりとか意思決定と、政治との戦いですよね。

**阿部** 地球環境問題と、一言でいっているなかでも、だいぶ違う側面がある。たとえば気候変動枠組条約みたいなところで、温暖化ガスの濃度をこれだけに下げないといけないう具体的な目標が設置できる問題と、私たちが地球環境問題として考える、将来はどのように豊かであるべきか、どういう未来をつくるべきか。未来をつくるにあたって、豊かさとはなにかを問いなおさないといけな。そういった問題の設定の仕方とは、縦と横くらい違ってはいるかもしれない。その二つが地球環境問題というなかに混ぜこぜになっているような感じもします。

なにが言いたいかという、課題解決の学問と価値創造の学問という二つのものが地球環境学のなかで混ぜこぜになっているかもしれないなど。問題といたり、地球環境問題は「課題解決だ」と思ったりしてしまっているけど、じつは価値創造ではないか。なにが豊かさなのかを問いなおしながら、その



豊かさを実現するためにはどうすればよいか。

**梶谷** そうですね。いままでの価値観をそのまま維持してやっていると、けっきょくどうやって抑えるかとか、どうしてもそういう話にしかならない。

**阿部** いままでと同じ価値観で将来をフォーキャストとすると、解決すべき課題が浮かびあがってくるだけ。

**梶谷** それはたぶん、モグラ叩きみたいに、次々と出てきたものに対処するだけになる。

**阿部** 課題解決も大事なんだけど、そういった課題解決の学問をするのではなくて、豊かさとはなにか、新しい価値、いままでみんな気がつかなかったことこそ、うちが大切にしなければいけないのではないかと。創造とって、新しいものをつくるというより、いまみんな気がつかないものに光を当てて、こういったものを大切にしなきゃということになるのだと思う。第3回は「われわれがどう生きるべきか」に傾斜しているのですよ。どういう世界が、どういう社会が将来にあり得るべきなのか。生活、文化という、具体的にはモノに焦点を当ててというところで。

**梶谷** それともう一つ、これは私が第1回のときに多少言及したのだけでも、環境問題というのはやっぱり経済との関係は切り離せない。とくに資本主義の問題。第1回の時に私が共有型経済の話をしたのは、環境問題にとってより親和性の高い——環境問題を解決したり、あまり大きな問題を引き起こしたりしないという点で、より親和性の高い経済システムは、資本主義と共有型経済とのどっちかというところ、共有型経済のほうがよい。

資本主義と社会主義は、かつては対比されていたのですが、社会主義の国も環境破壊はひどかった。自然から富を取奪してものを生み出すという意味においては、資本主義も社会主義も大差はないと思うのですよ。そういう意味では、共有型経済は資本主義と矛盾はしないのだけれども、環境にとってはより負荷が少ない経済システムなのかなという気がします。実際に資源の消費を少なくするというところでいうと、共有型経済もよいなと。

そういう点で、企業活動自体にこの理念を入れている会社という意味では、

無印良品（株式会社良品計画）はよかったと思うんですよ。

**阿部** なるほど。

**梶谷** 地球研の縁でということでは、鞍田崇君が講義で矢野直子さんと呼んでくれていて、私はその話を聞いて感激して、このテーマを出したときも、矢野さんのことが念頭にあった。なんだかんだいって、企業活動が環境問題と折り合いをつけられるようなモデルができないと。企業というのは必要なものだけをつくって消費するというわけにはいかないから。そういう点で、どうかかたちですれば折り合いがつくのかというのを、矢野さんから聞けるかと思って、彼女に声をかけたのですね。

### 3. 共有型経済を基礎に新しい生き方を探ること

**阿部** 第3回で無印の矢野直子さんに来てもらったのは大きかった。そもそも経済というのも、本来は金儲けという意味ではなくて、経世済民ですか、みんながどうすれば豊かになれるのかを考えるという、そういった発想だったはずでしょ、アダム・スミスとかそのころには。ところが、ある時点からは、会社や企業が、今年はこれくらい儲けた。それなら来年はもっと、ということになっている。

**梶谷** ひたすら富を生み出すことじたいが目的になっている。

**阿部** 昔は違っていたじゃないですか。会社にしても、社会のためにやる。べつに松下幸之助のことを出すわけじゃないけど、松下幸之助は社会に役立つものをつくる。そのためのコスト、次のことをするための多少の利潤はもちろん得るけど、あくまでも自分のところの会社がつくる商品あるいはサービスが社会のために役に立つのだという前提のもとにやっている。

銀行なんかもそうですね。これは私が関わっている銀行の人から聞いたのですが、昔は、銀行の役割として、「お金の余っているところがどこにあ

るのか」をちゃんと知っていた。お金が足りないところ、彼らにちょっと融資をすれば、彼らは起業したり、社会に役立つ仕事をしてくれたりする。それを融通するのが銀行家だった。

考えてみれば、グラミンバンクもいっしょなのですよ。いまはノーベル賞とかをもらっているけど、かつては銀行だってそういう役割があった。社会のために、お金が足りないところにきちんと。新しく起業しようとしている、お金が足りないといっている彼らがやりたいことは、ほんとうに社会の役に立つのか。あるいはきちんと持続可能性があるのか、一時的なものではなく、長くつづくのか、そういったものを判断する力というものを銀行員として経験として積み重ねていく。それが銀行家だった。

**梶谷** やっぱり、投資のように、お金を生み出すためにお金を使うようになって、本当に必要かどうかは関係なくなった。消費もそうですよね。モノが要るからつくるのではなくて、売るためにつくる。いらぬのに資源を使って、その結果ゴミも出るという感じになったから、資本主義も変わってしまったのですよね。

**阿部** 消費でもそうですよね。必要ないものを買わせようとする、そっちの方向に全てのものが行っている。それが梶谷さんの言葉で言えば、共有型経済が必要だということにつながっていくのだけれども、これがなかなか実行できない。企業もやっぱり変わってきているのではないかと思うけども。

**梶谷** けっきょく収入をどうするのだという話になるわけですが、共有型経済の部分が増えたと、買わなくてもよいものが増えていく。みんな持っているから、お金を払わなくてもよいようになっていくと、多分そんなに収入がなくても、そんなに稼がなくても生きていけるようになる。でも、多分それで満足しない人たちがいるので、それは難しい。

他方で、中国で自転車をみんなで共有できるようにしようといっって、山のように自転車のゴミが出ている。たしかに、みんなで共有したらしたで、無駄がなくなるのかというのは、中国の例をみていると、自分のものでないから全然大事にしないのかもしれない。たぶん、普通以上にゴミが大量に出ていますよね。

**阿部** 自分のものではないから大切にしないというのは、それこそ「コモンズの悲劇」。

**梶谷** みんなのものだから大事にしようという発想になればいいのだけでも、そこがやっぱりなかなかね。どんどんとみんなで消費すればよいみたいになると、使ったもの勝ちみたいになってしまう。

**阿部** 共有するといっても、さまざまなかたちの共有がある。シェアハウスとかカーシェアリングとか、こういったものもそうですね。ああいうのも消費財というのか耐久財というのか。

私たちのときは、結婚して家建てて、車をもつということだったが、いまはそういう意識はあまりないのかな。なんで家を建てないといけないの。それよりもっと……。シェアハウスしている人もいるし、身軽にしていたほうがよいと考える人もいて、ついでにいうと結婚もなんですの。そこらへんはよくわからないけど。

**梶谷** そういう意味でいうと、収入が少なくて、そんなに消費できない。できないから、さほど消費したいとは思わない人が増えてくれば、それに合ったかたちの世の中のシステムができあがってくるでしょう。ただし、環境問題ということでは、そういう人たちがちょっと増えたから環境破壊が少なくなるかという、そんなことは多分ないですね。

**阿部** 今回の無印の矢野さんの話を聞いて、キーワードとしてはもしかしたら鞍田君の「愛おしさ」。共有物に対して愛おしさがあるのか、あるいは愛おしさというのはいったいなんなのか。消費は、字面だけみていたら、ことごとく消し去るみたいで、ろくな言葉ではないですね。英語で消費はコンサンプション、肺病ですよ。肺を使って、使って、使って、使い倒して病気になるのがコンサンプションです。そういったことを考えると、あきらかに無理があるというか、なんでこんな考え方が出てきたのかなと思うこともあります。

使って、使って、ポイッと捨てたらよいというのは、私たちはそういった考え方は当たり前だと思っているけど、そういった考え方ができたのはたか

だか50年、100年くらいのことかもしれないなど。もっとそれ以前をふりかえってみると、おじいちゃん、おばあちゃんたちの時代は、ものを大事に使うというのがあったはずなのに、ものに対する意識がだいぶ変わってきているなど。

**梶谷** 最近は断捨離とかいわれるように、ものをどうやって捨てるかのほうが大事で、使うかとか買うかとかじゃなくて、捨てるということが大事みたいになっていますね。

**阿部** パリ条約のころから大きく変わってきたのは、国家が主体ではなくて、一人ひとりの個人の生活が環境問題に与える影響、これに焦点が当たりはじめた。もちろん条約自体は各国で守っていくのですが、それだけでなく一人ひとりの役割をもういちどみなおすような時代に入ったのかなという感じがしたのです。それも踏まえての第3回が、この「生活文化」というテーマ。あらためて自分のいまの生活に焦点を当ててみようかと。

**梶谷** そうですね。そこで、「親密」さとか「感じがよい」とか、「心地よさ」とか、そういう価値観が大事なのかどうか、という問いが出てきたのだと思うのです。でも、そのへんは現実には難しく、たくさん消費して贅沢するのが気持ちよいという人は当然いる。無印が企業活動としておもしろいと思ったのは、市場のニーズを見極めてというか、たとえば調査して商品をつくるのではなくて、「理想の消費者」という言い方をしていたかな、「こういう生活をする人」という消費者のモデルをまず先につくって、それで商品づくりをして、消費者がそれに合わせるという。彼らは企業としてあるべき社会や人の価値観というものをつくって、そこに合わせてものをつくったのだと思うのです。そこにほかの人たちが合わせるようになった。

**阿部** 新しい生き方を提示しているということです。

**梶谷** それが、「感じがよい」という言葉で、彼らがあらわしたものだと思うんです。

**阿部** それは、課題解決の地球環境学ではなくて、価値創造の地球環境学と

いう感じで、そうしたかっこつきの「企業活動」で一つの生き方を提示する、その生き方を実現するための品物は私たちが用意しますよと。

**梶谷** でも、あのときに矢野さんも言っていたけど、それでけっきょく企業として大きくなって儲かるようになったら、一つひとつは環境に配慮したものかもしれないけど、それを大量につくって売るという、ある種の矛盾を抱えている。それは2000年代の初期のころかな、無印が大きくなっていったときにコンセプトが揺らいで、社内でも対立というか、「無印ってこんなのでよいのか」ということがあって、離れていった人たちが何人もいたと言っていましたね。それを乗り越えてのいまがある。

彼らは彼らで、企業としての矛盾がある。哲学をやっていると、理念で「これはだめだ、あれはだめだ」とか言います。でも、それはすごく簡単で、理念だけ言っていると、じゃあどうするの、暮らしをどうするのというところに答えられない。そういう点でいうと、無印の人たちは理念を掲げて商品をつくって、その結果、儲かってしまって、矛盾に突き当たって、じゃあどうするののかという、その逡巡というか、彼らの苦闘がすごくリアルでよいなと思いました。

**阿部** あのときに矢野さんも正直に「大きくなりすぎて」と言っていた。そしていま梶谷さんの話を聞いて思い出したのは、地球研のプロジェクトの一つで、羽生淳子さんの小規模経済プロ（注3）です。もともとは縄文時代の考古学の専門家ですが、彼女はけっして縄文時代に戻れというわけではなくて、スケールメリットだけを重視するのではない経済のあり方がもしかしたら導き出せるのではないかというプロジェクトでした。これ自身もこれからまたさらに研究を積み重ねなければならないのですが、キーワードとして小規模経済がある。

ただし、一方で、人新世という言葉で、第1回の「地球の想像力 人新世時代（Anthropocene）の学び」のときに言ってしまったのですよ。つまり、

---

注3) 地球研プロジェクト「地域に根ざした小規模経済活動と長期的持続可能性—歴史生態学からのアプローチ」（2014年度～2016年度）プロジェクトリーダーだった羽生淳子さんは、現在、カリフォルニア大学バークレー校人類学科教授、地球研客員教授。

なんだかんだいいながら、われわれは一人ひとりだけでも地球のうえで、小規模経済がよいと言いながら、これもまた矛盾を提示して、われわれの食卓に並んでいるものは地球の裏からやってきている。これをまた元に戻すのかと言われたら、そうではないでしょうと。大きく逃げ過ぎた問題群を個別に対処してはだめだろう。課題解決型では、次から次へともぐら叩きみたいになりそうなので、別の方法がよいという感じはしている。

#### 4. 信頼は身近でなくても築ける

**阿部** いくつかヒントはあるのです。今回の2日目の午前中に参加して下さった地球研の若手、そして東大を中心とした院生の人たちによる哲学対話で出された問い (p.86-87 参照) を見てみると、2グループあって、片方のグループは、「どうしたら生活をスローにできるか」、「既にあるものを探し出すにはどうしたらよいか」という問いが出された。これは、気づいていない価値に気づくということだろうと思いますが、あとは、「お金がなければ文化的な生活はできないのでは」という疑問が出ているし、「なにをシェアすべきか、なにをプライベートすべきか」と。これもさっきの話からすると、すごく重要な視点だと思います。

**梶谷** 私有と共有のバランスですよ。



**阿部** 「よそ者にインティマシーを感じられるか」、これはどういう文脈で出たのかな。

**梶谷** インティマシーというのと、ある種の排他主義みたいなものが結びつきかねないのではないかということです。スローフードって、そういう政治的背景をもっているんです。じつは、たいへん保守的な地域で起こるのですよね。要するに、外から来たものはだめだ、ここのものがよいのだという、ある種の排他的な純粋主義みたいなものがある、それとスローフードの誕生とは関係しているんです。だから、スローフードがよいとか、有機農法とか健康志向もそうなのだけど、ナチスがとても有名ですよ。

だから、環境問題にしろ、健康志向にしても、外から来るものを排除する。自分たちこそが純粋なのだという発想が出てきやすくて、そういう危険を孕んでいる。食べ物に関して、健康に関して、歴史的にはあるのですよね。だから、ナチスというのは環境政策と健康政策に対しては、たいへん先進国だったのです。

**阿部** それはどこかでこれは正しい、これは正しくないとはっきり分けようとする。そういったこととも関係しているのですか。

**梶谷** 身近なものを大事にして、外から来たものは警戒するという、ある種のメンタリティでしょう。けっこう危険性を孕んでいて、日本の食材はよいけど、海外のものはだめみたいなことも、日本のいまのナショナリズムと連動している部分があると思います。現実に安全かどうかということもありますが。

それと地域経済の地産地消というのも政治的、思想的にはそういう危険を孕んでいるんです。そこはけっこう難しいと思います。インティマシーというものは、身近なものへの愛着ということに限定して、それが大事と言い始めると、外のもの、異質なものってなんなの、ということが問題になると思います。

**阿部** いまの話聞いて、たしかにそうだなと思う反面、たしかに身近なものはよしとする。それはたんに信頼関係だけに置き換えられるのではないか



と思うところはある。身近なもの、たとえばしょっちゅう顔を合わせている農家の人のものだったら間違いはないだろうと。向こうも売るときには顔を合わせているから、そんなに変なものは売れないと。

だから大事なのは、たとえ遠く離れた顔もみていない人のつくったものでも信頼できると思えるかどうかですよね。そういった制度をつくれるかどうか。いまおそらく食の安心安全については、どうしても国がそれを保証しなければということになっている。だけど、この時代はフェイス・トゥ・フェイスというか、遠く離れた人でも1対1で個人と個人が、地域と地域がさつと結びつくということも可能ですよね。

**梶谷** 可能ですからね。だから、だれだれさんがつくった野菜とかという信頼ができるということはありますよね。

**阿部** ファーマーズ・マーケットなんかで顔写真を見せているでしょう。売っている人の名前と顔と場合によっては電話番号まで書いている。うちのマックグリーンビー・ステーキン——食と農のプロジェクトをやっている彼(注4)にしてみれば、こんなものはありえないと。(笑)

**梶谷** あそこまでやらないと信用しないということですからね。

**阿部** 逆に彼が感心したのは、つくる側からみたら、俺がつくっているものになんの問題があらうかということ、顔までさらけ出して置いていると。アメリカだったら、そんなことをやっても誰も信用しないから、第三者機関がそれは正しいか、正しくないかを認定する。だから、認証とか認定機関というのは欧米的な発想で、日本人はフェイス・トゥ・フェイスで顔まで載っていて、このおじいちゃんかと、それならまあと。

**梶谷** ほんとうかどうかともわからないし、嘘かもしれないけどね。

**阿部** 嘘かもしれないけど、日本的な文脈のなかで、嘘をつくはずはないと。

---

注4) 地球研プロジェクト「持続可能な食の消費と生産を実現するライフワールドの構築—食農体系の転換にむけて」(2016年度～2020年度)のプロジェクトリーダー。地球研准教授。

**梶谷** ないと思うのでしょうか。いつも不思議だなと思いますけどね。

**阿部** そこでいくと、信頼関係をどう担保できるか。コモンズも、おそらくそこらへんにかかってくるのですよね。

**梶谷** 信頼するということ自体が、愛着というものを信頼に置き換えたら、かならずしも身近でなくてもよいというのはあります。でも、信頼のつくり方、どういうものを信頼するのかというのが文化によっても違うし、都市の人間の信頼の置き方と田舎の人の信頼の置き方とは違うのかもしれない。都市の人って、けっこうブランドが大事みたいところがあるじゃないですか。

**阿部** ブランドはね、本来的な意味だとすごく大事ですよ。ブランドというのは信頼の証じゃないですか。あの会社が、あるいはあの人がという、人に置き換えても。だから、これはお百姓さんの顔写真と同じですよ、イメージとしては。「俺の会社がつくっているものなんだから」ということで、変なものをつくれないという。

## 5. 日本はどこかで一人ひとりの意識の問題にしてしまう

**梶谷** やはり地球に対して、個々人がどうするかというのは、少なくとも一つひとつのことに限っては、大きなレベルでは地球環境にそんなに影響しないから、みんな意識もしない。だけどやっぱり私は経済が大事なと思います。けっきょく資本主義をどうするかという問題かなと思うんです。それは、



いまの資本主義を根本的に変えるとかではなくて、たとえばゴミ処理とか環境問題に対する取り組みで、私はドイツに住んでいたことがあるので、ドイツと日本の環境問題への取り組みをみると、日本はどこかで一人ひとりの意識の問題になってしまう。

みなさん気をつけてくださいと言うのだけれども、みんな気をつけられないので、たとえば環境のためになにをしていますかと哲学対話で聞いたことがあるのですが、みんながしているのはゴミの分別くらいでした。たとえば某ファーストフード店では、ゴミは分別しているのだけれども、捨てるときは全部いっしょに捨てていると聞いたことがあります。「分別しています」というポーズをみせているだけなのですよ。彼らがまとめて捨てているのは、彼らのせいかという、そうではなくて、ゴミの収集のシステムがそうになっているから、そうせざるを得ないと思うのです。

だから日本では、制度的には個々の良心に任されてしまっていて、それぞれがなにも意識しなくても、ちゃんとそうなるようにできていない。たとえば、ドイツでは、プラスチックのトレーでものを小分けにして売ることをそもそもしないのです。だから、ドイツで暮らしていると、日本ほどのスピードでプラスチックゴミは出ない。日本のように、普通にしているもあつというまにゴミ箱がプラスチックで溢れるということはないから、個々の人の意識の問題にはしていないのです。あくまでも制度としてどうするのかを考えているのです。

**阿部** 欧米で一括りにするのは問題だけれども、環境問題に対するさまざまなコンセプト、言葉、これはすべて欧米ですよ。持続可能性とか生物多様性も欧米の研究者がつくりあげた概念です。生態系サービスとか、もうすこし身近なところでも、いろいろな言葉、制度などにしても、欧米主導でやっている。

でも、「だけれども」というのを考えたいのです。日本のよさ、日本からなにか環境問題について世界の人に発信できるのではないかという思いがかなりあって、もういちどそれをみなおしてもらおう。日本人は個人一人一人の意識の問題になってしまうといったところで、いまこの時代の地球環境問題——つまり、いままでの国が主体の時代ではなくて一人ひとりとなったときに、

制度や法律とかにもよらずに、一人ひとりの行動で、これが環境問題のためにも大事だということを一人ひとりができる。日本ではやっているみたいな話になってほしいなど。

## 6. 「ローカルからグローバルへ」は「地方から都市へ」の相似形

**梶谷** たとえば、過疎の村とか限界集落とか、そういうところだから問題がたしかにあると思うのだけれども、翻って考えると、東京でも過疎化している地域はありますよ、多摩とか。ああいうのをみていると、地方で「問題だ」と言っているのは、じつは都心でも同じような問題があって、なおかつそれを解決する手立てや資源、人間関係は、地方のほうがあるのです。地方の問題を都市の論理でなんとかしようとするのだけれども、その逆で、都市の問題を地方の論理で考えたほうがよいことがすごくあると思いますね。グローバルなものがローカルに影響するのはわりとわかりやすいのだけど、ローカルなものがグローバルに影響を与えるのかとなると、それは地方のものがどうやって都市のものに影響を与え得るかということと、問題としては近いと思います。

**阿部** 共有型経済と関連させながらもうすこし話したいな。

**梶谷** 共有型経済というのは、田舎では当たり前にならなことが起きていたりします。コモンズの問題もそうなのですが、むしろ、都市の問題を考えるにしてもヒントになる。新しいかたちで、そのままというのは無理なのだけど、むしろ地方のほうに解決のヒントがあるのかなと。

**阿部** じつはびっくりすることに、柳田國男が『都市と農村』（岩波文庫、2017年）で同じことをいっている。戦前に、いまと同じように農村から都市へとどんどん人が出て行くことを指摘したうえで、「このままでは都市がだめになるよ」と。農村ではなくて、都市がダメになると。農村でできあがったこんないろいろな人を、都市はそのまま受け入れているけれど、都市の文化

なり生き方なりをきちんとつくれるのかと。

都市と農村を対比させながら、なにを心配しているかという、いま私たちは「このままでは農村が……」と言っているけど、柳田國男がその本を書いた時代は、むしろこのままいくと、農村が長い歴史のなかで築きあげてきた生き方、農村で暮らす規律といおうか倫理といおうか、そういうものがちゃんとある。それが都市ではできないうちに、ただ人口だけが膨張してしまう。こうなったら、都市の将来はどうなるのだという疑問を呈している。これは、いまの都市と農村の抱えているものを、すこし違った目でみる、ひとつのきっかけになるのかなと思います。

**梶谷** たぶん当時は、都市にこんなに集中するとは思ってなかったのでしょうね。農村は農村で維持できると思っていたらうから。いま地方は、さまざまな価値や倫理があるかないかというよりは、コミュニティ自体が崩壊しつつある。いっぽうで、都市には都市のある種の倫理というか、たとえばあまりプライベートに関与しないと、そういうルールというのがそれなりにできていると思うのだけでも、それだけでもうやっていけなくなった。

**阿部** 熊澤さんと話していたのですが、じつは都市というのは、ルールはきわめてシンプルなのです。農村のほうが複雑極まりない。簡単によい悪いでは決まらなくて、この人は嫌いだとか、この人とつるもうとか、生きるうえで単純化がとても難しい。それが農村の窮屈さ、しがらみということになるのです。いっぽうで都市というのは、そういったものから自由になった。では、シンプルに生きるとはどういうことか。

**梶谷** たしかに。農村がシンプルかというところでもない。都市のほうがシンプルにしようと思ったらしやすいかもしれないですね。

**阿部** 都市はモノだけでいえば、「いろいろなモノが溢れているのは都市だ」という言い方もできる。ものを一つ買うにしても選択肢がある。田舎では、それほど選択肢はないのです。そこらへんで、無印などの企業活動、あるいは鞍田さんがいう「愛着」、インティマシーも出てくるのかなと。

なにをシンプルというかといえば、たとえばアイヌの人びとの生活用品、

多様な品物を並べている博物館に行くと、ほんとうにシンプルで、必要最低限のものしかない。たとえば小さな匙みたいなもの、あるいは木でつくった刀。でもそこに描かれている模様、これはすばらしい。それぞれ自分の持っているものは、ほかの人とその模様において区別する。機能というところにおいてはきわめてシンプルだけれども、飾り、それも過剰な飾りではないのですが、すばらしい模様が木彫りさえている。これも多様なのですよ。シンプルだけど多様。こういったこともすこし考えないといけないかなという感じがしている。

**梶谷** もちろん都市のほうが、たとえば多様とか豊富というのは、たしかにある。だけど、それはいま、日本で豊かさの指標というのを、消費とか生産する財の金額というか量によって測るからです。共有されているものの量をなんらかのかたちで数値化すると、意外と東京は貧しいところかもしれないですよ。いまは都市が豊かにみえるような指標を使って、豊かさをそれで理解している。田舎に行ったときに、田舎のほうが豊かだったり、複雑だったりするようにみえる部分って、数値化はなかなかできないのだけれど、あれを数値化して、そういう基準で都市をみると、都市の豊かさって一気に下がると思います。基準を変えてしまって、違う基準で、たとえば共有されている財がどれくらいあるかを測って、それを増やすようなことをすると、都市でもいままで足りなかった部分が補われたりする。

## 7. 改めて「関係」について考えてみよう

**阿部** いままでは当たり前だということでカウントされなかった価値というものも、私たちは基準としてもたなければ。じつは私は、つながることによって豊かになる価値を「関係価値」と名前をつけているのです。

**梶谷** 「関係価値」をなにかのかたちで数値化するとよいと思いました。数値化できない価値を問題にするというのも、もちろん大事なのだけれども、それをきちんと数値で反映させられるようにしないと、豊かさの指標がわか

らなくなりますよね。

**阿部** 金銭的に値札をつけるとしたら、私はすごく抵抗がある。ただし、それを取り出して、目にみえるようなかたちで、「これは大切なものですよ」ということは言っていかなければいけないだろうという感じはする。

そんな話をしながら、そういった価値をつくるという作業は、われわれが対話しながらつくっていかなければいけないものではないかなと。私は梶谷さんのこの本（『考えるとはどういうことか－0歳から100歳までの哲学入門』、幻冬舎新書、2018年）を読んで、「よし」と思ったのはどこかという、「哲学対話で自由になる」と最初のほうに書いてあった。対話をする、考えることで自由になる。自由になるものというのは、さまざまな場面であるのだけれども、たとえばいまの話だったら、金銭的価値に置き換えるとか、あるいは都市的な物質的なものだけで判断していた考え方から自由になること。日常を考えていたら、それから抜け出すことは難しいと。

**梶谷** 難しいですよね。だけど、それから抜け出せると、いま悩んでいることの多くが悩まなくてよくなる。そういうことがあるんです。

**阿部** それが哲学対話。対話ということベースにすることによって、もちろん課題解決にも対話を使うのだけれども、そうでないかたちでの対話を。違和感というものを話し合うことを繰り返すなかで、固定観念から自由になること、それをこれからやっていかなければいけないのかなと。

**梶谷** おそらく結果というのは、出すことばかり考えると、せいぜい何か結果が出て、それで終わりです。だけど、結果を出すかどうかを外して考えると、予想しないことがおきたりします。たとえば、阿蘇の大津愛梨（O2Farm 共同代表）さんがオーガナイズして、阿蘇の五つくらの村で対話をしたのです。1年後くらいに追跡調査というアンケートを取ってもらったのですね。

対話に参加したのは、その地域の、主に農家の人ですが、酪農をしている人や、町内会長的な人などいろいろいて、各地域によって違っていました。そのときには、具体的になにかをしようという話ではなくて、「農業遺産ってなんだろうね」みたいな話をしていたんです。それで追跡調査してみると、

具体的になにを始めたのかは聞いていませんが、自分たちでやることをやり始めた人たちが何人か出てきていたのです。なにかを決めて、これをやろうと言って、目標を決めてやったのではないけれども、それぞれに目標をみつけて動き出す人が出てくるというのは、対話をするとうわりとあることなんです。共通の目標、課題をどうしようという話ではないけれども、自分たちで動き出すということがある。

**阿部** なるほどね。でも、きっかけはそういった対話、地域のなかで話をすることによって、あるいは相手の言うことに耳を傾けて、そして考える。共有経済を支えるのは人と人との対話しかないかなと。

**梶谷** 具体的に言葉を交わす必要は、かならずしもないのだけれど、なにかを一緒に共にすることかと思うのです。同時じゃなくてもいいのですが、なにかモノや場所、コトが媒介になって、一緒になにかをしている。そういうことが共有。それは広い意味では対話になっているのだと思うのです。どうしたらよいのかという関心が共通なので、話をせざるを得ない。

**阿部** たとえばコモンズを支えるのも、ふだんからコミュニケーションを取っていて、お互いをよく知っているから、「それだったら……」ということでコモンズが成り立っている。それがコモンズを支えるコミュニティのあり方です。コミュニティ一人一人に差があることは当たり前で、でもその差をできるだけ縮めるために共有資源を使いましょうと。

そんななかで、お互いがお互いをよく知っている。それが田舎生活、農村生活のなかでプライベートがなくて、全部オープンになってというしがらみにも通じていくのですが。いまお聞きしていたら、いちいちそういった対話とか、相互監視的なことをやらなくてもよさそうですね。

**梶谷** インターネットをそういうものにどれくらい活用できるかわからないのですが、別の手段で結びつくことってできるから。都市ではいま、隣の人よりもネットでつながっている人のほうがはるかに身近でいられる。それはいわゆる地縁とは違った新しい縁ですよ。

**阿部** でも、その新しい結び方というのは、いったいなんなのか。それがほ



んとうに共有経済というところまでいくような方向でいっているのか。

**梶谷** かつて UTCP で脳性麻痺をもった人を研究員として雇用していたことがあって、いまは神戸大学の教員になっているのですが、彼女は Facebook がなかったら自分は生きていられなかったと言っていたのです。彼女は喋るのに困難があるので、人と直接に話すのは、相手が聞き取りにくそうな顔をするだけでも負担なのだと思います。だけど、Facebook ならそういう障害をお互いにいっさい感じずにやりとりができる。

とくに障害をもった人とか、そうではなくても、それがなければただ孤独なだけの人はどうするのか。この前、障害者の演劇ワークショップに行ってきました。私のグループは演劇関係の人ばかりで、障害をもった人はいなかったのですが、オーガナイズをしていた人が言っていたのは、「いまは音声だけでメールを書いたり読んだりできるから、目が見えない人もメールを打てるのです」と。しかも、「相手は目が見えない」ということを忘れるくらいのタイミングで文章が返ってくるのだそうです。それがなかったころは、彼らは直接に人とやりとりをすることができなかった。それが IT 技術のおかげでできる。

**阿部** そうなってくると、哲学対話というのは、フェイス・トゥ・フェイスはひとつの仕方としてありますが、この時代だから、もっとべつのかたちの対話の仕方というのがあるかもしれない。哲学対話で生まれたような自由さで対話する。問いかけ、考えを聞く、話すということを繰り返す。これによって新しいものも生まれるし、障害者の人も障碍から自由になる。

**梶谷** 哲学対話と Twitter を組み合わせて、その場にはいない人が参加できるようにしたこともある。それは体の障害もそうだし、物理的な障害も距離も、乗り越えられるのです。人前で発言するのが苦手な人も Twitter だったらできたりする。Twitter を組み合わせたときは、80 人くらい参加したんですが、大人数でも対話っぽくできました。みんなのコメントや問いを Twitter に書き出して、こっちで話しながら、参加者が思っていることはスクリーンで共有できる。

IT 技術や SNS で救われている人はたくさんいます。それがあって初めて

つながれる関係もある。次は、「つながる」ということをテーマにしてもよいかもかもしれませんね。情報や知識、問題を共有すること。それと、人間関係。「関係」ですよ。

**阿部** 私はどうしてもそこで、媒介者というものを想定するのです。媒介者を必要とするつながりもあるし、必要としないで、それこそインターネット上でパッとみんながつながっていく。

**梶谷** たとえば、障害者だったら、手話通訳が必要な状態と手話通訳がいなくても直接にできるような関係をつくり出すということですよ。それは機械でできるようになる場合もあるし、場のデザインの仕方でも、そういうものを克服することもできる。

**阿部** あるいはその二つで違う方向になるということもあるかもしれない。

**梶谷** 媒介者がいるときといないときとね。環境問題とか、社会問題はすべてそうだけれども、けっきょくは一人で解けるわけではないから、関係というものを基礎にしないとなにもできないのですよ。それは今後のテーマにはよいですね。

**阿部** やりましょう。



## 付録

ちきゅうけん

第8回地球研東京セミナー

# 地球の想像力

## 人新世時代(Anthropocene)の学び

2017. 1.26 thu  
10:00-17:00

東京大学本郷キャンパス  
**福武ホール** 地下2階  
福武ラーニングシアター  
東大総合文化センター7-301

**入場無料・申込不要**

「人新世」(Anthropocene)とは、人口増大、森林伐採、生物多様性の減少、人為的な気候変動など、人間とその活動が地球の地質にまで影響を与える、あらゆる地質学的時代に入ったという主張です。人の影響は、「地球の限界」(Planetary Boundaries)に示されているように、すでに地球が許容しうる限界を超えているものもあると指摘されています。

この「人新世」の時代に、われわれは何をすべきなのでしょう。

すでに、地球環境問題に関する情報や知識は十分すぎるほどあります。課題は、情報や知識を社会変革のための行動へと移すための「学習」です。一人一人の日常生活が地球の地質時代区分にまで影響を与える、ということを理解する想像力が、いま必要とされています。

本シンポジウムでは、こうした想像力をどのようにして養うのか、あたたか「教育」のあり方を議論します。

**午前の部**

**ポスター発表・展示**  
東京大学大学院博士課程教育リーディングプログラム 学生・研究員  
九州大学大学院博士課程教育リーディングプログラム 学生  
総合地球環境学研究所 研究員

**午後の部**

**講演1 地球の視点、場との関わり**  
高野 孝子 早稲田大学 教授

**講演2 共同体論としての環境問題**  
梶谷 真司 東京大学大学院 教授

**講演3 知の開放から知の跳躍へ**  
—社会との協働によるオープンサイエンスと橋渡し人材の役割—  
近藤 康久 総合地球環境学研究所 准教授

主催：大学共同利用機関法人 人文文化研究機構 総合地球環境学研究所  
共催：東京大学大学院博士課程教育リーディングプログラム  
(多文化共生 総合人間学プログラム(甲4))

## 第8回地球研東京セミナー

「地球の想像力 人新世時代 (Anthropocene) の学び」

日時：2017年1月26日(木)

会場：東京大学本郷キャンパス

## 地球の想像力 人新時代 (Anthropocene) の学び

### プログラム

**午前部**

19:00-19:30 **ポスター発表・展示**

東京大学大学院博士課程教育リーディングプログラム  
 「多文化共生・総合人類学プログラム (IH&I)」 学生・研究員  
 九州大学大学院博士課程教育リーディングプログラム  
 「持続可能な社会を拓く国際科学大学院プログラム」 学生  
 総合地球環境学研究所 研究員

**午後部**

19:00-19:20 **挨拶**

3F00 2F01 東京大学 教授・東京大学大学院博士課程教育リーディングプログラム  
 内野 慎 「多文化共生・総合人類学プログラム (IH&I)」 コーディネーター  
 3F00 2F01  
 安成 哲三 総合地球環境学研究所 所長

**講演1**  
19:20-19:50

**地球の視点、場との関わり**

高野 孝子 (たかの たかこ) ■ 早稲田大学 教授  
 早稲田大学教授。(特選) エコプラス代表理事。エシカルワーカー PhD。専門は持続可能性教育。環境映画『地球交響曲第7番』に出演。主な著作に、「地球(ガイア)の笑顔に騙されて：環境と教育の25年」(2010, 筑摩社) など。

**講演2**  
19:50-19:20

**共同体論としての環境問題**

梶谷 真司 (かしたに しんじ) ■ 東京大学大学院 教授・共生のための国際学研究所センター (I/TOP) センター長  
 京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程修了。現在、東京大学大学院総合文化研究科・教授。専門は哲学、比較文化、医療史。主な著作に、「シュミット現象学の根本問題——身体と環境からの思索」(京都大学学術出版会, 2002) 「黒色心性と異物性——異物世界の現象学」(藤原義と黒色心性) 京都大学学術出版会に所収, 2001) など。

**講演3**  
19:20-19:50

**知の開放から知の跳躍へ  
—社会との協働によるオープンサイエンスと橋渡し人材の役割**

近藤 康久 (こんどう やすひさ) ■ 総合地球環境学研究所 准教授  
 2010年東京大学大学院人文社会科学研究科修了。博士(文学)。2014年より地球研に在籍。専門は考古学、地球環境学、オープンサイエンス。主な著作に、「フィールドワーカーのための GPS・GIS 入門」(古澤拓郎・大西優夫・近藤康久編。古今書院, 2010) など。2016年10月より文部科学省科学技術・学術政策研究所科学技術予測センター客員研究員を兼任。

19:50-19:59 **休憩**

19:00-17:00 **パネルディスカッション**

司会者 梶谷 真司 東京大学大学院 教授・共生のための国際学研究所センター (I/TOP) センター長  
 九州大学 教授・九州大学大学院博士課程教育リーディングプログラム  
 「持続可能な社会を拓く国際科学大学院プログラム」 コーディネーター  
 西條 辰義 高知工科大学 教授・総合研究所フェローチャー・デザイン研究所センター長  
 窪田 順平 総合地球環境学研究所 副所長  
 コーディネーター 阿部 健一 総合地球環境学研究所 教授

**【お問い合わせ】**  
※平日9:00～17:00にお願いいたします。

**総合地球環境学研究所**

〒603-8047 京都市北区上田町4-4  
広報室 tel: 075-707-2126

**【会場】**

東京大学本郷キャンパス  
 福武ホール 地下2階  
 福武ラーニングシアター  
 〒113-0033  
 東京都文京区本郷 7-3-1  
 tel: 03-5841-0320  
 ●アクセス  
 都営大江戸線 本郷三丁目駅 徒歩7分  
 京成メトロ丸の内線 本郷三丁目駅 徒歩5分  
 京成メトロ有楽町線 本郷三丁目駅 徒歩20分  
 京成メトロ有楽町線 東大前駅 徒歩10分

ちきゅうけいん

第9回地球研東京セミナー

入場無料  
 第二部ワークショップのみ事前申込制

ご知り通りから地球の環境に直面して、私たちが生きる環境について考え、みんなで話し合い、未来を選ぶ方法である民主主義。しかし、「みんな」とは誰のことなのでしょう？これが定まらないと、民主主義は葛藤します。まちの歩調から気候変動の神羅索的に直面して、これらはすべて「みんな」が環境を「正しく」選べるか、という問題に帰着します。しかも、物事を考えるルールが変われば、何が「正しい」かも変わってしまう。葛藤はいつまで深まります。

現代は、地球表層（気圏・水圏・地圏・生物圏）全体に人間活動の影響が見ている「人新世」といふ新たな地質学的時代に入ったとされています。地球環境の未来を考えるとき、「みんな」は誰を指し、誰を指さぬ。様々考えます。本セミナーでは、哲学者の園分功一郎氏をお招きしての基調講演と、大学院生と若手研究者による研究成果をもとにしたワークショップを通して、「みんな」と「正しく」が個別に動く中で環境の未来について考える術を問いつつ、民主主義の葛藤を包摂した未来設計のあり方について考えます。

# 地球環境と民主主義

## 人新世 (Anthropocene) における学び

Global Environment and Democracy: Learning in the Anthropocene II

日時 2018 1 / 27 Sat  
 10:00~17:00

会場 東京大学駒場キャンパス  
 21 KOMCEE West  
〒113-8654 東京都文京区駒場3-1-1

12:00~12:00 ポスターセッション  
事前に募集した地球と環境の持続可能性に関するポスターをテーマとし、大会発表者以外の研究者のポスターを展示。

13:00~13:00

第一部 講演

環境問題と民主主義  
園分功一郎 東京経済大学 経済学助 准教授

地域らしさの未来を考える  
ーともに作りともに使う未来デザインの“型”とは？  
 熊澤 輝一 総合地球環境学研究所 准教授

発表 ポスターフラッシュ発表

15:00~13:00

第二部 ワークショップ ※第二部ワークショップのみ事前申込制（定員 40名 - 先着順）

主催 東京大学地球研、上野の森自然史博物館、地球環境学研究所  
 共催 東京大学大学院生と若手研究者ラーニングプログラム「多文化共生・総合人間学プログラム」(H48)

第9回地球研東京セミナー

「地球環境と民主主義ー人新世 (Anthropocene) における学び」

日時：2018年1月27日(土)

会場：東京大学駒場キャンパス

第9回地球研東京セミナー

## 水プログラム

10:00～12:00 **ポスターセッション** 会場：目1 カフェテリア KOMOREBI  
 事前にご予約のキーワードで募集した、地域と地域の持続可能性にかかわるテーマによる、大学院生や研究者のポスターを展示します。それをもとに、参加者同士での対話を進めます。

**キーワード**  
 防災、防災、支援、福祉、教育、正義、民主主義、持続可能性、自然環境、NPO、ボランティア、市民社会、市民サイエンス、ワークショップ、市民参加型、市民デザイン、アパティオフレンドシップの育成、地域経済、コミュニティ、地域創生（地域再生）、地域政策、労働経済、資本主義、コネクテッド、自然環境政策・保全・再生、社会開発、生活環境、人間と社会に与える影響

**第一部** 会場：目1 レクチャーホール 第一部はインターネット同時配信も行ないます。  
<http://www.chikyuu.ac.jp/>  
 聯合司会・遠山 真理（てのやま・まり）■ 総合地球環境学研究所 地域創生教授

12:00～13:20 **開会挨拶**  
 ■ 東京大学大学院環域学国際教育リーダーシッププログラム  
 森山 エ（もりやま・たくみ） ■ 文学部 総合人文学プログラム（1942）、コーディネーター  
 安成 晋三（やすなり・てつぞう） ■ 総合地球環境学研究所 所長

13:20～13:50 **特別講演** **環境問題と民主主義**  
 園分 功一郎（このぶみ・こういちろう） ■ 高崎経済大学経済学 准教授  
 1974 年生まれ。東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。博士（学術）、主な著書に、「中絶後の世界——産婦と産後の存在学」（医学書院）、「近代政治哲学——自由・正義・共和」（ちくま新書）、「戦と道徳の倫理学 権威批判」（北村出版）、「あるべき民主主義——今争うべき2020 年を軸に近代政治哲学の疑問」（30年分冊新書）、「フェリスの哲学序説」（読者選書）、「スリッパの哲学」（みすず書房）。

13:50～14:20 **特別講演** **地域らしさの未来を考える**  
 —ともに作りともに使う未来デザインの“型”とは？  
 熊澤 暉一（くまざわ・てるかず） ■ 総合地球環境学研究所 准教授  
 東京大学大学院総合理工学研究所（学芸知識工学）、博士（工学）、専門は環境計画、地域創生学、まちづくり、「World Design Process of the Sustainability Science Ontology for Knowledge-sharing to Support Co-deliberation」(Sustainability Science, Vol.7(2), 2014)、「産出型アルゴリズムを用いた「考のまわり」の構築：社会の合意形成過程の記述に関する基礎的研究」(『計算科学』第26巻第2号、2003) など。

14:20～15:00 **ポスターフラッシュ発表（各2分）**  
 会場：ポスター展示場（30分）

**第二部** 会場：4F K401 教室・K402 教室

15:30～17:00 **ワークショップ**

**ワークショップ**は事前申込が必要です。  
 詳細ご希望の方は e-mail で、  
 ①氏名（ふりがな） ②所属 ③e-mail アドレス  
 ④電話番号 ⑤関心分野・テーマ  
 を明記して、下記までお申込みください。  
 申込みを完了された方は、e-mail にて返信いたします。  
 定員 40名（先着順）

申込先 **総合地球環境学研究所 応酬室**  
 e-mail : [mashikomori@chikyuu.ac.jp](mailto:mashikomori@chikyuu.ac.jp)  
 申込締切 **2019年1月15日（月）**

※ 2019年1月15日（月）17:00～17:30 申込受付終了。2019年1月16日（火）10:00～10:30 申込受付終了。

**【お問い合わせ】**  
 東京大学総合理工学研究所 大学院総合理工学研究所  
**総合地球環境学研究所**  
 〒803-8547 京都府京都市南区九条4-4  
 広報室 166 | 075-707-5218  
 ※平日午前9:00～17:00 にお電話にてお問い合わせください。  
 受付時間：平日午前9:00～17:00  
 2019年1月16日（火）10:00～10:30 受付終了

**東京大学 駒場キャンパス 21 KOMCEE West**  
 〒113-0033 東京都文京区駒場2-1-1  
 アクセス  
 東京大学駒場 駒場駅南口  
 徒歩15分程度



第10回 地球研東京セミナー

大きな心

# 地球環境と生活文化

## ——人新世における学び

インターネット  
同時配信を行います。  
<http://www.chireu.ac.jp/>

東京大学駒場キャンパス  
会場 アドミニストレーション棟3階 学際交流ホール

「私たちが絶的に重視するもの、清潔さ、愛情や信念が内面から変わらして、倫理観が軌跡したことなごなかった」一筆横濱理字者アトール・レオポルトの言葉です。

育られた物を消費する力から、益に転じる物を探し出す力へ、私たちが価値を築く力が変わる時、私たちの価値観にもきっと大きな変化が訪れるはず、想事はより少しゆっくりと変わらぬでしょう。そこにあるのは、達成を待たずして気づくことに価値が置かれる未来です。

日々の暮らしも、デザインも、私たちが好むしほ。その答えを「シンプル」に求めます。しかし、倫理観に変化が訪れた未来を想像するには、「シンプルに生きるとはどういうことか」を問わねばならないでしょう。この問いを深めるべく、本セミナーでは、無印良品の商品開発に携わってきた矢野直子さんと、哲学者野田順一郎による講演と対談、大学職生や研究者による研究結果のポスター発表を行います。これらを通して、日常の中の様々な気づきと地球規模の倫理問題とをつなぐ石のつなごを、皆で考えてみませんか。

★

日時 2018 12/15 Sat  
13:00~17:00  
入場無料・申込不要

講演者 矢野直子  
株式会社良品計画 生活雑貨部 企画デザイン室長

対談者 野田順一郎  
明治大学理工学部 准教授

ローカルとグローバル、  
今に生きる民具を考える。  
矢野 直子

いまなぜ民具か？  
野田 順一郎

主催：大分県立総合研究機構 大分大学研究推進課 総合地球環境学研究所  
共催：東京大学大学院博士課程教育リーディングプログラム「多文化共生・統合人間学プログラム」(HSE)

第10回地球研東京セミナー

「地球環境と生活文化——人新世における学び」

日時：2018年12月15日(土)

会場：東京大学駒場キャンパス



第10回地球研東京セミナー  
**地球環境と生活文化——人新世における学び**

**プログラム**

13:00 **挨拶**  
 森山 工 東京大学大学院博士課程教育リーディングプログラム「多文化共生・統合人間学プログラム」のコーディネーター  
 安成 哲三 総合地球環境学研究所 所長

13:30 **ポスターフラッシュ発表 (各2分)**  
 14:00 **ポスター展示**  
 事前に下記のキーワードで情報収集し、地球と地域の持続可能な社会に学ばせる魅力を知ってください。大学別生や研究者のポスターの展示と、フラッシュ発表を行います。

日語、英語、書道、ローカル、農業、森林、シンガポール、フランス、韓国、インクルーシブ、生活文化、健康、IT、教育、美術、人類学、食料安全、コミュニティ、環境教育（環境あかし）、地域経済、防災教育、資本主義、コモンズ、自然環境保護（保護・再生、社会環境、生活環境）、人間と社会にかかわる論文

15:00 **ローカルとグローバル、今に生きる民具を考える。**  
 矢野 直子 株式会社民具計画 生活経済部 企画デザイン室長  
 東京造形大学。卒業後、株式会社民具計画。2002年、株式会社民具計画入社。2013年より、株式会社民具計画デザイン室長を務める。2017年より東京造形大学総合デザイン学科非常勤講師。

15:30 **いまなぜ民具か？**  
 萩田 崇 明治大学理工学部 教授  
 筑波大学卒。筑波大学大学院修士課程修了。専門は、哲学・建築・人文学。地球研を経て、2014年より現職。著書に、「民具とインテリジェンス」(筑波大学出版会 2010)、「生活文化」(筑波大学出版会 2017)、「民具」(2018) 等。

16:00 **休憩 (10分)**

16:10 **地球環境と生活文化 矢野 直子 / 萩田 崇**  
 司会：梶谷 真知 東京大学大学院総合文化研究科 教授

17:00 **閉会**

会場：東京大学駒場キャンパス  
 アドミニストレーション棟3層 学際交流ホール  
 〒113-8654 東京都文京区駒場3-2-4

アクセス  
 ・東上線の駒場 駅南口徒歩 東大目より徒歩  


【お問い合わせ】  
 総合地球環境学研究所 広報室 tel: 075-707-2126  
 〒113-8654 東京都文京区駒場3-2-4  
 ※平日の8:30～17:00の間に問い合わせください。

---

## 続・コンヴィヴィアルな社会へ

第10回地球研東京セミナー「地球環境と生活文化——人新世における学び」  
報告書

2019年3月発行

編集 総合地球環境学研究所 広報室  
熊澤 輝一・和出 伸一・木村 葵

発行 総合地球環境学研究所  
〒603-8047 京都市北区上賀茂本山457番地4  
Tel.075-707-2100 (代表)  
Fax.075-707-2106 (代表)  
<http://www.chikyu.ac.jp>

印刷・製本 北斗プリント社

---

ISBN : 978-4-906888-57-3



ちきゅうけん

発行



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構  
総合地球環境学研究所

非売品

ISBN 978-4-906888-57-3